

国道212号（中津日田道路：本耶馬溪—耶馬溪）
道路改良工事に伴う埋蔵文化財調査報告書

古 庄 屋 遺 跡

2002

大分県教育委員会

国道212号（中津日田道路：本耶馬溪一耶馬溪）
道路改良工事に伴う埋蔵文化財調査報告書

こ じょう や
古 庄 屋 遺 跡

2002

大分県教育委員会

序 文

本書は国道212号（中津日田道路：本耶馬溪－耶馬溪）道路改良工事に伴い、大分県教育委員会が発掘調査を実施した古庄屋遺跡の調査報告書であります。

当遺跡が所在する本耶馬溪町は、奇岩、秀峰が溪流や樹木と絶妙な調和をなす「名勝 耶馬溪」の指定地域になっています。歴史的にも、県指定史跡粉洞穴にみられるように、縄文時代から生活の跡を追うことができます。そうしたなかで古庄屋遺跡では、中世における館の姿を明らかにすることができました。これは、本耶馬溪町のみならず大分県の歴史時代研究には欠くことのできない資料となるものと考えます。今後、この成果が広く活用され、文化財の保護・啓発並びに地域史研究の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、調査に御協力をいただいた関係各位に衷心より感謝申し上げます。

平成14年3月29日

大分県教育委員会教育長

石 川 公 一

例 言

1. 本書は、平成12年度に実施された下毛郡本耶馬溪町大字落合所在の古庄屋遺跡発掘調査の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、国道212号（中津日田道路：本耶馬溪一耶馬溪）道路改良工事に伴い、県中津土木事務所の依頼により大分県教育委員会が実施したものである。また、平成13年度には発掘調査報告書作成にむけての整理作業を行った。
3. 調査の実施にあたり、本耶馬溪町教育委員会の協力を得た。
4. 遺構の実測は調査員の高橋信武、後藤一重、井川泰成、東保春奈、平野真由美、五十川雄也が行った。
5. 遺構の写真撮影は調査員の後藤一重、井川泰成が行い、空中写真撮影についてはスカイサーベイ株式会社に委託した。
6. 遺物実測及びトレースは、後藤一重、井川泰成、東保春奈、細川愛のほかに県文化課埋蔵文化財資料室作業員の助力を得た。
7. 本遺跡出土遺物ならびに遺構・遺物の実測図は、大分県教育庁文化課埋蔵文化財資料室に保管している。
8. 本書で使用する方位は、いずれも真北である。磁針方位は真北より西偏6°20′である。
9. 本書の執筆は、後藤一重が行った。
10. 本書の編集は、後藤一重が行った。

目 次

第1章 はじめに	1
1 調査にいたる経過	1
2 調査団の構成	1
第2章 歴史的環境	2
第3章 調査の概要	4
1 掘立柱建物跡	9
2 土壇墓	17
3 土壇	22
4 竪穴	47
5 井戸	54
6 溝	60
7 土器一括埋納遺構	63
8 その他の遺構・遺物	64
第4章 まとめ	69
1 古代・中世の土器祭祀遺構—大分県の例から—	69
2 古庄屋遺跡出土土器の年代的位置付けと遺跡の性格	77

第1章 はじめに

1 調査にいたる経過

古庄屋遺跡は、大分県下毛郡本耶馬溪町大字落合字古庄屋に所在する。

遺跡の位置する本耶馬溪町は、大分県の北部にあり北側は福岡県と接する。町の北部には、県北を代表する河川である山国川が南から北に流れる。この山国川に屋形川、跡田川などが東側から流れ込むが、まとまった平野部は少なく、河川に沿った狭小な谷底平野が形成されるのみである。一方、河川に浸食された山々には奇岩が連なり独特な山容を呈している。このような山容が続く本耶馬溪町をはじめ隣接する耶馬溪町なども含めた広い地域は国の「名勝 耶馬溪」に指定されており、大分県を代表する景勝地となっている。本耶馬溪町では、文豪菊池寛の小説「恩讐の彼方に」の舞台になった青の洞門や、古刹の羅漢寺などが風光明媚な観光地として観光客を集めている。

調査は、国道212号（中津日田道路：本耶馬溪一耶馬溪）道路改良工事に伴い実施された。中津日田道路は、県内の道路交通網体系整備に係わる高規格道路で、その完成が急がれているものである。今回調査を実施した地区は、平成12年度事業実施予定地として、平成11年度末に県土木建築部企画検査室を通じ県中津土木事務所から事前の分布調査依頼があった。これを受けた県教育委員会文化課は、平成12年度当初に分布調査依頼のあった地区すべてで分布調査を実施した。その結果、当地区は遺跡の存在する可能性が高いため事前の試掘調査が必要であると判断された。試掘調査は、用地買収等の終了した平成12年11月に、県中津土木事務所からの依頼により行われた。試掘調査では、中世の遺構・遺物が一部において確認されたため、県中津土木事務所と協議を行い、遺跡の確認された部分について本調査を実施することとした。本調査は、平成13年1月9日から3月13日の間実施された。この間、大雪や寒波にみまわれ作業は困難をきわめたが、作業員の献身的な協力により現場を終了することができた。また、3月10日には本耶馬溪町教育委員会とともに現地説明会を開催し、多くの人々が見学に訪れた。さらに、平成13年度には報告書作成にむけた整理事業を行い、平成14年3月に本書の刊行にいたった。

2 調査団の構成

調査主体	大分県教育委員会	
調査総括	大分県教育委員会教育長	田中恒治（平成12年度）
	大分県教育委員会教育長	石川公一（平成13年度）
	大分県教育庁文化課課長	山本芳直（平成12年度）
	同 課長	工藤正徳（平成13年度）
	同 参事兼課長補佐	伊藤正行（平成12年度）
	同 参事兼課長補佐	麻生裕治（平成13年度）
	同 参事兼課長補佐	清水宗昭
	同 主幹	高橋 徹（平成13年度）
	同 主幹兼埋蔵文化財第2係長	栗田勝弘（平成12年度）
	調査員	同 主幹
同 主査		後藤一重
同 主査		井川泰成
同 嘱託		東保春奈
同 嘱託		平野真由美（平成12年度）
同 嘱託		五十川雄也

第2章 歴史的環境

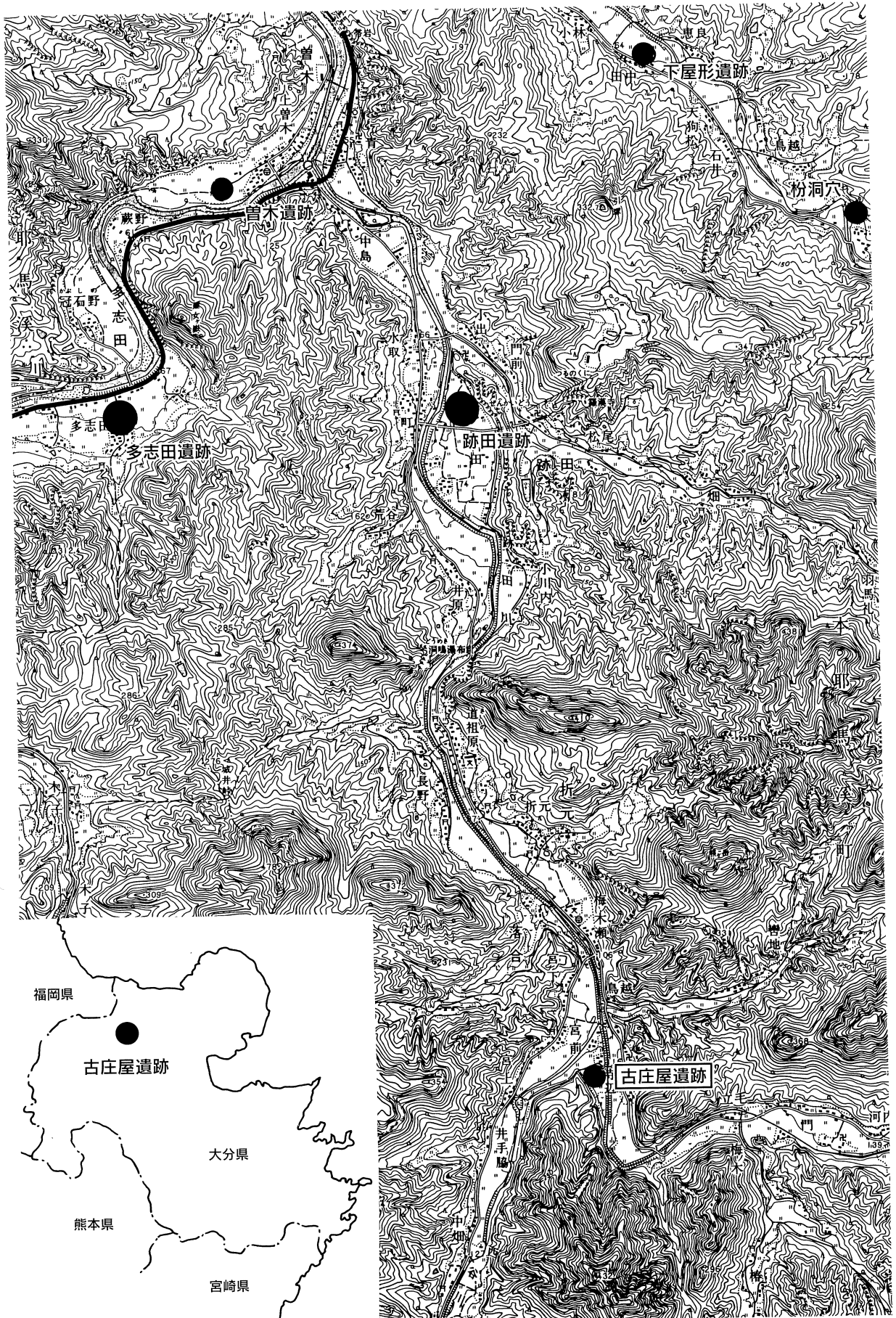
本耶馬溪町は、県北有数の河川である山国川流域に位置する。山国川は大分県北西部の山々から水を集め、中津市で周防灘に注ぐが、流域の多くの地域で狭小な谷底平野が続く地形をなす。しかし、河口部の中津市では広大な沖積平野が形成される。流域の遺跡についてみると、中津市の沖積平野周辺では多くの遺跡が確認されており、古くから県北地域の拠点的な地域であったことが伺える。また、中津市と本耶馬溪町の間にある三光村については、沖積平野や山国川を望む台地状の地形を呈するが、多くの遺跡を確認することができる。しかし、三光村から山国川を遡り本耶馬溪町にはいと遺跡数は激減する。地形的にも平野部は少なくなり、山国川や支流の河川沿いに狭小な平坦面が形成されるのみである。中津市や三光村に比べて本耶馬溪町の遺跡数が減少する要因として、この地形的な面が大きいと考えられる。特に、弥生時代以降における、中津市・三光村と本耶馬溪町域の遺跡数の差は顕著である。

本耶馬溪町内では、これまで考古学的調査の事例が少なく、遺跡数の少なさとあわせて考古学的情報のみで本耶馬溪町の歴史を構築していくには困難な状況である。時代を追って遺跡をみてみると、旧石器時代についてはこれまでのところ遺跡が確認されていない。県北全体をみても旧石器時代の遺跡は少なく、今後の調査・研究に期したい。

縄文時代では、多数の人骨が検出された粉洞穴が著名である。粉洞穴は山国川支流の屋形川沿いにあり、別府大学により調査された。洞穴は屋形川の右岸に位置し、屋形川の浸食により形成されたものである。洞穴の規模は間口11m、奥行き9mを測り、南に面して開口している。洞穴から検出された縄文人骨は66体にもおよび、九州では縄文時代最大の埋葬遺跡である。時期的には早期、前期、後期の人骨があり、人骨とともに多数の土器や石器、装身具、自然遺物などが出土した。オープンサイトの遺跡についても縄文時代の遺物がいくつか確認されているが、規模的にはいずれも小規模である。粉洞穴と同じ屋形川流域に所在する下屋形遺跡では、早期の押型文土器が出土している。また、山国川沿いの多志田遺跡では晩期の遺物が、山国川支流である跡田川流域の跡田遺跡では後・晩期の遺物が各々確認されている。

弥生・古墳時代では、山国川支流の屋形川流域にある下屋形遺跡が本地域を代表する遺跡となっている。下屋形遺跡は、県営圃場整備事業の実施に伴い調査されたもので、屋形川の左岸に位置する。遺跡からは31基の竪穴と溝などが確認されており、時期的には弥生時代中期から6世紀代に及ぶ。地形的な要因もあり大規模な遺跡が少ない山国川上・中流域にあって、下屋形遺跡はこの地域における最大規模の遺跡である。山国川本流沿い地域は、山国川上・中地域にあって比較的広い平坦面がみられる地域である。しかし、これらの地域で圃場整備事業などに伴う試掘調査がいくつかなされたが、大規模な弥生・古墳時代集落は確認されていない。これは山国川の河床が低く、そのため山国川の水を直接的に農業用水として利用しにくいと思われる。これに対し、山国川支流の小河川では河川を利用した用水確保が、比較的初期の水田開発段階でも可能であったと考えられる。よって、これに伴う集落も山国川本流沿いよりも、支流の流域に形成されていったことが想定される。

古代以降については、下屋形遺跡で中世の遺構・遺物が確認されている。下屋形遺跡では、掘立柱建物、土壌墓、溝、井戸などの遺構が検出されたが、このうち井戸は農業用の井戸であると考えられる。井戸はいずれも農業用水路と思われる溝に近接しており、素掘りで、深さも1m程である。これら井戸の位置する場所は、遺跡内でもやや高い微高地にあたり、水不足の影響を受けやすい水田が広がっていたものと想定される。河川から水路を利用し用水を確保するにあたり、しばしば水不足の心配があったものと思われる。検出された井戸は、河川灌漑を補う農業用の井戸であったと考えられる。

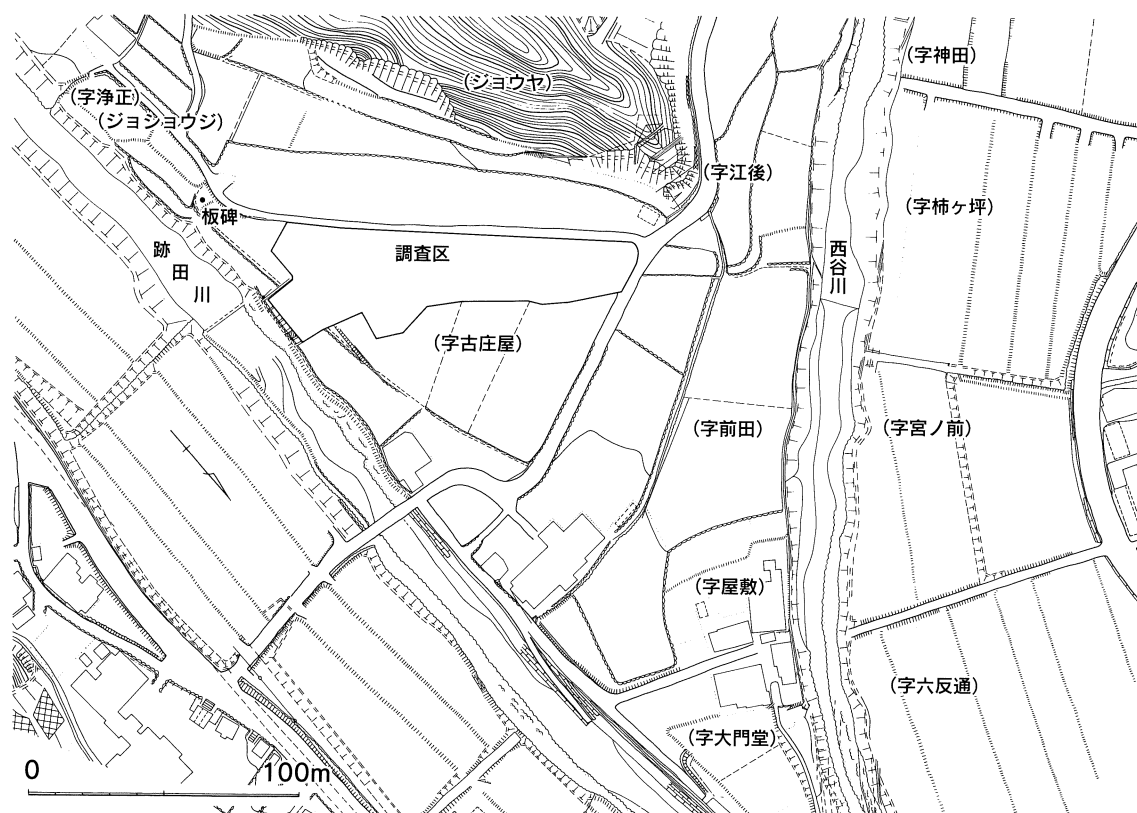


第1図 古庄屋遺跡と周辺の遺跡

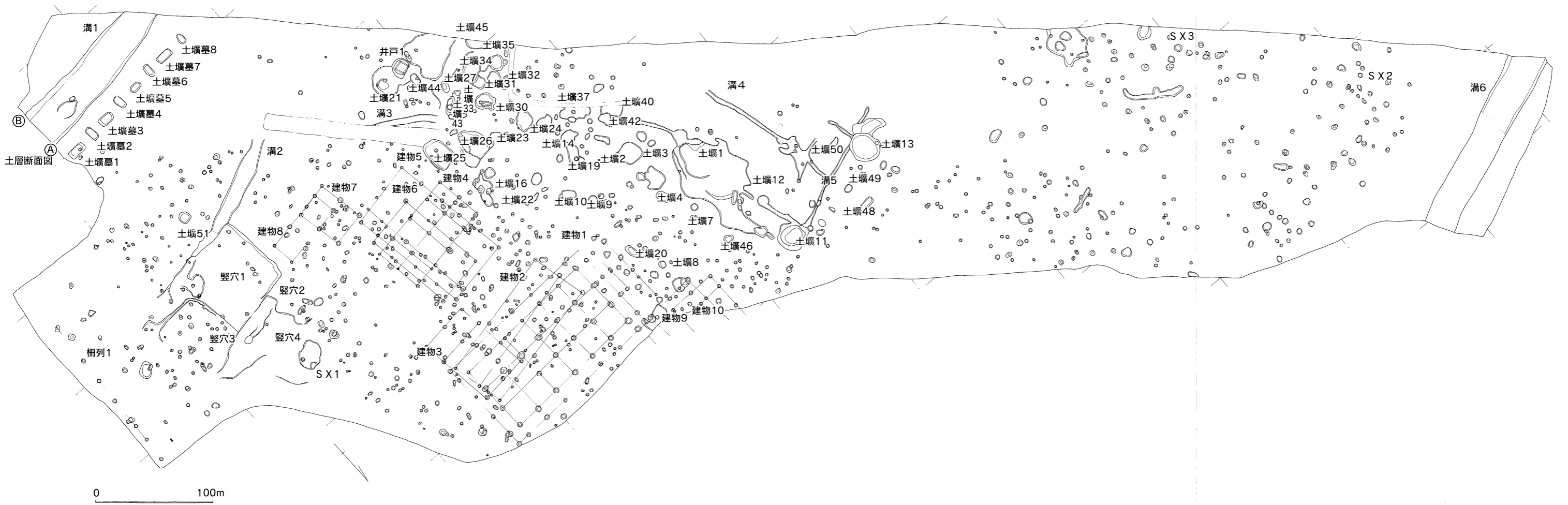
第3章 調査の概要

古庄屋遺跡は、山国川の支流である跡田川に西谷川が合流する地点に位置する。跡田川流域を東谷、西谷川流域を西谷と呼び、各々の谷とも谷底平野が細長く続く。本遺跡が立地する場所は、このふたつの谷が会う部分で、まとまった平坦面が少ない地域にあって平坦面が比較的広く展開する。標高は110m余を測り、遺跡の前面を跡田川と西谷川に、背後を丘陵に囲まれた要害の地となっている。跡田川、西谷川とも岩を深く侵食し、切り立った川岸は5m以上である。前面をこの深い川により画された古庄屋遺跡は、大規模な堀により守られたに等しい状況である。さらに、この地は東谷と西谷が会う交通の要衝でもあり、両方の谷を押さえるという意味において最も重要な地点であったと考えられる。また、遺跡に隣接して「浄正」、「前田」、「屋敷」などの字名に加え板碑もみられ、中世的な景観が想起される。加えて、背後の丘陵は「ジョウヤ」と呼ばれており、山城に関連する遺構の存在が想定される。

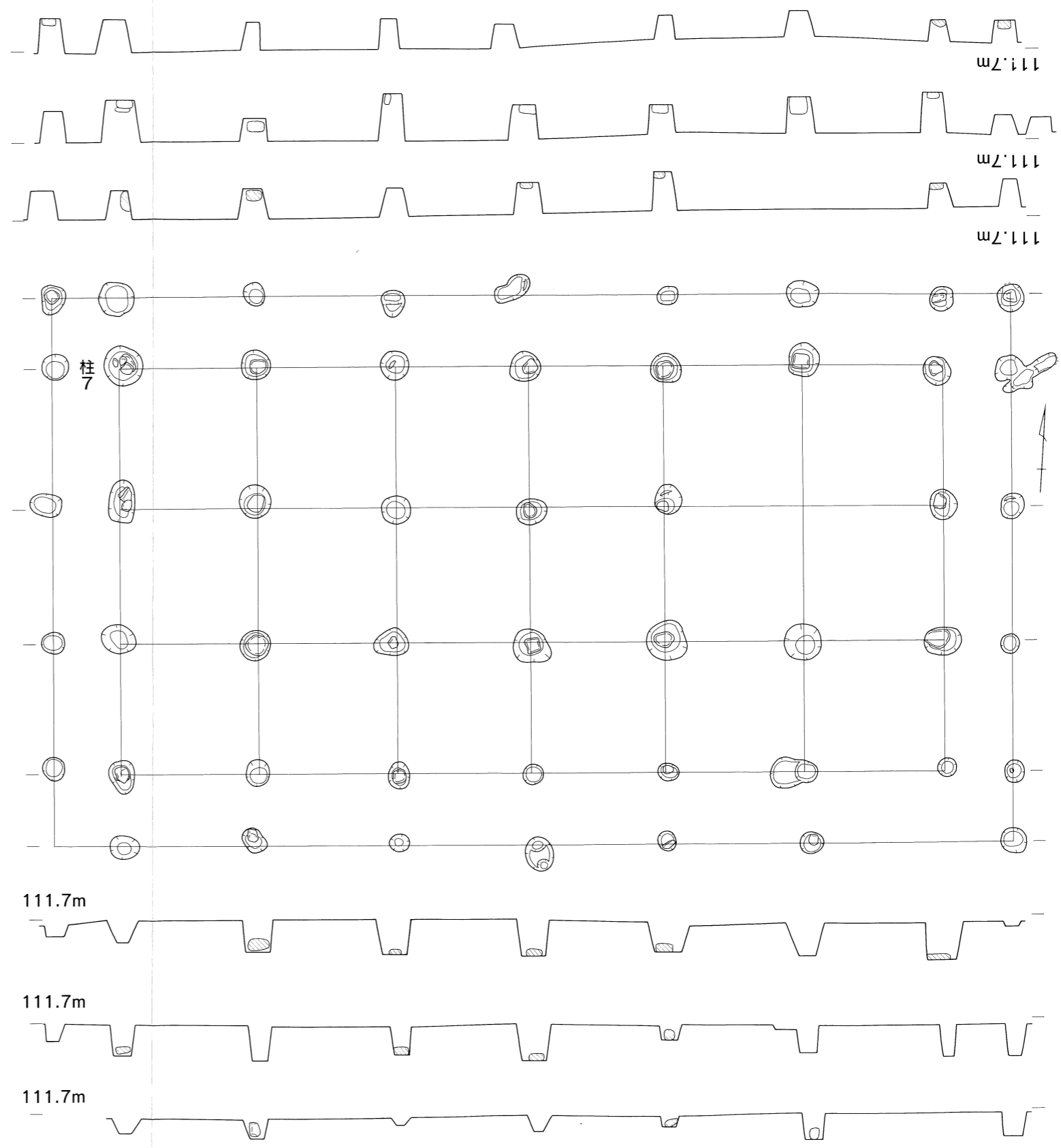
調査面積は約3000m²で、現状の水田床土直下ないしは床土下30cmで遺構検出面に達する。遺構検出面は黄褐色土ないしは黒色土で、一部は基盤の砂礫層が露出する。検出した遺構は、掘立柱建物跡、土壇墓、土壇、竪穴、井戸、溝、土器一括埋納遺構などで、いずれも中世のものである。以下、その概要を述べる。



第2図 古庄屋遺跡と周辺の地形



第3図 古庄屋遺跡遺構配置図



第4图 古庄屋遺跡 建物1

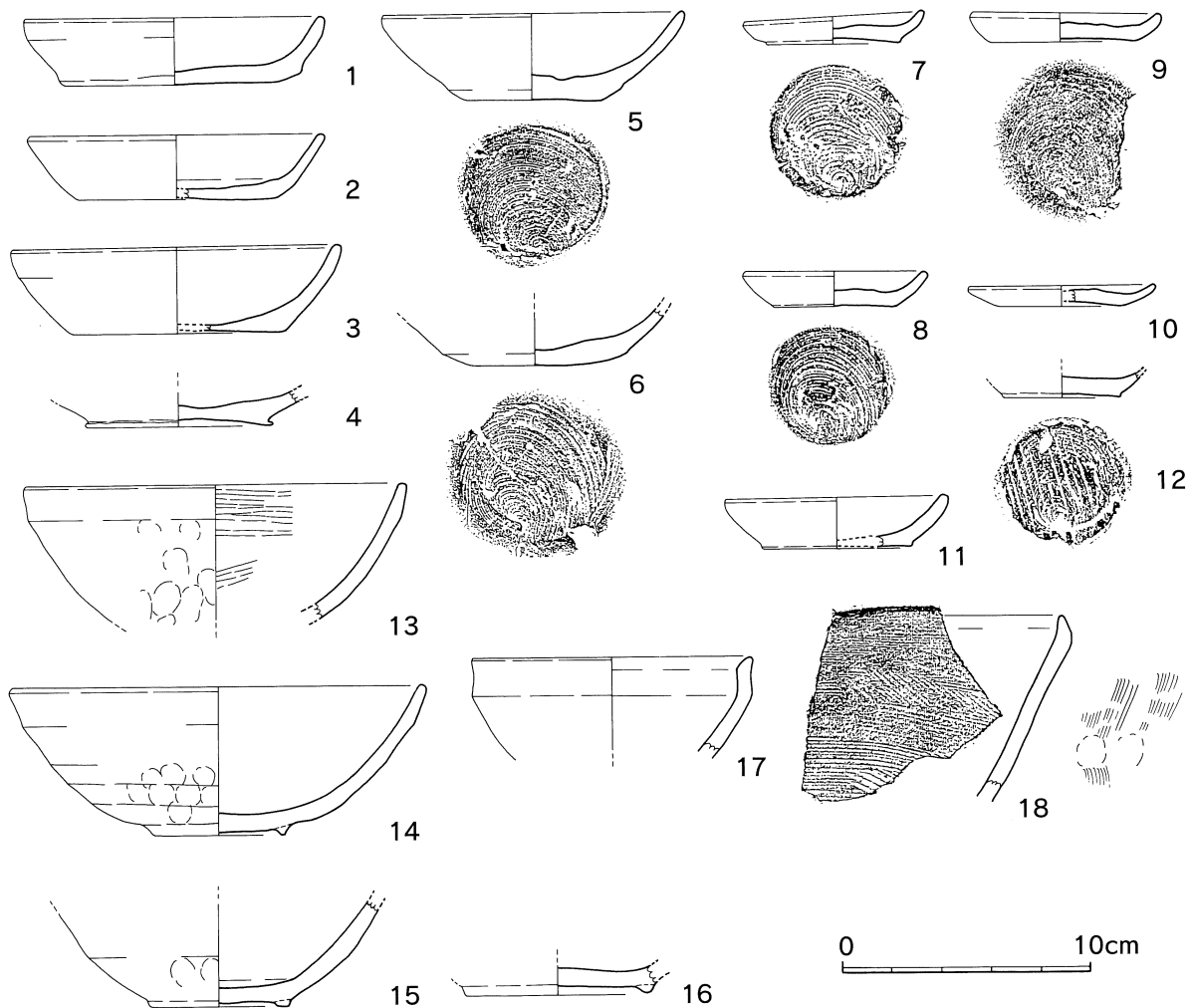
1 掘立柱建物跡

掘立柱建物跡は10棟が確認された。これらの建物は、いずれも中央から南にかけて位置しており、土壌群や竈穴とは基本的に重複せずに展開する。

(1) 建物1

建物1（第4図）は屋敷地の中央付近に位置しており、溝1からの距離は40m弱を測る。建物は四面に庇をもつ東西方向のもので、その位置や規模から主殿的性格を有するものと考えられる。規模は梁行6.2m、桁行12.8m、身舎面積79.36㎡で、本遺跡の建物のなかでは最も大型である。建物の方位はN86°Eである。また、四面に付される庇の柱列は、各々の側柱列から1.1mの位置にある。身舎は梁行3間、桁行6間で、総柱状に柱穴を配する。身舎部分の柱穴の多くには、柱穴の底に径20~40cmの扁平な石が敷かれている。石の多くは河原石である。これに対し庇部分の柱穴では、石敷きのものが少ない。

建物の柱穴から多くの土器が出土した（第5図）。1~6は土師質土器杯で、1~3が底径に比し器高の低いもの、4~6が底径に比し器高の高いものである。口径は1が12.0cm、2が11.8cm、3が13.1cm、5が12.0cmを測る。7~12は土師質土器小皿で、このうち11は口径、器高とも他の小皿より大きい。口径は7が7.2cm、8が7.3cm、9が7.6cm、10が7.4cm、11が8.9cmを測る。13~16は瓦器碗である。13は口径15.2cmを測るもので、外面には指頭痕がみられるのみでミガキは確認できない。内面には横方向のヘラミガキが施される。14は口径16.5cm、器高5.8cm、底径5.2cmを測る。内外面ともヘラミガキは認められず、高台も低いものが付される。



第5図 古庄屋遺跡 建物1 出土遺物

15は底径5.4cmで、やはり内外面ともヘラミガキはみられない。17は青磁碗で、口径11.2cmを測る。比較的小型のもので、口縁部が内側に屈曲する。18は瓦質土器鉢である。外面にハケメと指オサエが、また内面にもハケメが施される。

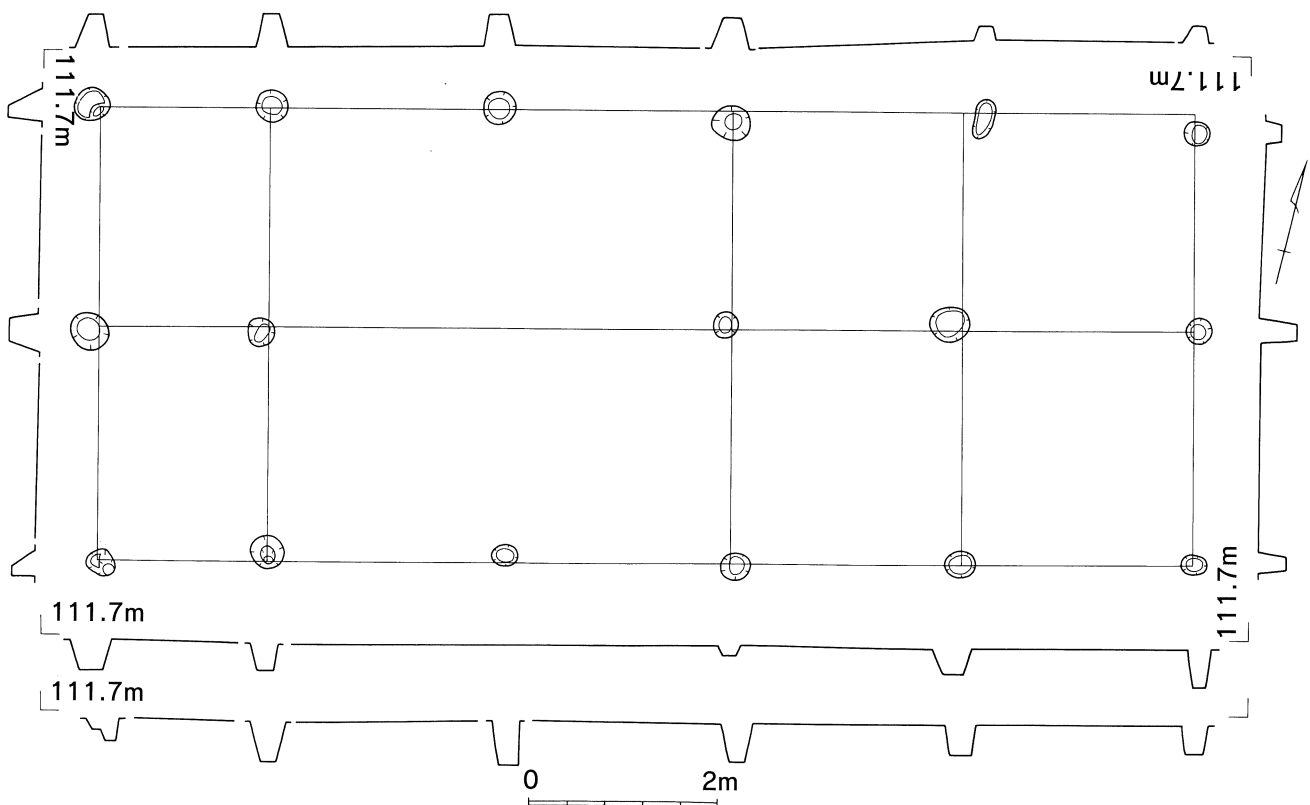
以上のうち1、5、7、8、11、17は身舎部分の西北隅の柱穴である柱7より出土したものである。7は完形で、5、8も完形にちかい。これらは、この建物の地鎮等に関する祭祀に係わるものであろう。

(2) 建物2

建物2（第6図）は、建物1と建物3に重複する。建物1と同様に東西方向に長軸をもつものであるが、方位をやや異にする。

建物は桁行5間、梁行2間の規模を有するもので、方位はN77° Eである。身舎面積は55.68㎡で、一般的な建物の倍ちかい大きさである。建物は長細い感を呈するもので、柱穴の配置は総柱的な状況に配される。柱間距離をみると、南北の桁行とも西端の1間が他の柱間より短い。また、柱穴内には建物1でみられたような石敷はみられず、柱穴自体もやや小さめの印象がもたれる。

建物の柱穴から若干の遺物が出土したが、図示できるものはなかった。建物1にみられたような祭祀行為も認められなかった。



第6図 古庄屋遺跡 建物2

(3) 建物3

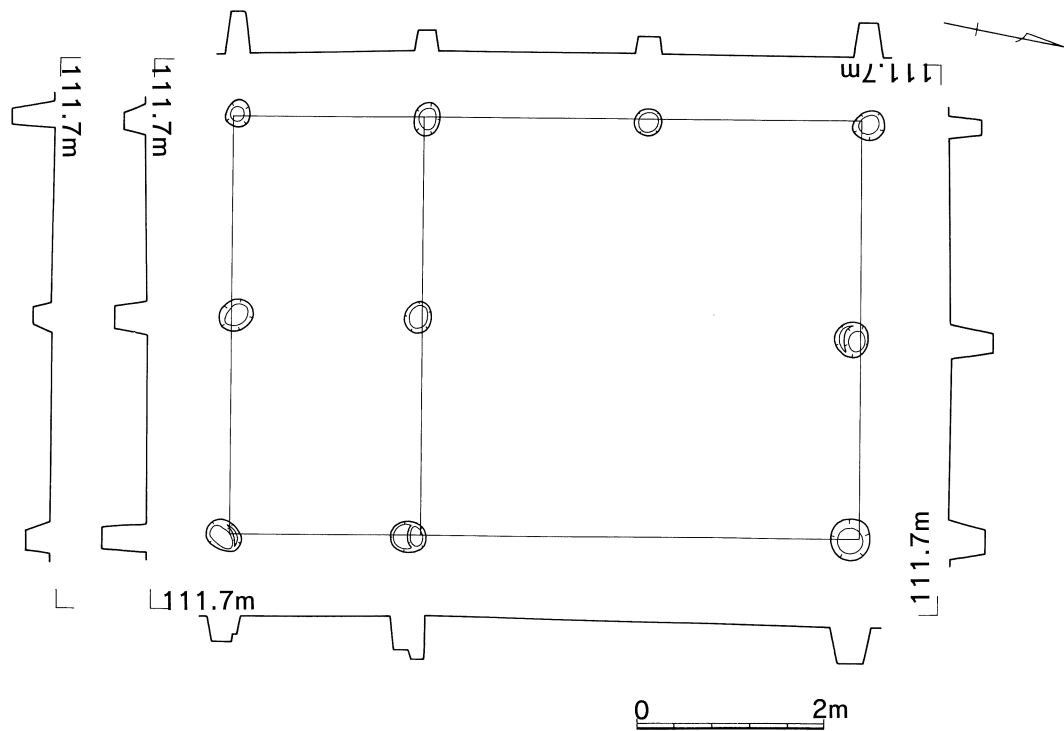
建物3（第7図）は、建物1と建物2の東側部分と重複する位置にあるが、これらに比べるとかなり小型である。3棟の建物は、各々方位を若干異にする。

建物は南北方向に長軸をもつもので、梁行2間、桁行3間の規模を有する。建物方位はN11° Wである。柱穴

の配置をみてみると、東側桁行の北から2番目の柱穴を欠く。また、柱間距離は、東西の両桁行とも最も南よりの1間分が、他よりも30cm程短い。建物規模は29.48㎡で、建物2の約半分である。しかし、この時代の掘立柱建物としては平均的なものである。

建物3と他の建物との関係を見てみると、建物3の西側桁行のラインが、南側にある建物5の東側庇のラインに一致する。この状況は、かなり計画性の高い配置と考えられ、よって、両者は同じ時期の建物である可能性が高い。

建物の柱穴から出土した遺物のなかで、図示できるものは少ない(第8図)。1は土師質土器杯である。口縁部を欠く資料で、底径8.8cmを測る。底部は回転糸切り後板状圧痕がみられる。



第7図 古庄屋遺跡 建物3



第8図 古庄屋遺跡 建物3 出土遺物

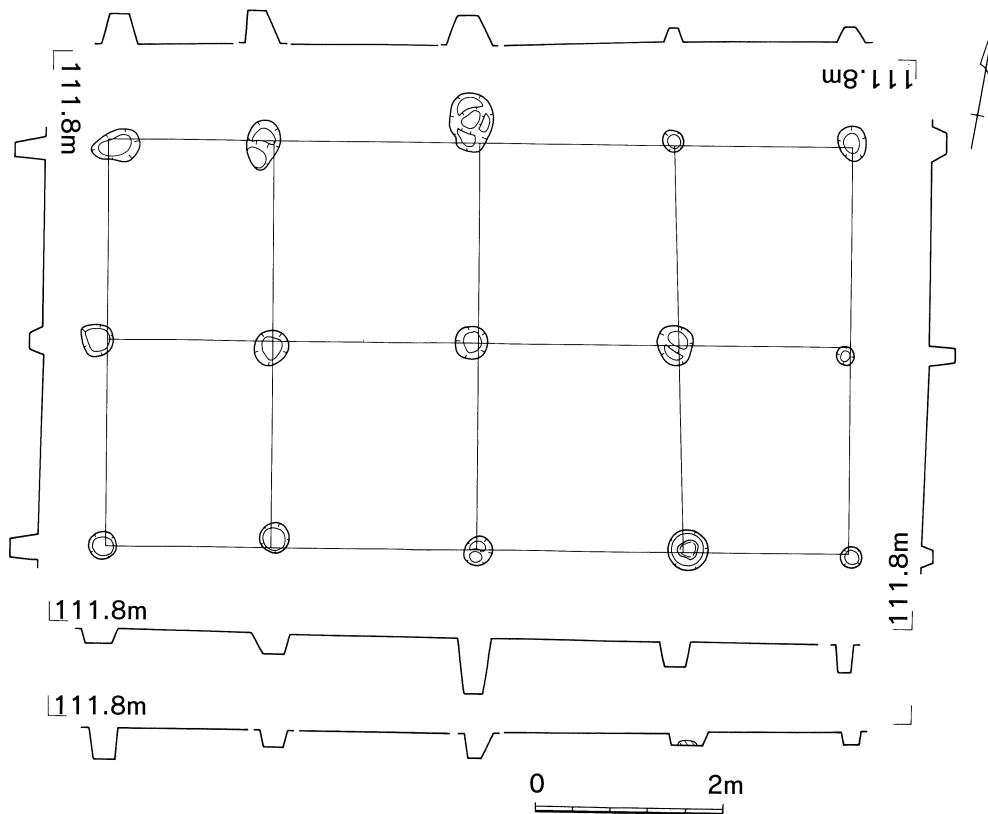
(4) 建物4

建物4(第9図)は、建物1などの南側に位置し、建物5や建物6と重複する。また、建物の西側には土壌22や土壌25などの土壌群が展開する。

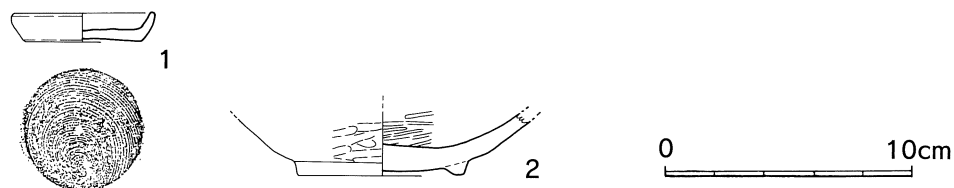
建物は東西方向に長軸をもつもので、建物方位はN80°Eである。規模は梁行2間、桁行4間で、総柱的に柱穴を配する。身舎面積は33.97㎡を測り、建物3よりもわずかに大型である。しかし、中世の建物規模からみると、標準的な大きさと言える。柱間距離については、3列の桁行列とも東端と西端の1間ずつが、中の2間よりもわずかに短い配置になっていることが分かる。

次に建物の配置をみてみると、建物2の西側梁行ラインが、建物4の西側梁行ラインと一致することから、両者が同じ時期の所産であると考えられる。

建物からの出土遺物（第10図）のうち、1は土師質土器小皿である。完形品で、口径5.8cm、器高1.1cm、底径4.8cmを測る。2は内黒土器椀で、内外面に丁寧なヘラミガキがみられる。1は南側柱列の東から2番目の柱穴である柱1から出土したものである。地鎮などの建物祭祀に係わる可能性が考えられる。なおこの柱穴のみ、柱穴の底に扁平な石を敷いているのが確認される。



第9図 古庄屋遺跡 建物4



第10図 古庄屋遺跡 建物4 出土遺物

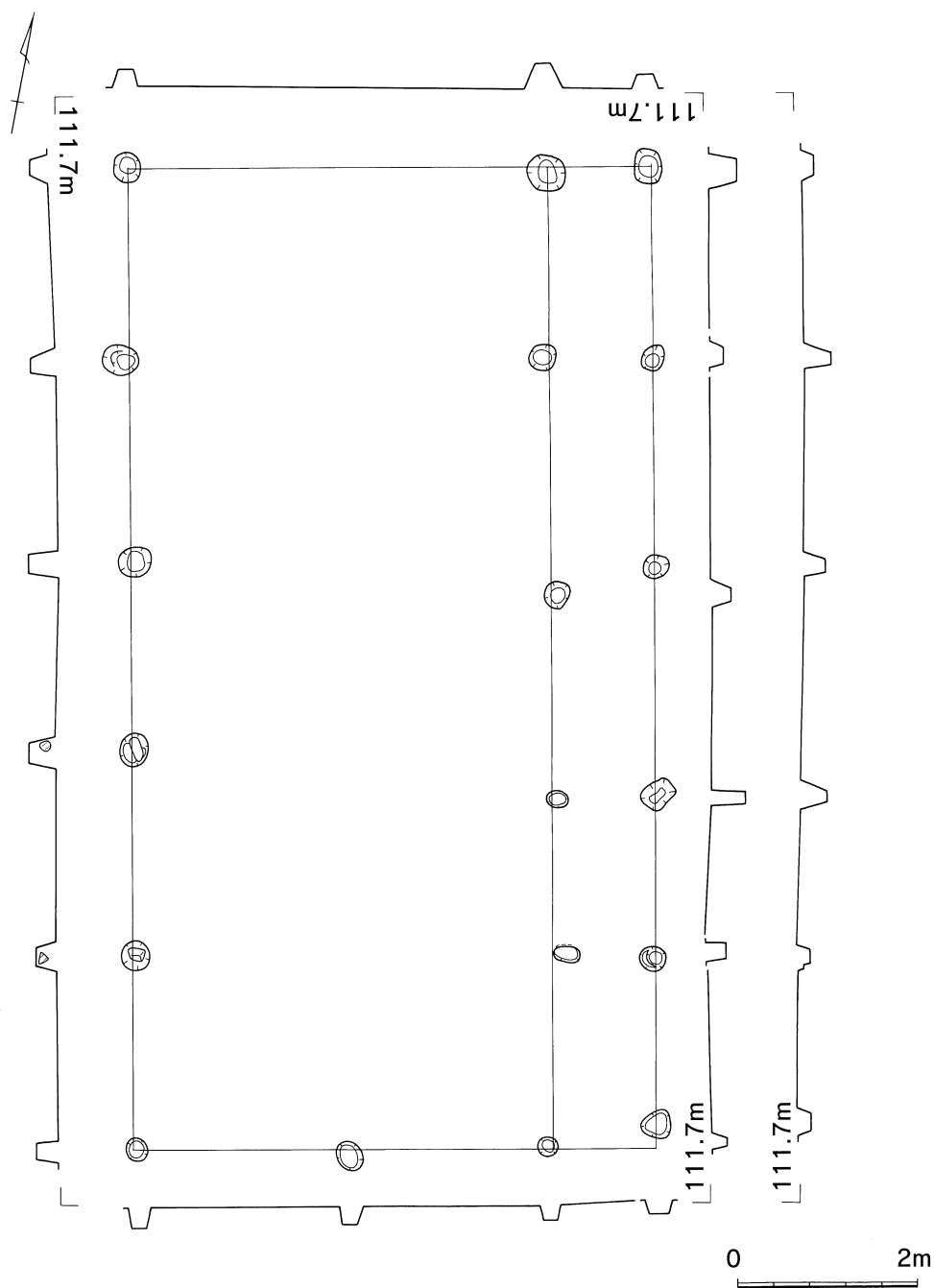
(5) 建物5

建物5（第11図）は、建物4や建物6と重複した位置にある。他の建物との位置関係をみると、前述したように、本建物の東側の庇ラインが建物3の西側桁行ラインと一致することから、建物3と同一の計画のもとに築造されたことが分かる。さらに、建物5の南東側に位置する建物8も、建物方位や位置関係から建物5、建物3と同じ時期のものであろうことが想定される。

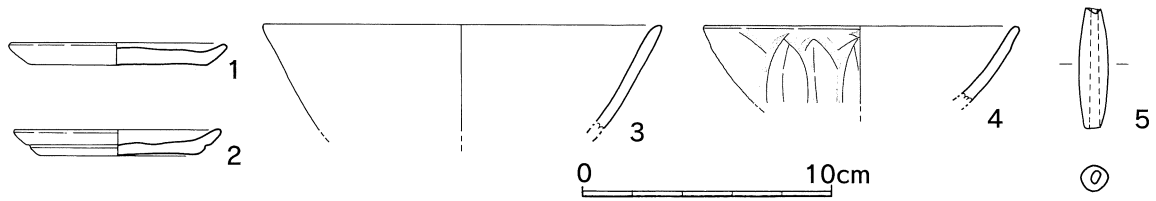
本建物は南北方向に長軸をもつもので、東側に庇を有する。建物方位はN10°Wである。身舎部分は、梁行2

間、桁行5間の規模をもち、身舎面積は48.76㎡に達する。身舎面積だけで言えば、建物1、建物2に次ぐ規模を有することになる。

建物からの出土遺物（第12図）のうち、1、2は土師質土器小皿である。1は口径8.8cm、器高0.9cm、底径7.0cmで、底部は糸切り後板状圧痕がみられる。2は口径8.3cm、器高1.0cm、底径6.2cmで、底部は糸切りである。3、4は中国製青磁碗である。3は口径15.8cmを測るもので、内外面とも文様はみられない。釉は灰緑色を呈し、貫入が入る。4は口径12.5cmのやや小振りなものである。外面には鎬蓮弁がみられる。釉は青白色を呈する。5は土錘である。長さ4.8cm、最大幅1.1cm、重量5.0gを測る。表面はていねいに仕上げられており、部分的に長軸方向のヘラミガキがみられる。



第11図 古庄屋遺跡 建物5

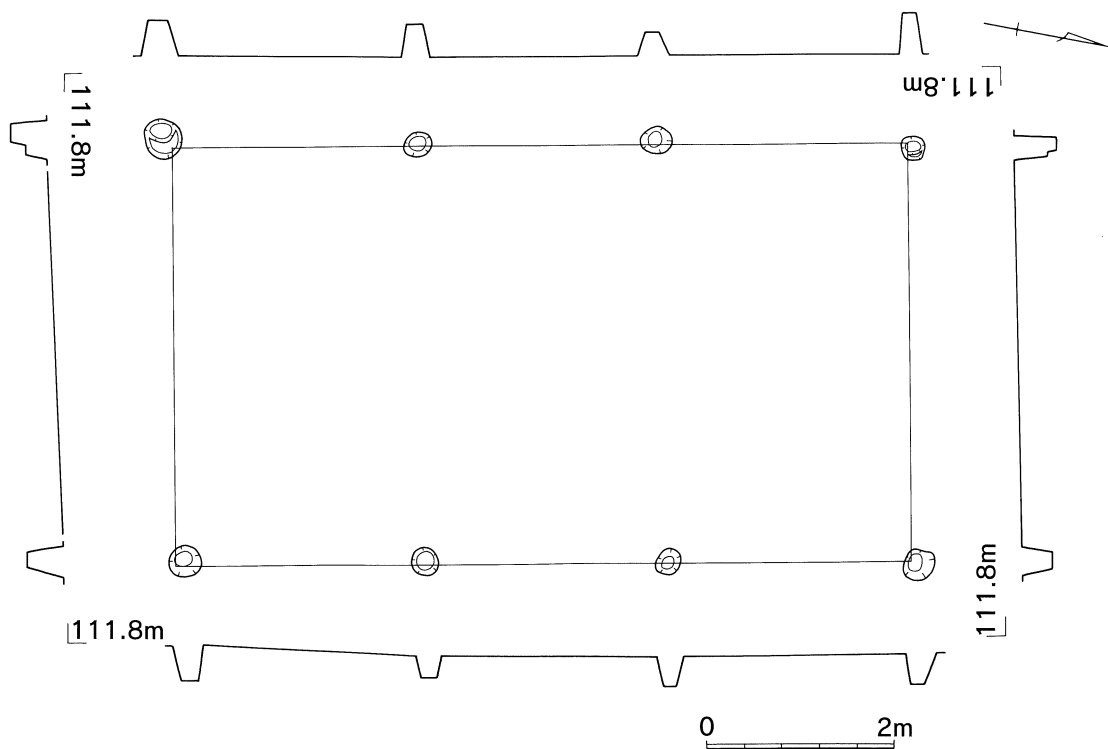


第12図 古庄屋遺跡 建物5 出土遺物

(6) 建物6

建物6（第13図）は、建物4や建物5と重複するもので、南北に長軸をもつ。建物方位はN10° Wである。建物の規模は梁行1間、桁行3間で、建物面積は34.76㎡を測る。

建物の柱穴のうち、西側桁行の南から2番目の柱穴から完形の土師質土器小皿（第14図）が出土した。土器は口径7.5cm、器高1.3cm、底径5.8cmを測るもので、底部切り離しは回転糸切りである。これについては、地鎮などの建物祭祀に係わるものと考えられる。



第13図 古庄屋遺跡 建物6

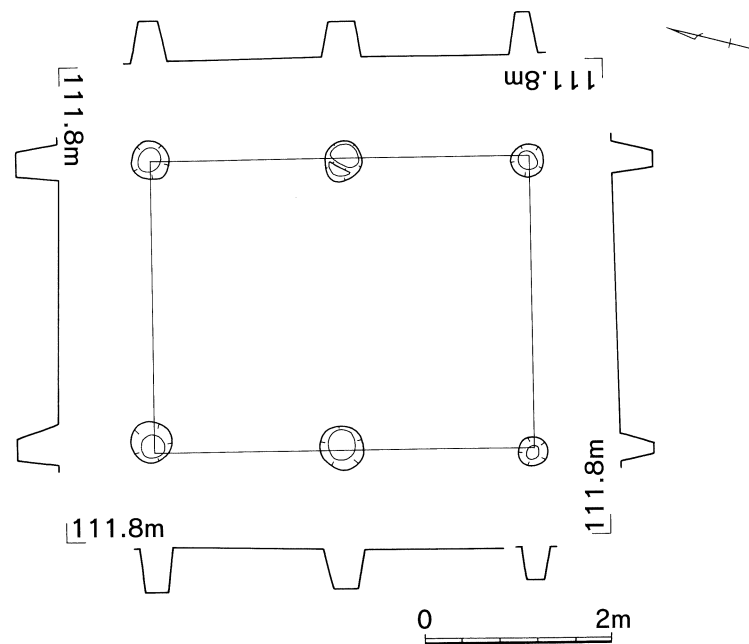


第14図 古庄屋遺跡 建物6 出土遺物

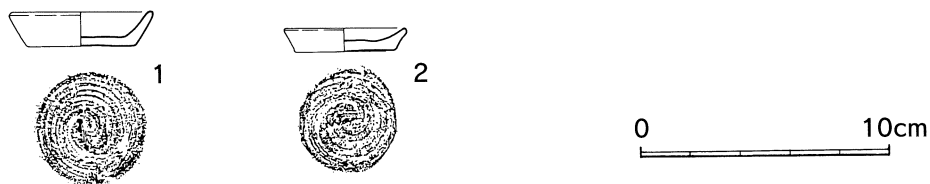
(7) 建物7

建物7（第15図）は、建物4、建物5、建物6の東南側に位置しており、建物8と重複する。建物7と建物8の東側は竪穴が4回にわたり立て替えられているが、掘立柱建物はこれら竪穴と重複しない。このことから、屋敷内における建物や竪穴などの配置に一定のルールがあったことが分かる。

建物は小型で、南北に長軸をもつ。規模は梁行1間、桁行2間で、建物面積は12.4㎡である。また、建物方位はN15° Wである。建物の柱穴からは完形の土師質土器小皿が出土した（第16図）。1は東側桁行の中央の柱穴から出土したもので、口径5.8cm、器高1.3cm、底径4.2cmを測る。2は東北隅の柱穴から出土したもので、口径4.9cm、器高0.9cm、底径4.0cmである。両者とも底部は回転糸切りで、1には板状圧痕もみられる。



第15図 古庄屋遺跡 建物7

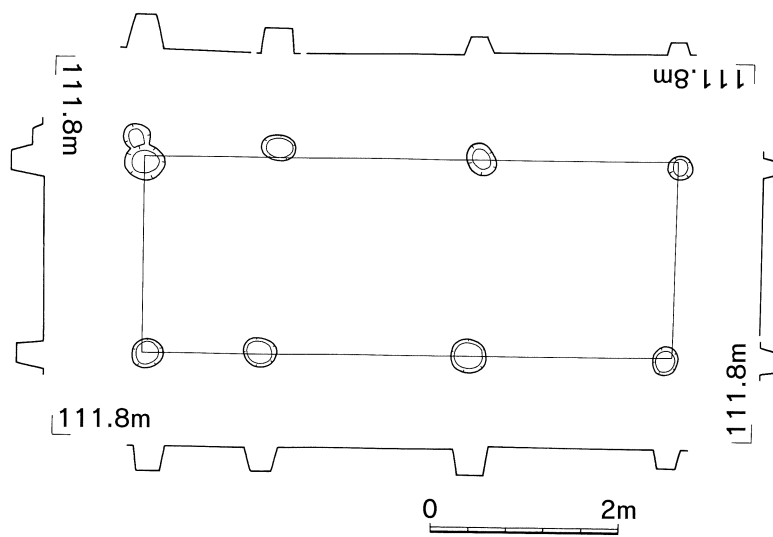


第16図 古庄屋遺跡 建物7 出土遺物

(8) 建物8

建物8（第17図）は、建物7と重複した位置にある。

建物の規模は梁行1間、桁行3間で、東西方向に長軸をもつ。建物面積は11.76㎡で、方位はN82° Eである。建物8は建物7と共に、本遺跡では小型グループに属する。建物の平面形をみても、建物8は極端な長方形を呈し、他の大型の建物とは明らかに様相を異にする。また、建物の位置をみても、建物群の最も南にあり、大型建物と場所を明らかに異にしており、これら小型の建物は、倉庫的性格を有する可能性が高い。



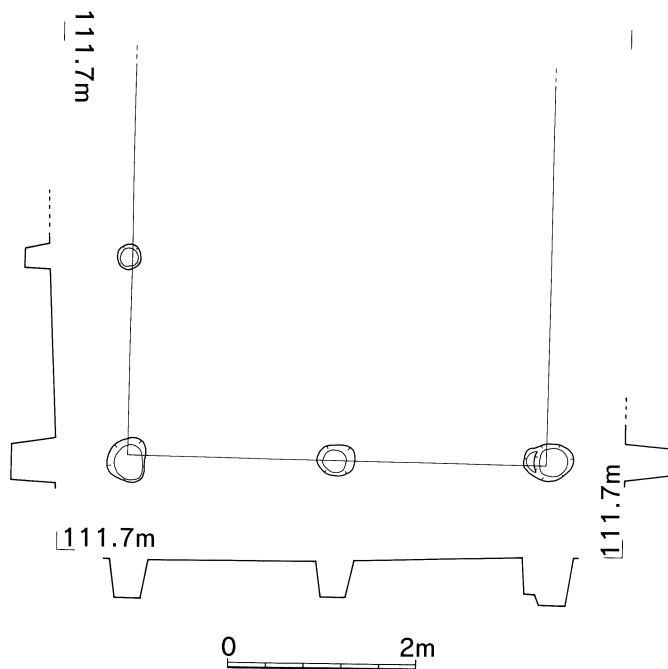
第17図 古庄屋遺跡 建物8

(9) 建物9

建物9（第18図）は、建物1の北西側に位置する。建物10と重複するが、建物の大部分は調査区外に及ぶため、その全容は不明である。建物は南北に長軸をもつもので、梁行は2間、桁行2間以上である。また、建物方位は $N6^\circ W$ である。柱間距離は、梁行及び桁行とも2.2mである。

建物の柱穴からは、目立った遺物は出土しなかった。

建物の方位は建物1にちかく、密接な関係が想定される。建物の位置関係をみても、建物1の北側底ラインが建物9の南側梁行のラインと一致しており、計画的な建物配置の状況がうかがえる。しかし、両者は非常に接近した位置にあり、同時存在したとすれば、軒が接するような状態であったと思われる。



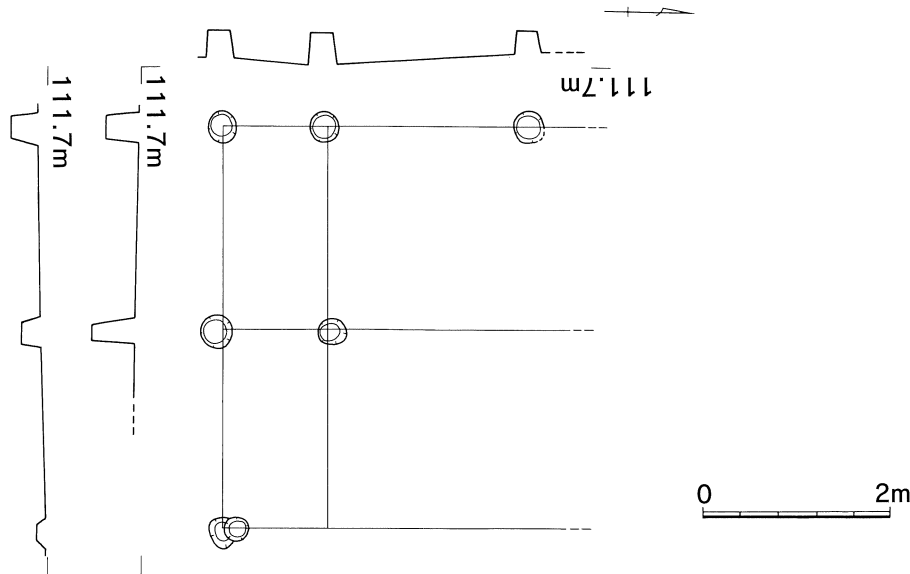
第18図 古庄屋遺跡 建物9

(10) 建物10

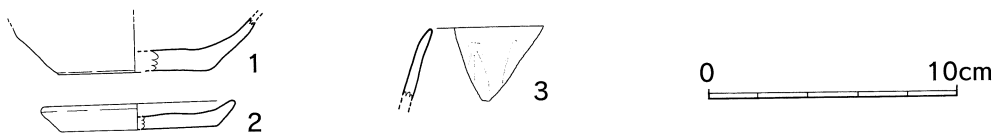
建物10（第19図）は、建物9と重複した位置にある。しかし、大部分が調査区外に及ぶため、建物の全容は不明である。

建物は南北に長軸をもつもので、南側に庇を有する。規模は梁行2間、桁行2間以上である。柱間距離は梁行及び桁行とも2.1mで、南側梁行から1.2mに庇を設ける。建物方位はN1°Wである。

建物の柱穴からいくつかの土器が出土した（第20図）。1は土師質土器杯である。底径に比し器高が高いもので、底径6.2cmを測る。2は口径7.8cm、器高1.0cm、底径6.2cmの土師質土器小皿で、底部は回転糸切りである。3は中国製青磁碗で、外面に鎊蓮弁がみられる。



第19図 古庄屋遺跡 建物10



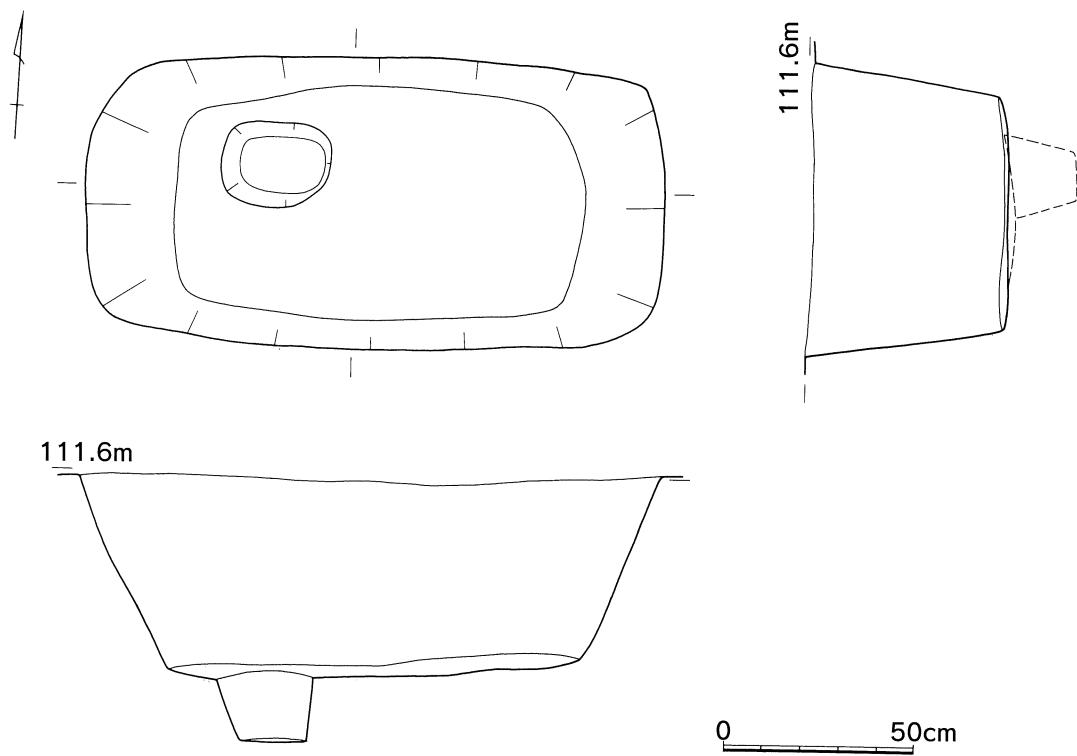
第20図 古庄屋遺跡 建物10 出土遺物

2 土 墳 墓

溝1の北側に、溝に沿うように土墳墓と思われる土墳が並ぶ（第3図）。調査区内で8基が確認されたが、土墳墓1の東側にさらに続くものと推定される。溝1の北側は掘立柱建物や土壇、竪穴などが全くみられず、この部分が館内における墓域として強く意識されていたことが分かる。さらに、これらの土墳墓は、東西方向に主軸をもつものと、南北方向に主軸をもつものが交互に並んでおり、計画性の高い配置状況がうかがえる。一定の間隔をもち整然と並ぶ様子から、各土墳墓には墓標や土盛りなどの明確な地上表示があったものと考えられる。

(1) 土墳墓1

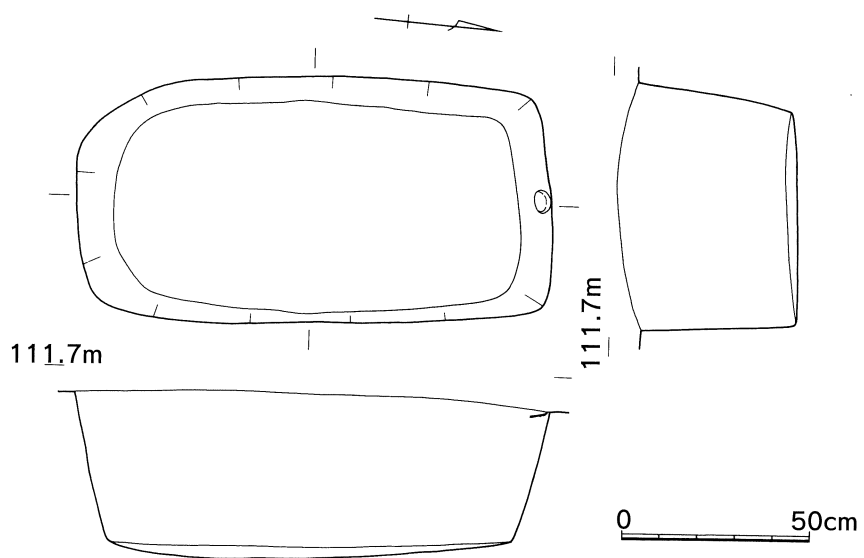
土墳墓1（第21図）は、土墳墓群のなかで最も東側に位置する。平面プランは長方形を呈し、東西方向に主軸をもつ。規模は長さ1.53m、幅0.77m、深さ約0.5mである。床面には、深さ約15cmを測る柱穴状のものがみられる。また、埋土の土層観察などを行ったが、木棺の痕跡は確認されなかった。副葬品は全く出土しなかったが、埋土から土器がわずかに出土した（第22図）。1は土師質土器杯の底部小破片である。



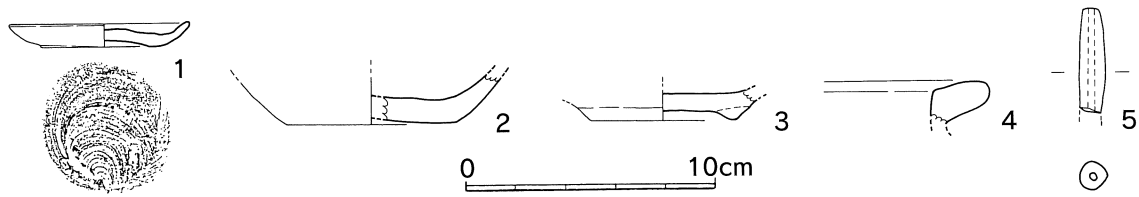
第21図 古庄屋遺跡 土壙墓1



第22図 古庄屋遺跡 土壙墓1 出土遺物



第23図 古庄屋遺跡 土壙墓2



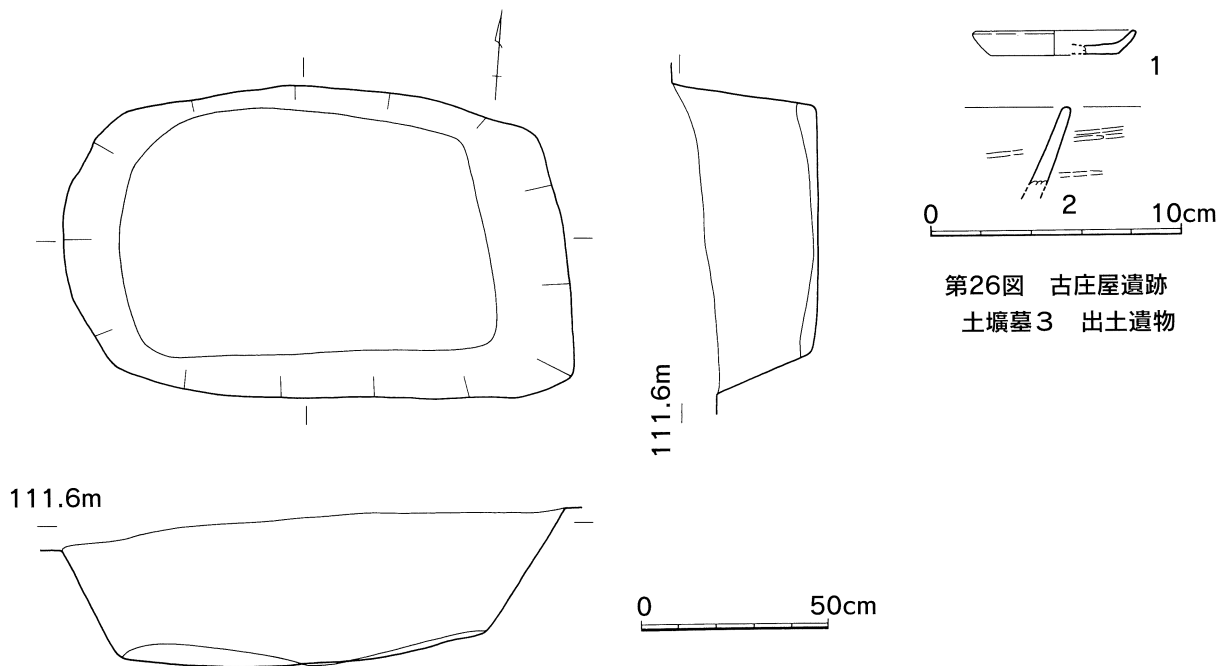
第24図 古庄屋遺跡 土壙墓2出土遺物

(2) 土壙墓2

土壙墓2（第23図）は、土壙墓1の西側に位置する。土壙墓1及び西隣の土壙墓3との間隔は、0.8m前後である。平面プランは長方形を呈し、南北方向に主軸をもつ。規模は長さ1.26m、幅0.65m、深さ約0.45mである。掘り下げは、埋土の土層観察を行いながら進めたが、木棺の痕跡などは認められなかった。床面において副葬品は確認されなかったが、土壙墓北端の最上層から完形の土師質土器小皿が1枚出土した（第24図1）。小皿は口径7.2cm、器高0.9cm、底径5.0cmである。このほかにも埋土中からいくつかの遺物が検出された（第24図）。2は土師質土器坏で底径6.8cmを測る。3は瓦器碗底部、4は土師質土器鍋口縁、5は土錘である。

(3) 土壙墓3

土壙墓3（第25図）は、土壙墓2の西側に位置する。平面プランは長方形基調を呈し、東西方向に長軸をもつ。規模は長さ1.34m、幅0.82m、深さ0.3~0.4mである。木棺などの痕跡は確認されなかった。埋土から若干の土器が出土した（第26図）。1は土師質土器小皿で、口径6.4cm、器高0.9cm、底径5.0cmである。2は瓦器碗。

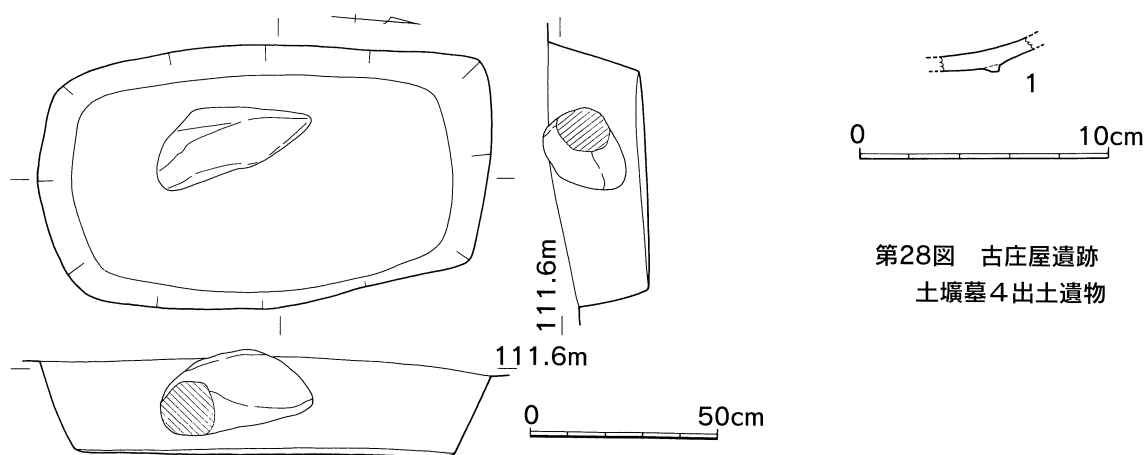


第26図 古庄屋遺跡
土壙墓3 出土遺物

第25図 古庄屋遺跡 土壙墓3

(4) 土壙墓4

土壙墓4（第27図）は、土壙墓3の西側に位置する。土壙墓3及び西隣の土壙墓5との間隔は、1.0m前後である。平面プランは長方形基調を呈し、南北方向に長軸をもつ。規模は長さ1.20m、幅0.70m、深さ0.25mである。土壙墓内には長さ0.45m、幅0.2mの石がみられるが、副葬品などは確認されなかった。埋土からは若干の遺物が出土した（第28図）。1は瓦器碗底部である。

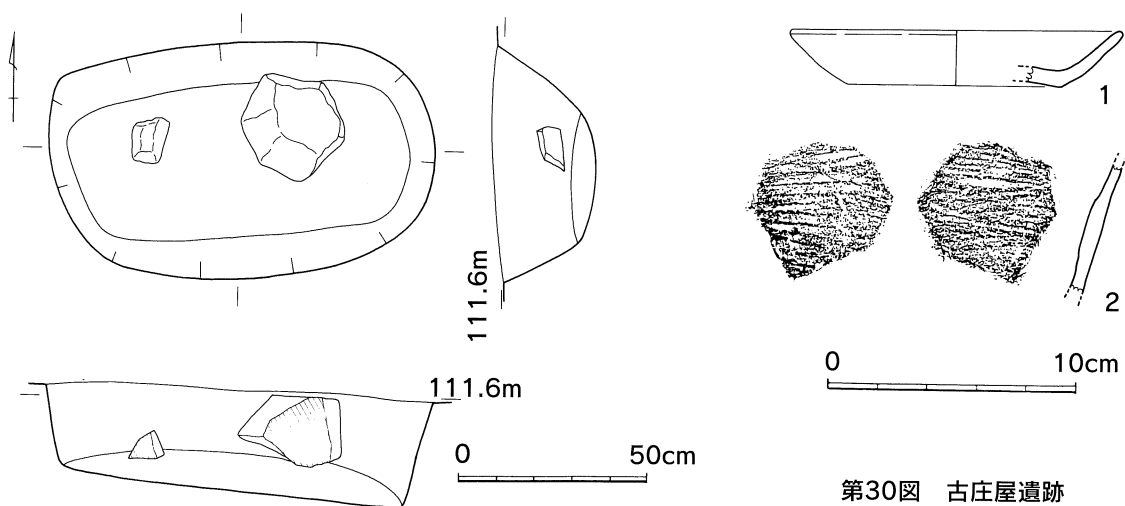


第28図 古庄屋遺跡
土壙墓4出土遺物

第27図 古庄屋遺跡 土壙墓4

(5) 土壙墓5

土壙墓5（第29図）は、土壙墓4の西側に位置する。平面プランは長方形基調を呈し、東西方向に長軸をもつ。規模は長さ1.03m、幅0.63m、深さ0.25～0.3mである。土壙墓内には長さ0.3mと0.1mの石がみられるが、副葬品などは検出されなかった。また、掘り下げは、埋土の土層観察を行いながら進めたが、木棺の痕跡などは認められなかった。埋土からは若干の土器が出土した（第30図）。1は土師質土器坏で、口径13.2cm、器高2.1cm、底径8.4cmである。2は縄文時代の深鉢で、内外面に貝殻条痕がみられる。

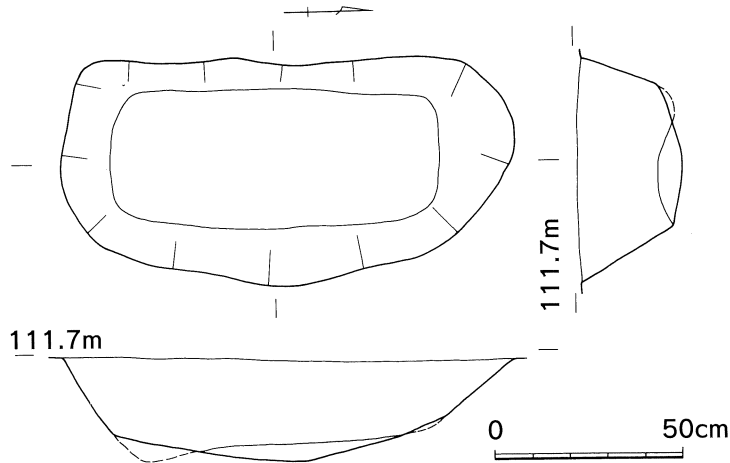


第30図 古庄屋遺跡
土壙墓5 出土遺物

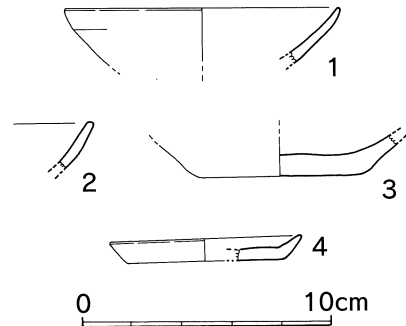
第29図 古庄屋遺跡 土壙墓5

(6) 土壙墓6

土壙墓6（第31図）は、土壙墓5の西側に位置する。土壙墓5及び西隣の土壙墓7との間隔は、0.8～1.0m前後である。平面プランは長方形基調を呈し、南北方向に長軸をもつ。規模は長さ1.22m、幅0.58m、深さ約0.25mである。埋土の土層観察などを行ったが、木棺等の痕跡は確認できなかった。副葬品は検出されなかったが、埋土中から若干の遺物が出土した（第32図）。1～3は土師質土器坏である。1は底径に比し器高の高いもので、口径11.0cmを測る。3は回転糸切りの底部で、底径6.4cmである。1と同様な器形を呈するものと思われる。4は口径7.6cm、器高0.9cm、底径6.2cmの土師質土器小皿で、底部は回転糸切りである。



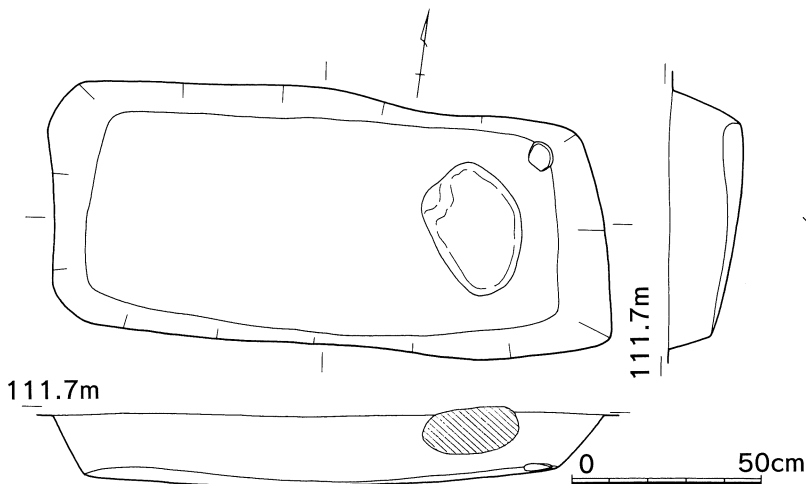
第31図 古庄屋遺跡 土壙墓6



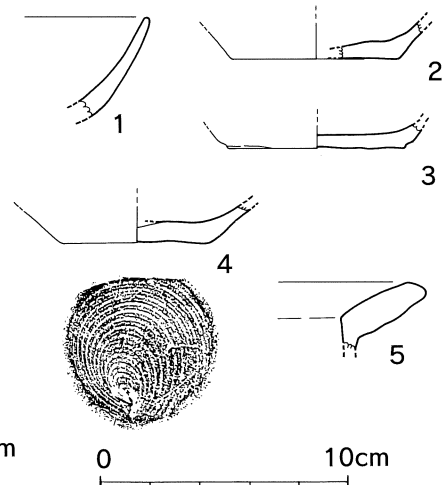
第32図 古庄屋遺跡
土壙墓6 出土遺物

(7) 土壙墓7

土壙墓7 (第33図) は東西方向に主軸をもつもので、長さ1.4m、幅0.68m、深さ0.2mの規模をもつ。土壙墓内からは長さ0.3mの石がみられる。このほか床面の北東隅から、土師質土器杯の底部が検出された。また、埋土中からも土器片が出土した。出土遺物 (第34図) のうち、1～4は土師質土器杯である。このうち4は床面より出土したものである。底径に比し器高の高いもので、底部は回転糸切りである。底径は5.8cmを測る。5は土師質土鍋の口縁部である。



第33図 古庄屋遺跡 土壙墓7

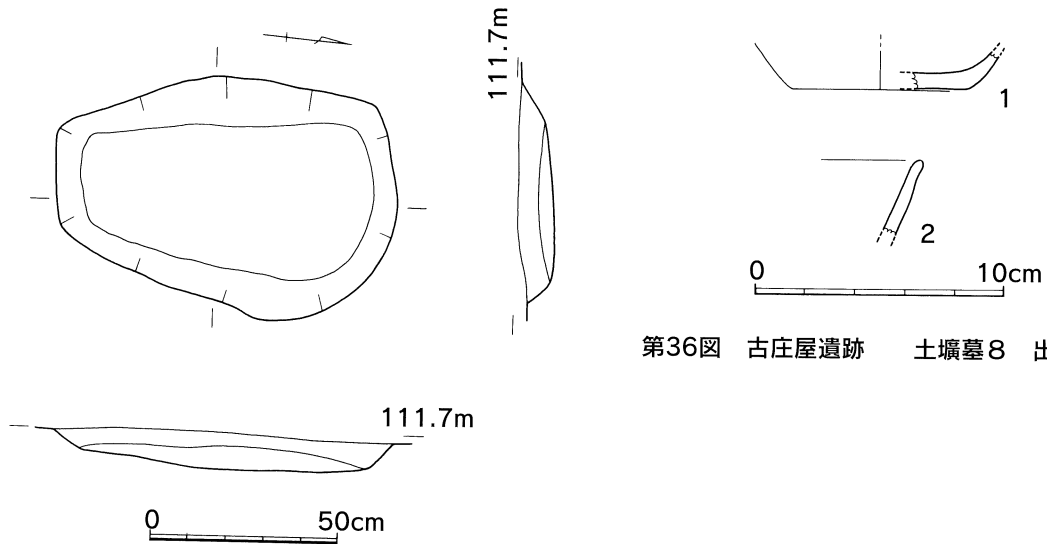


第34図 古庄屋遺跡
土壙墓7 出土遺物

(8) 土壙墓8

土壙場8 (第35図) は、土壙墓列の最も西側に位置する。土壙墓8の西側には土壙墓が確認されておらず、現状ではここで終わっているように見える。しかし、これらの土壙墓は西にくるほど、削平のため深さが浅くなっており、土壙墓8の西側のものは削平ため消滅した可能性もある。

土壙墓8は南北方向に主軸をもつもので、長方形基調の平面プランを有する。規模は長さ0.91m、幅0.65m、深さ0.1mで、土層観察などを行ったが木棺等の痕跡は確認されなかった。副葬品は全く確認されず、埋土から若干の土器が出土したのみである。出土土器 (第36図) のうち1は土師質土器杯である。器高の低くなるタイプと思われ、底部は回転糸切りである。2は瓦器碗である。



第36図 古庄屋遺跡 土壙墓8 出土遺物

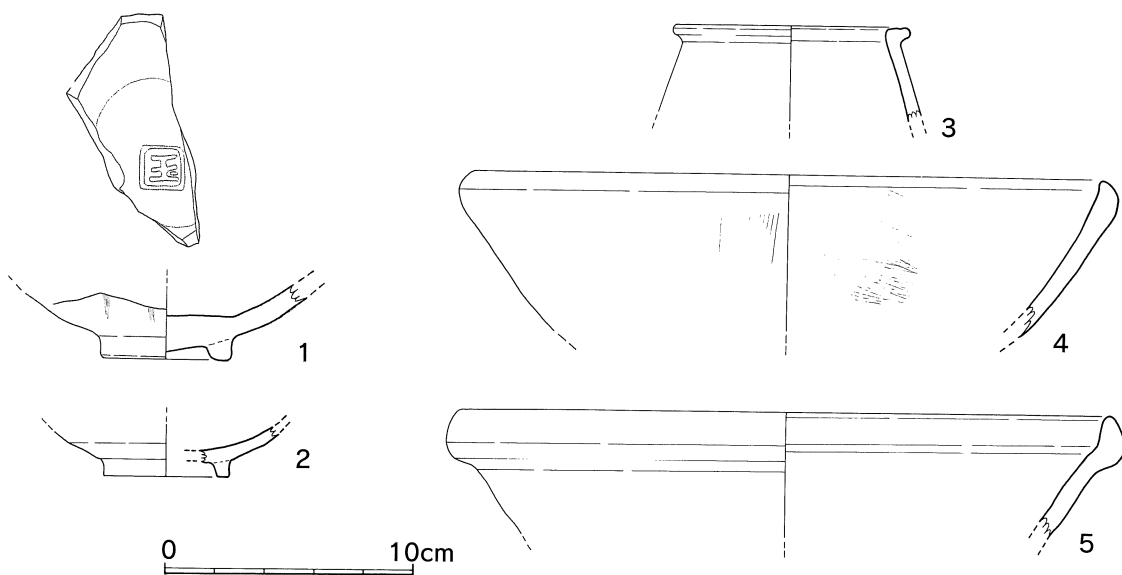
第35図 古庄屋遺跡 土壙墓8

3 土 壙

大小の土壙が60基ほど確認された。その大部分は掘立柱建物群の西側に集中しており、館内における空間利用に明らかな計画性・規則性が認められる。以下、主な土壙を紹介する。

(1) 土 壙1

土壙1（第38図）は建物1の西側10mに位置する。南北に長い不定形の大型土壙で、長径約16m、短径約6mを測る。土層の観察をしながら掘り下げを行い、柱穴などをのぞき基本的に重複関係がないことを確認した。土壙の大きさに比べ出土遺物（第37図）は少ない。1は青磁碗である。外面に片切りの蓮弁文と思われるものがみられ、内面見込みには国という文字のスタンプがみられる。2は白磁碗と思われ、見込み釉を輪状にかきとる。3は陶質壺。4は瓦質土器鉢で、内外面にハケメがみられる。5は東播系のこね鉢である。



第37図 古庄屋遺跡 土壙1 出土遺物

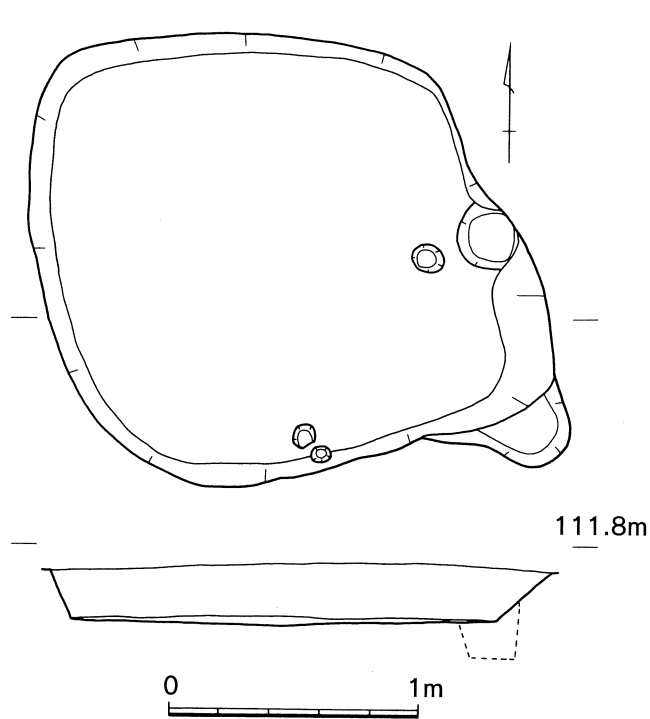


第38図 古庄屋遺跡 土壌1

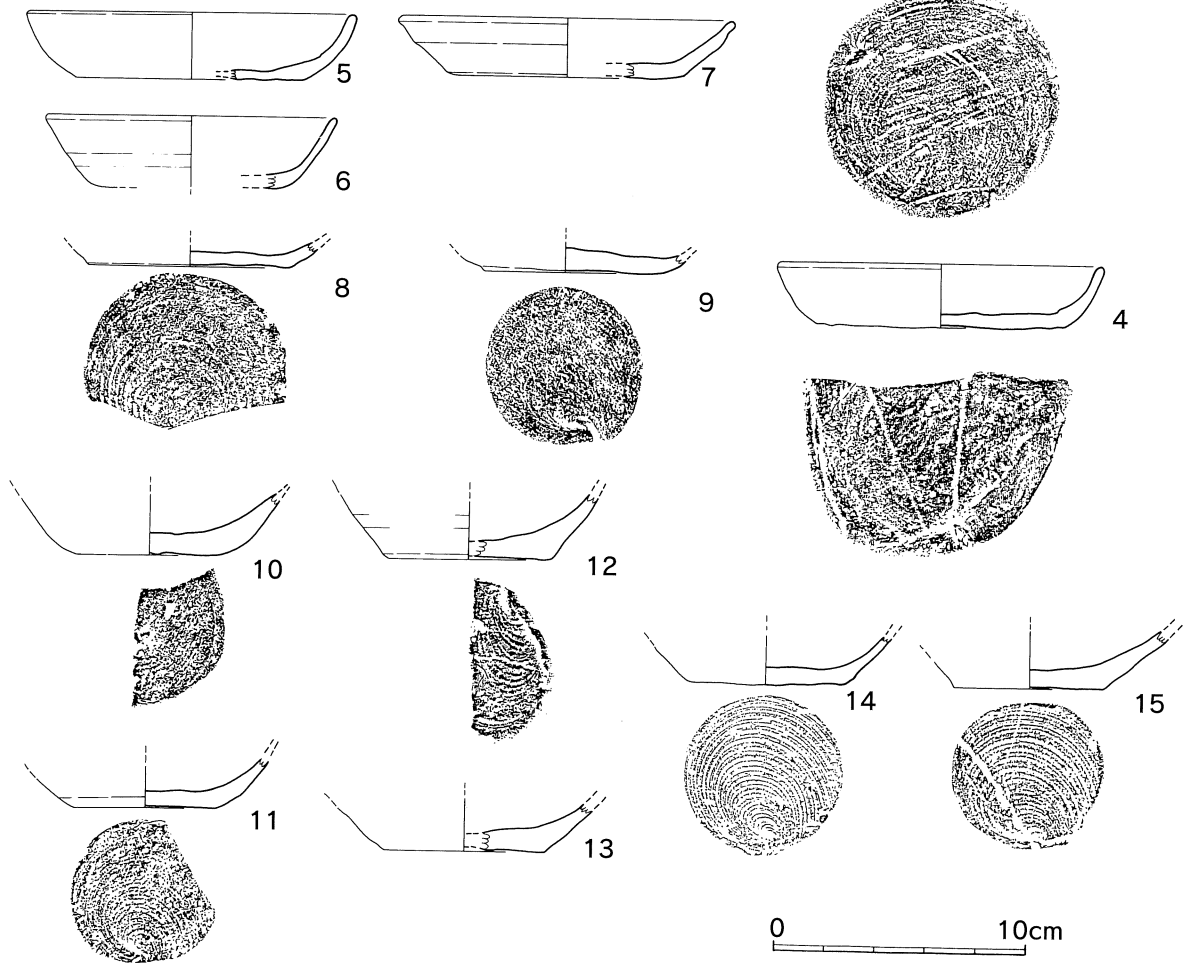
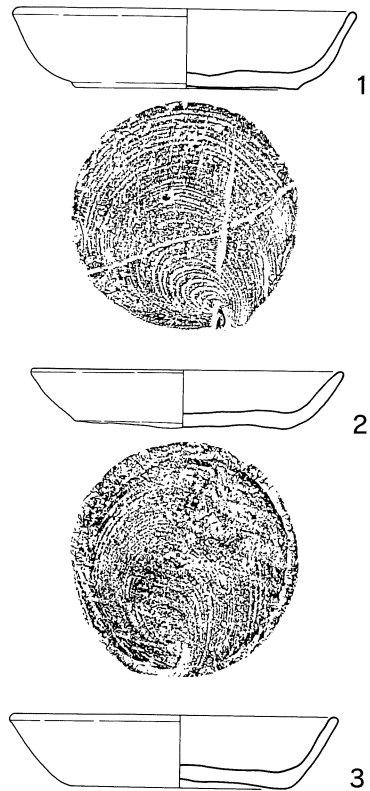
(2) 土 壌2

土壌2（第39図）は土壌1の東南に位置する。平面プランは隅丸方形で、一辺1.5～1.8mを測る。深さは検出面から0.25mで、完形の土器を含め比較的多くの土器が出土した。土器の大部分は、床面よりも浮いた状況であった。

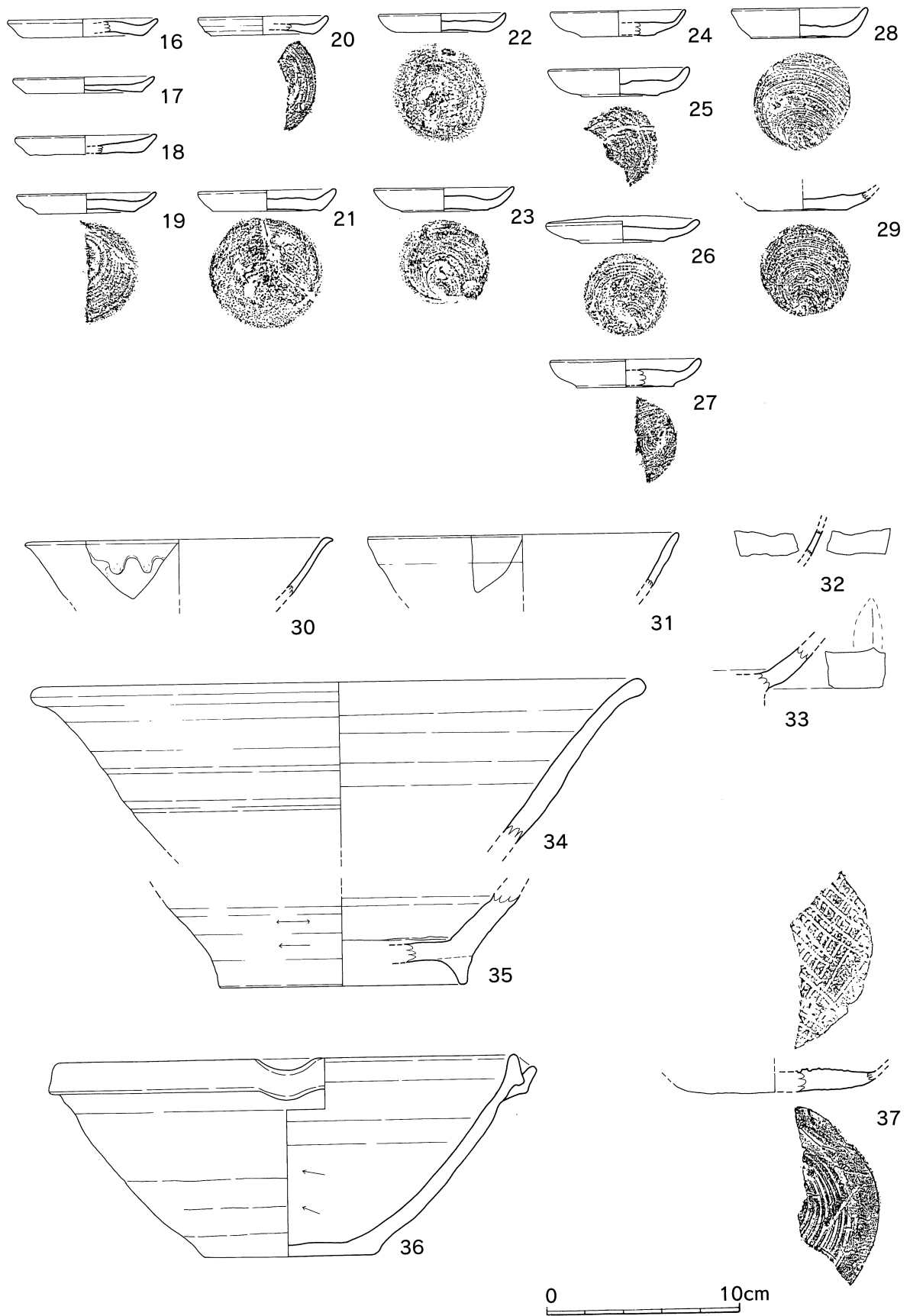
出土土器（第40～42図）のうち、1～15は土師質土器坏である。この中で1～8は口径に比し器高の低いも



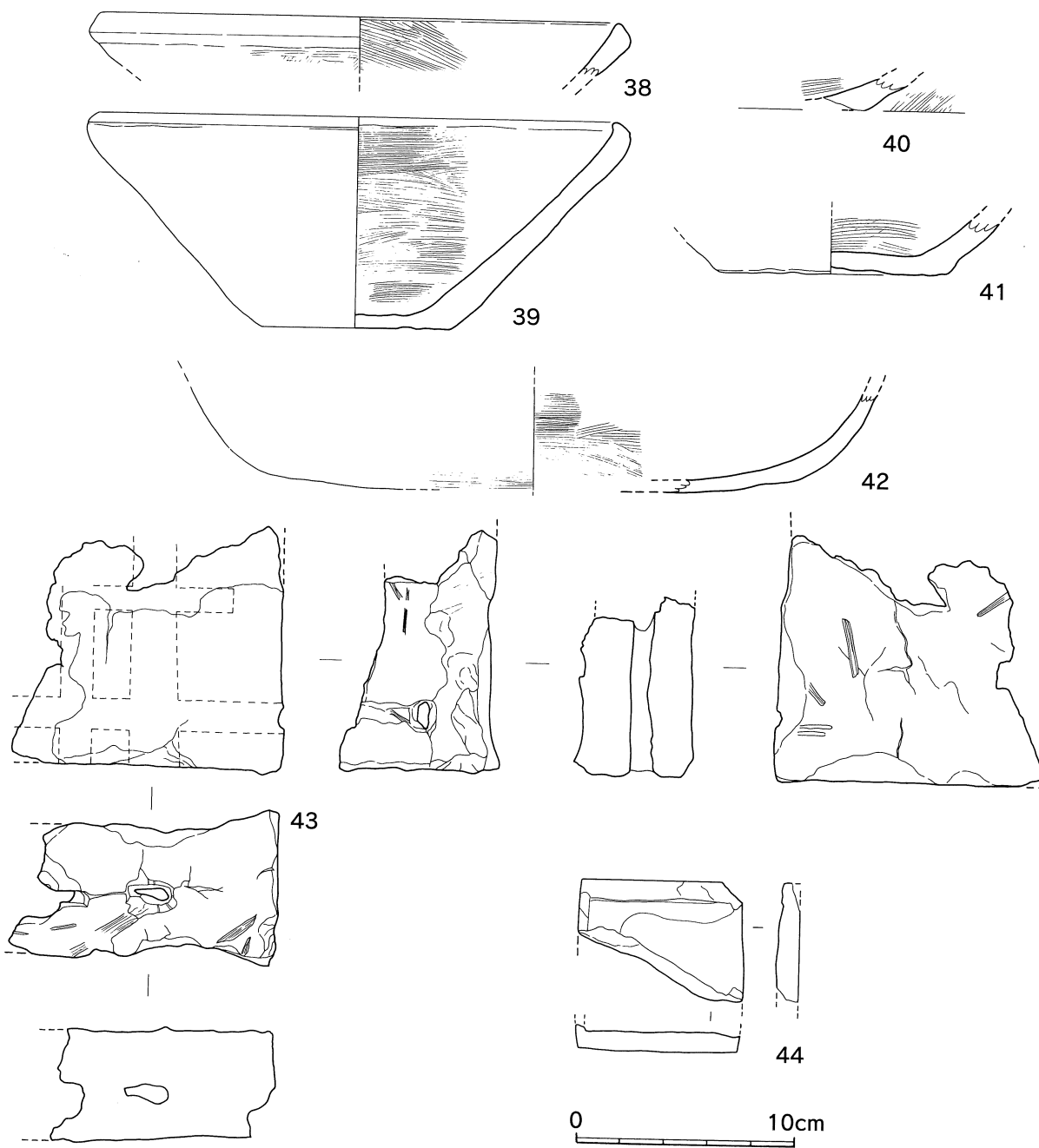
第39図 古庄屋遺跡 土壇2



第40図 古庄屋遺跡 土壇2 出土遺物 (1)



第41图 古庄屋遺跡 土壙2 出土遺物(2)



第42図 古庄屋遺跡 土壌2 出土遺物 (3)

のである。体部は底部と同じ厚さで立ち上がるもので、体部下半に丸みを有する。底部は回転糸切りで、板状圧痕がみられるものが多い。1は完形で口径13.6cm、器高3.1cm、底径8.8cm、2はほぼ完形で口径12.3cm、器高2.3cm、底径8.4cm、3もほぼ完形で口径12.4cm、器高2.85cm、底径8.5cm、4は復元口径13.0cm、器高2.4cm、底径9.8cm、5は復元口径13.2cm、器高2.6cm、復元底径9.2cmである。6は復元口径11.6cmであるが、小破片のため口径の復元に誤差が生じている可能性がある。7は他の坏とは異なり口縁部に強いヨコナデがはいるため、体部に稜をもつ。復元口径13.4cm、器高2.3cm、復元底径9.4cmである。10～15は底径に比し器高の高いものである。完形品はないが、底部完形のものがある。底部はいずれも回転糸切りで、板状圧痕はみられない。体部の立ち上がり部が丸みをもつもの（10、11）と、鋭く立ち上がるもの（12～15）がある

が、底径は6.0～6.6cmのなかにはいる。

16～29は土師質土器小皿で、いずれも底部は回転糸切りである。このうち16～21は体部が短く直線的に立ち上がるものである。16は復元口径7.8cm、器高0.9cm、復元底径6.0cm、17は復元口径7.4cm、器高0.8cm、復元底径6.0cm、18は復元口径7.4cm、器高0.95cm、復元底径5.0cm、19は復元口径7.3cm、器高1.0cm、復元底径5.0cm、20は復元口径6.8cm、器高0.9cm、復元底径5.4cm、21は完形で口径7.2cm、器高1.1cm、底径5.6cmである。22、23は両者とも完形にちかく、体部が丸みをもち短く立ち上がる。22は口径6.6cm、器高1.0cm、底径4.6cm、23は口径7.3cm、器高1.2cm、底径4.5cmである。24～27は22などと同様な特徴をもつが、底部が厚く円盤高台状を呈する。24は復元口径7.0cm、器高1.3cm、復元底径3.8cm、25は復元口径7.3cm、器高1.4cm、底径3.9cm、26はほぼ完形で口径8.0cm、器高1.1～1.4cm、底径4.3cm、27は復元口径7.8cm、器高1.4cm、復元底径5.0cmである。28は体部が丸みをもち立ち上がり、器高がやや高い。完形品で、口径7.1cm、器高1.5cm、底径5.0cmである。

30～33は中国製磁器である。30は白磁碗で、口縁端部が外方に折れる。内外面とも灰白色の釉が施釉され、外面は口縁から釉が垂れる。31～33は青磁碗である。いずれも外面に蓮弁文があり、32、33は鎊がみられる。

34、35は知多・渥美窯産の片口鉢で、同一個体と思われる。底部は高台をもち、体部は緩やかに伸び、口縁部がわずかに外反する。口縁端部はやや肥厚し丸みをもつ。36は東播系の須恵質こね鉢で、復元口径23.8cmを測る。37は古瀬戸の卸皿である。内底面には格子目状の卸目があり、底部は糸切りか。38～41は土師質の鉢である。38は口縁部のみの資料で、復元口径24.8cmを測る。口縁端部は平坦で、上方へやや肥厚気味である。体部内外面はハケメが施される。39は全形の分かる資料である。復元口径は24.8cmを測る。やはり口縁端部は上方へ肥厚する。体部内面にはハケメがみられるが、外面はナデ調整である。40、41は底部の資料で、40は内外面ハケメ、41は内面のみハケメである。42は土師質の土鍋底部である。内外面にハケメがみられる。

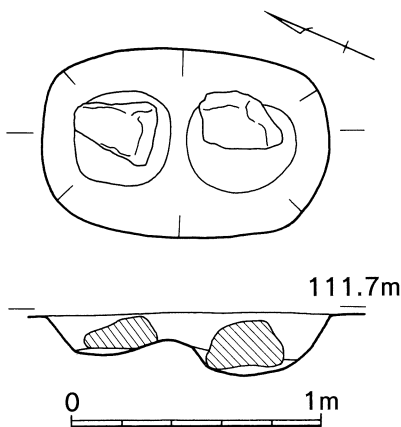
43は土壁の一部と思われ、二次焼成を受けている。厚さ5～7cmを測るもので、内部には竹材と推定されるものが、格子に組まれている。竹材そのものは残存せず、スタンプとして残る。

44は硯の破片で、幅7.5cmを測る。石材は頁岩と思われ、色調は灰色を呈する。

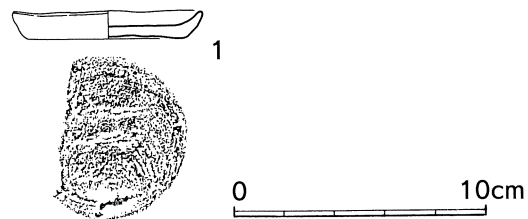
(3) 土 壙4

土壙4（第43図）は土壙1のすぐ東側に位置する。平面プランは楕円形を呈し、長径1.1m、短径0.75mの規模を有する。土壙は2ヶ所の深い部分があり、深い方は0.25m、浅い方は0.15mの深さをもつ。深い部分には各々0.3m程の石が入っている。

土壙内からは、ほぼ完形の土師質土器小皿が出土した（第44図）。体部は底部と同じ厚みをもち、短く直線的に立ち上がる。底部は回転糸切りである。法量は口径7.5cm、器高1.1cm、底径6.3cmを測る



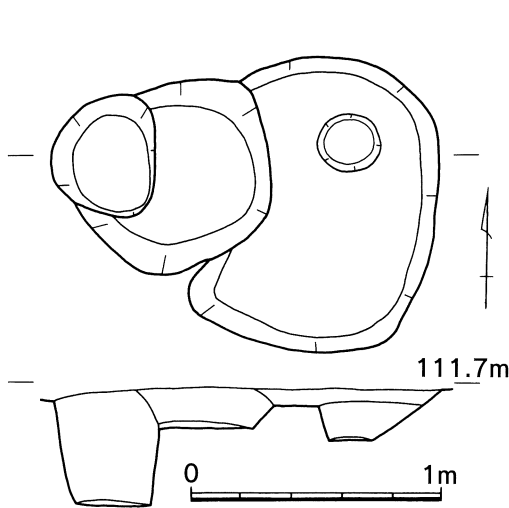
第43図 古庄屋遺跡 土壙4



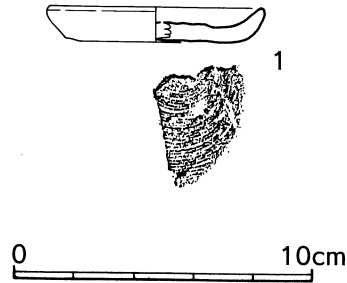
第44図 古庄屋遺跡 土壙4 出土遺物

(4) 土 壙8

土壙8（第45図）は、建物9と重複する位置にある。楕円形基調を呈し、長径1.15m、短径0.9m、深さ0.05mの規模を有する。東側で径0.8mの土壙と重複し、その土壙はさらに建物9の南西隅柱穴と重複する。土壙からは土師質土器小皿が出土した（第46図）。体部はやや内湾気味に短く立ち上がる。底部は回転糸切りである。法量は復元口径7.2cm、器高1.15cm、復元底径6.0cmである。



第45図 古庄屋遺跡 土壙8

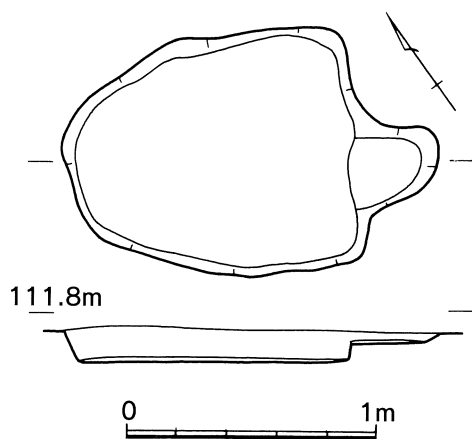


第46図 古庄屋遺跡
土壙8 出土遺物

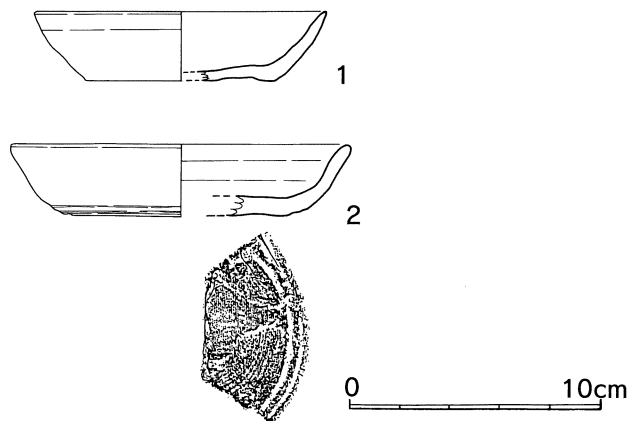
(5) 土 壙10

土壙10（第47図）は、土壙9の南側に位置する。不定形を呈し、長径1.5m、短径1.0m、深さ0.15mの規模をもつ。

出土遺物（第48図）は土師質土器杯である。1は復元口径11.6cm、器高2.8cm、復元底径7.5cmで、体部の立ち上がり部は角張る。底部には板状圧痕がみられる。2は1に比べ、体部が丸みをもち立ち上がる。法量は復元口径13.6cm、器高2.8cm、復元底径8.6cmである。底部は回転糸切りである。



第47図 古庄屋遺跡 土壙10



第48図 古庄屋遺跡 土壙10 出土遺物

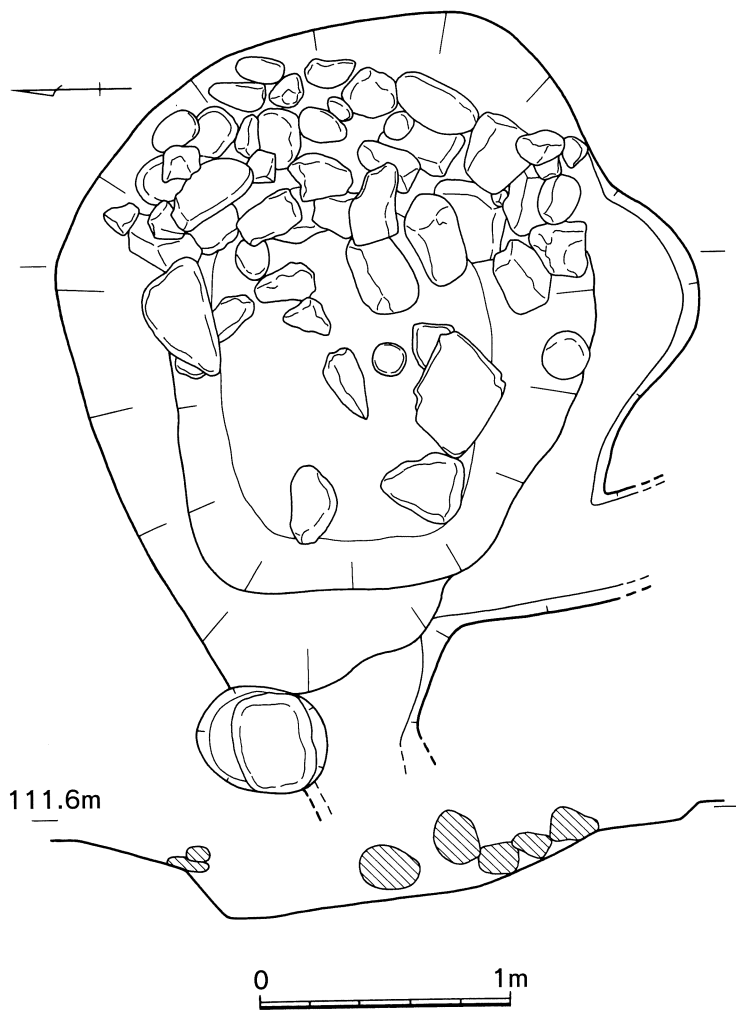
(6) 土 壙11

土壙11（第49図）は、土壙1の北側に位置する。土壙の西端を、土壙12から出て土壙11付近で直角に折れ土

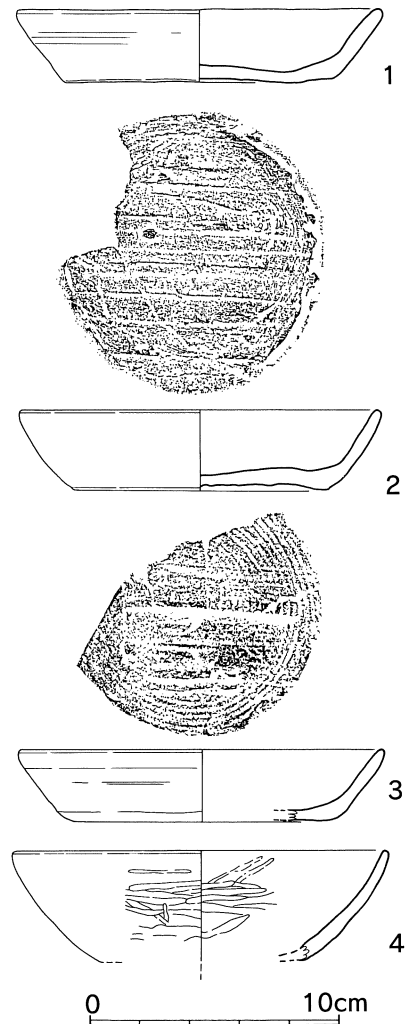
壙13に向かう溝5に切られる。土壙は不整形を呈するもので、長さは東西方向及び南北方向とも2.5mを測る。深さは最深部で0.4mに達し、東側から20~40cmの礫が投げ込まれている。

出土遺物（第50図）のうち1~3は土師質土器坏である。いずれも同様な器形を呈し、体部が底部と同じ厚みで続きやや斜方向気味に立ち上がる。底部は、回転糸切り後に板状圧痕がみられる。1はほぼ完形品で口径14.6cm、器高2.9cm、底径10.8cmを測る。2は復元口径14.4cm、器高3.1cm、復元底径10.0cmである。3は復元口径14.6cm、器高2.8cm、復元底径10.8cmである。

4は瓦器碗である。底部を欠く資料で、復元口径は15.0cmを測る。内外面には比較的密なヘラミガキがみられる。また、外面下半に指オサエは残らない。



第49図 古庄屋遺跡 土壙11



第50図 古庄屋遺跡 土壙11 出土遺物

(7) 土 壙13

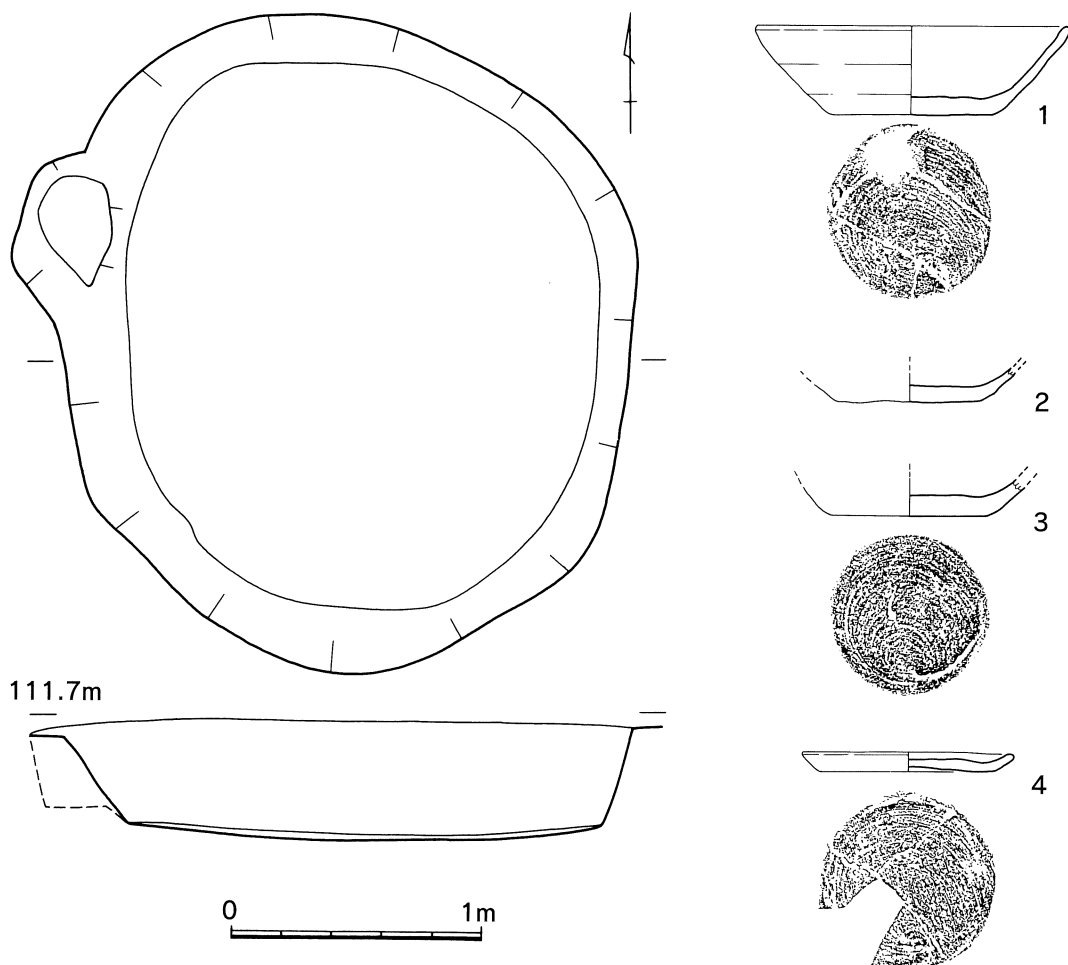
土壙13（第51図）は、土壙11の約10m西に位置する。土壙11と同様に溝5から切られる。土壙は円形基調を呈し、径2.2~2.6m、深さ0.5mを測る。

土壙からは土師質土器坏、土師質土器小皿、瓦器碗が出土した（第52図）。1~3は土師質土器坏で、いずれも底径に比し器高が高い。底部は回転糸切りである。1は口径12.4cm、器高3.4cm、底径6.4cmで、体部が底部から斜方向に直線的にのびる。2は底部完形で、底径5.7cmを測る。3も底部完形である。底径は6.0cmを

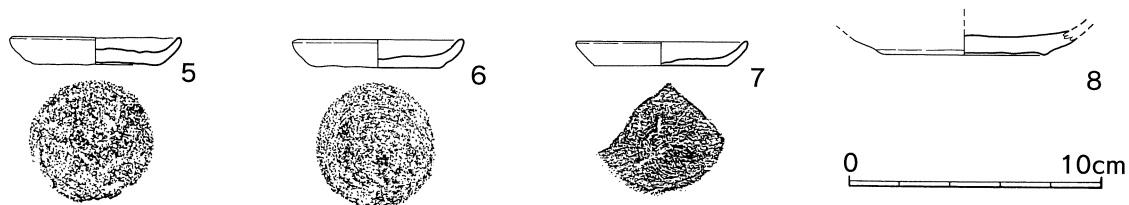
測る。

4～7は土師質土器小皿である。底部はいずれも糸切りである。4はほぼ完形で、底部と同じ厚さの体部が斜方向に立ち上がる。口径8.4cm、器高0.8cm、底径7.0cmである。5～7は、4に比べいずれも口径が小さく、器高もやや高い。また、体部も内湾気味に立ち上がる。5は底部のみ完形である。復元口径6.8cm、器高1.1cm、底径4.8cmを測る。6は完形で、口径6.8cm、器高1.1cm、底径4.8cmである。7は復元口径6.8cm、器高0.95cm、復元底径5.2cmを測る。

8は瓦器碗の底部資料で、復元底径6.4cmを測る。外底面には、回転糸切り状の痕跡後板状圧痕がみられ、これに低い高台が付される。



第51図 古庄屋遺跡 土壙13

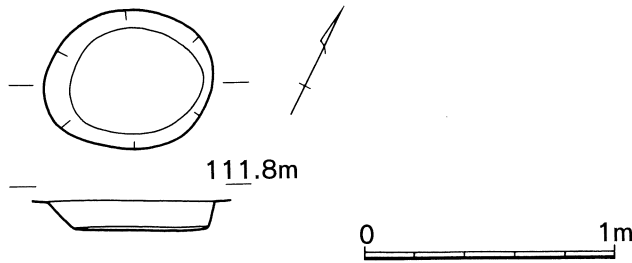


第52図 古庄屋遺跡 土壙13 出土遺物

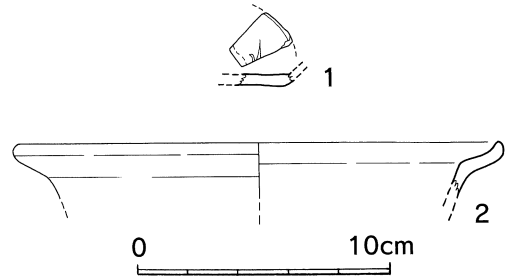
(8) 土 壙14

土壙14(第53図)は、平面プラン楕円形を呈する小規模な土壙である。規模は長径0.65m、短径0.55m、深

さ0.1mである。出土遺物（第54図）はわずかである。1は口禿の中国製白磁皿底部と思われる。2は中国製青磁皿の口縁部で、復元口径19.4cmを測る。口縁部は体部からいったん外方に折れ、端部を上方につまみ上げる。釉には貫入が入る。



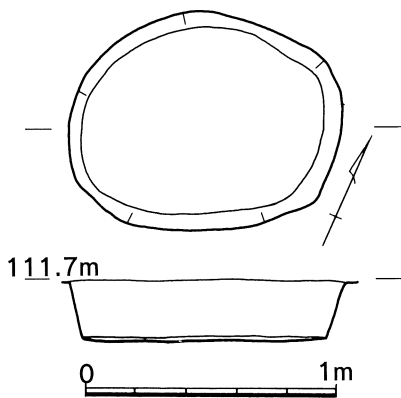
第53図 古庄屋遺跡 土壇14



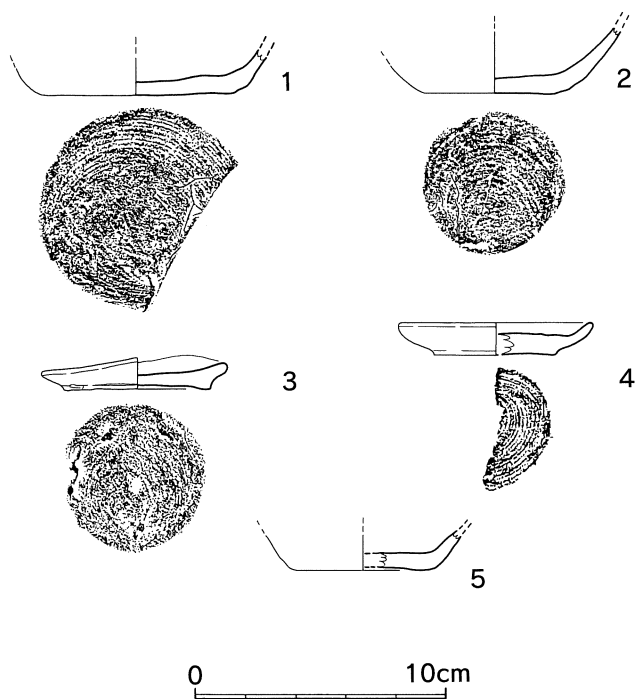
第54図 古庄屋遺跡 土壇14 出土遺物

(9) 土壇15

土壇15（第55図）は、建物4、5、6の西側にある土壇群中に位置する。平面プランは楕円形で、規模は長径1.1m、短径1.0m、深さ0.25mである。土壇からは土師質土器杯、土師質土器小皿、瓦器碗が出土した（第56図）。1、2は土師質土器杯で、底部は回転糸切りである。このうち1はほぼ完形の底部資料である。器高が底径に比し高くないものと思われ、底径は7.5cmを測る。2は底径に比し器高の高いもので、底部完形である。底径は5.6cmを測る。3～5は土師質土器小皿で、やはり底部は回転糸切りである。3は完形品で、底部が円盤高台状に厚い。口径7.4cm、器高0.8～1.4cm、底径5.8cmを測る。4も同様な器形を呈し、体部が内湾しながら立ち上がる。復元口径7.8cm、器高1.2cm、復元底径4.8cmを測る。5は器高の高い小皿と思われ、復元底径5.8cmを測る。6は瓦器碗で復元口径16.4cmである。内外面ともヘラミガキはなく、高台も認められない。



第55図 古庄屋遺跡 土壇15



第56図 古庄屋遺跡 土壇15 出土遺物

(10) 土 壙16

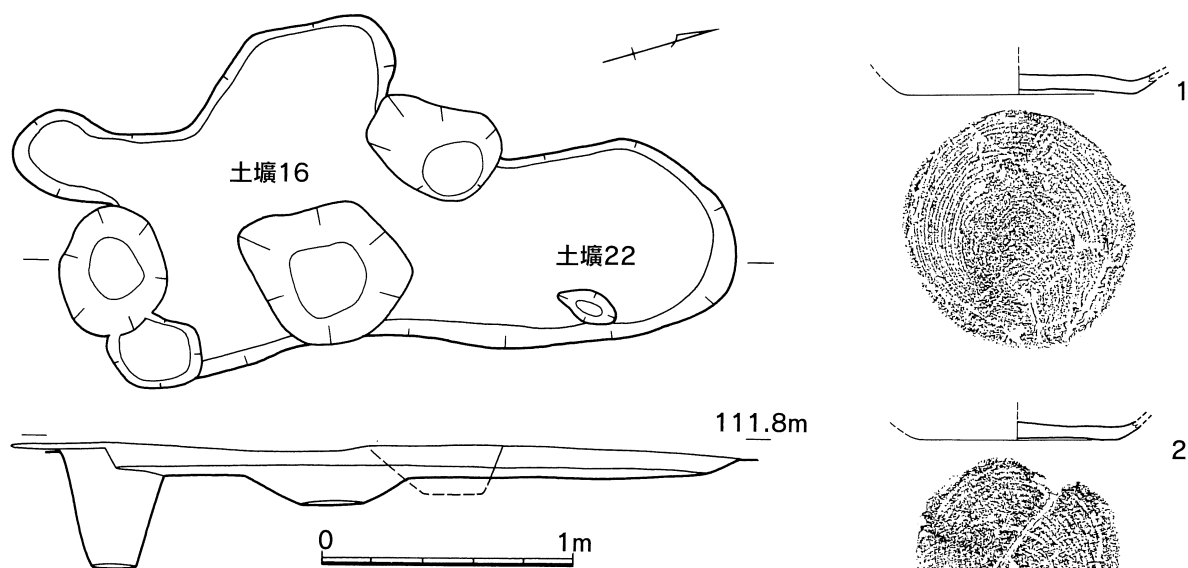
土壙16（第57図）は建物4のすぐ西側に位置する。土壙22や柱穴と重複しているが、土壙22との前後関係は不明である。土壙は不定形を呈し、長さ約1.5m、深さ0.1mの規模を有する。

出土遺物（第58、59図）のうち1～5は土師質土器坏で、いずれも底部回転糸切りである。1～3は底径に比し器高の低いものである。1は底部完形で、底径は9.1cmである。2も底部完形で、底径8.0cmを測る。3は体部が斜方向に直線的に立ち上がる。復元口径14.2cm、器高2.9cm、復元底径10.0cmである。4、5は底径に比し器高の高いものである。いずれも底部がほぼ完形で、4が底径6.0cm、5が底径5.6cmである。

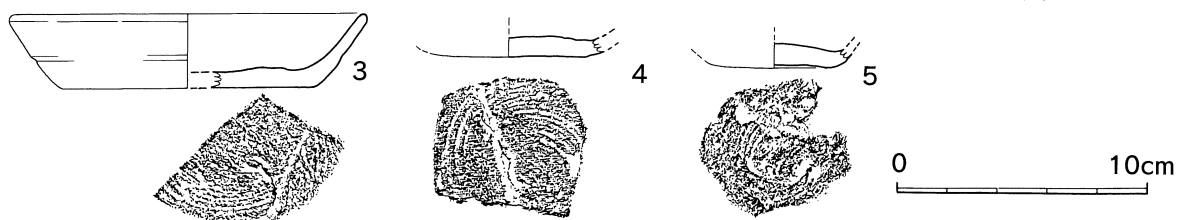
6～11は瓦器碗である。6は復元口径17.0cm、器高6.2cm、復元底径7.6cmで、内面のみヘラミガキがみられる。また、外面下半には指オサエが残る。7は復元口径15.4cmで、6と同様な特徴をもつ。8～10は瓦器碗の底部で、いずれも比較的しっかりした高台が付く。

12は口禿の中国製白磁皿である。13～16中国製青磁碗である。13は内面に文様をもつ。14は内外面とも無文である。15、16は外面に鎬蓮弁をもつものであるが、15の蓮弁は幅が広い。16は蓮弁の幅が狭く、釉には貫入が入る。

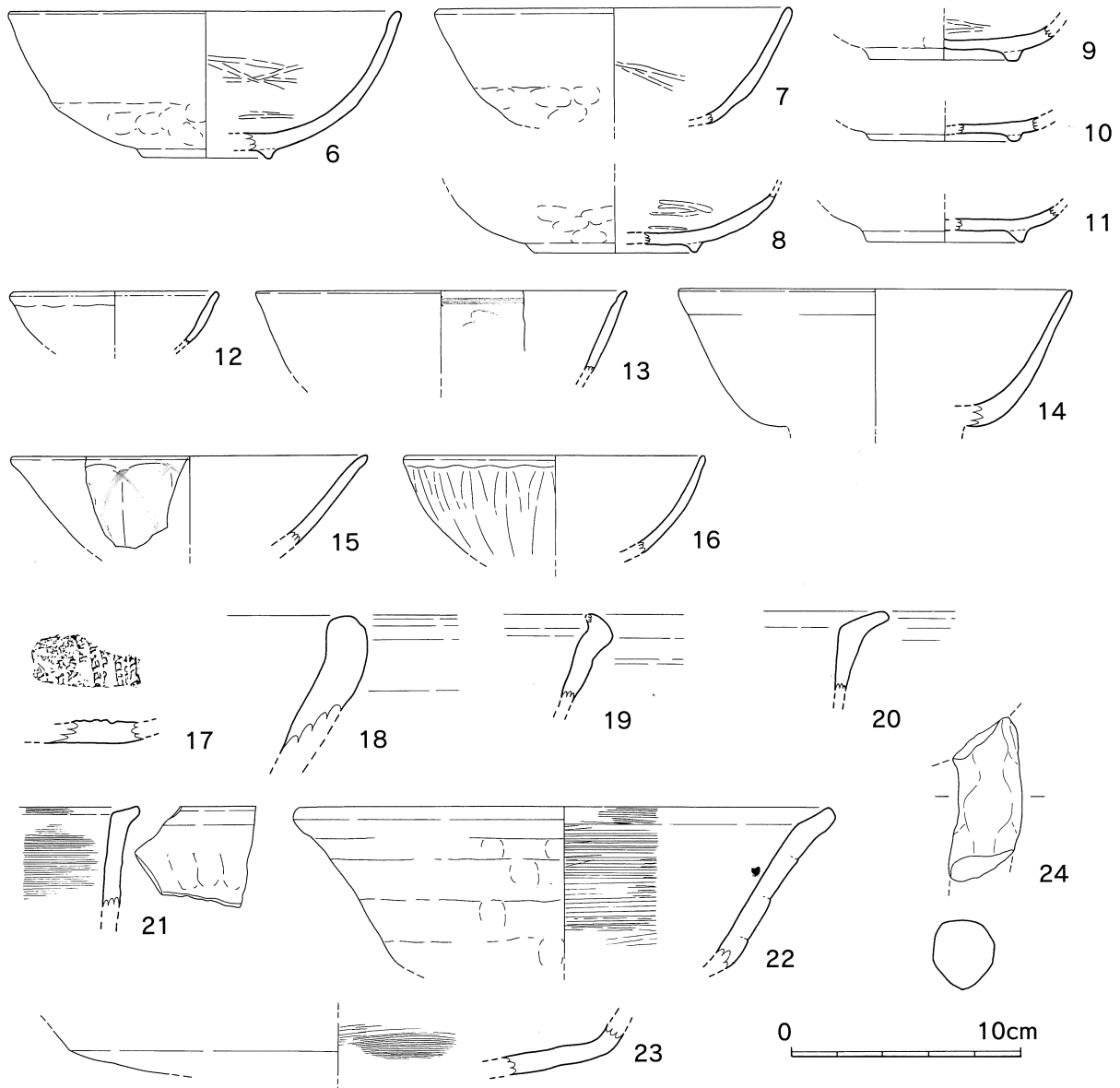
17は古瀬戸の卸皿である。内底面に格子目状の卸目が入る。18は土師質の鉢である。器壁が厚く、斜方向に立ち上がる体部から口縁部が上方に立ち上がる。19は東播系のこね鉢である。20～24は土鍋であるが、いくつかの形態がみられる。20は口縁部が外方にL字状に折れる。21は口縁部が短く外方に折れるもので、口縁上面は凹み気味である。内面には横方向のハケメが、また外面には指オサエがみられる。22は口縁部が体部から緩やかに折れる。復元口径は23.4cmで、外面にはナデとオサエ、また内面には横方向のハケメがみられる。23は底部で内面にハケメが施される。24は土鍋の足である。



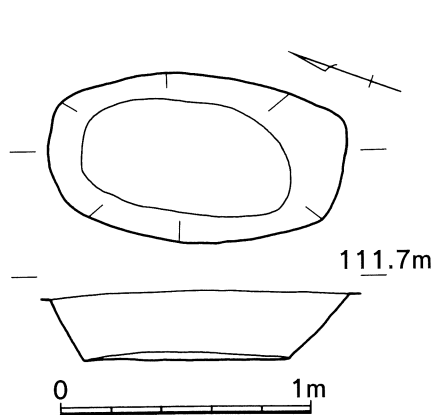
第57図 古庄屋遺跡 土壙16・土壙22



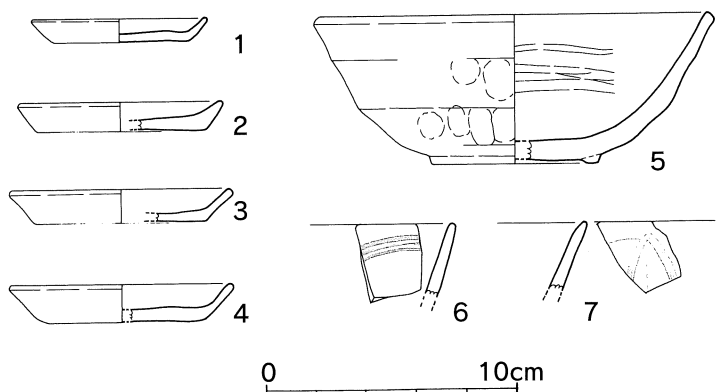
第58図 古庄屋遺跡 土壙16 出土遺物(1)



第59図 古庄屋遺跡 土壙16 出土遺物 (2)



第60図 古庄屋遺跡 土壙20



第61図 古庄屋遺跡 土壙20 出土遺物

(11) 土 壙20

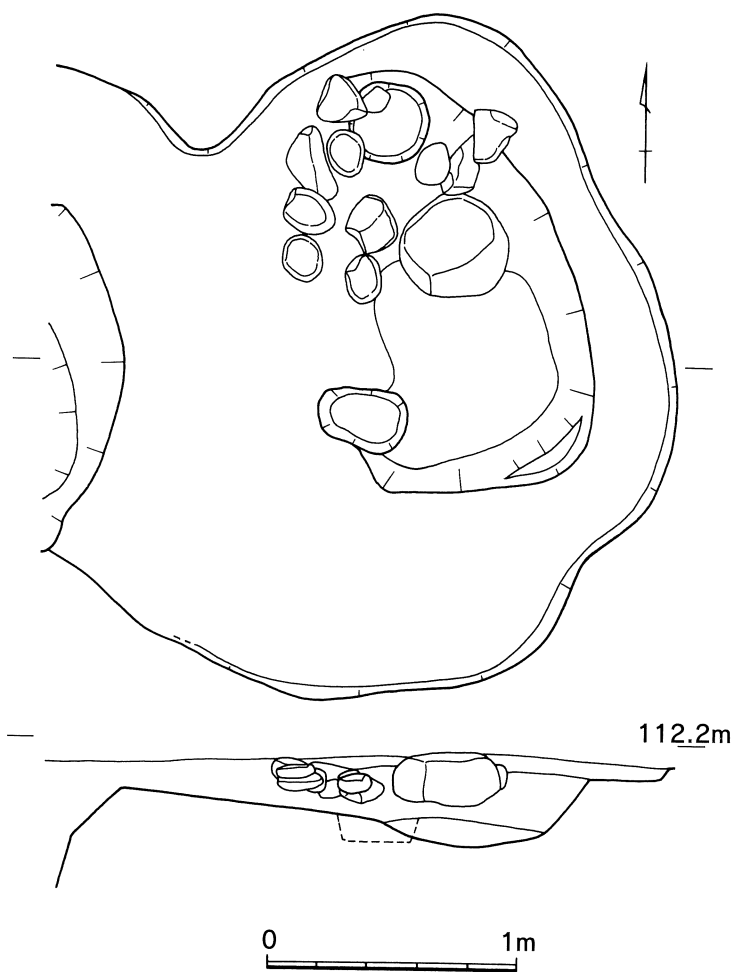
土壙20（第60図）は、建物1のすぐ西側に位置する。平面プランは楕円形を呈し、長径1.2m、短径0.7m、深さ0.3mを測る。出土遺物（第61図）のうち1～4は土師質土器小皿である。いずれも底部回転糸切りで、3を除き板状圧痕がみられる。器形は1、3、4が、底部から同じ厚みで体部に続き、口縁を丸くおさめる。2は体部が断面三角形状を呈する。1は復元口径7.0cm、器高0.9cm、復元底径5.2cm、2は復元口径8.2cm、器高1.1cm、復元底径6.8cm、3は復元口径7.0cm、器高0.9cm、復元底径5.2cm、4は復元口径9.0cm、器高1.5cm、復元底径6.6cmである。5は瓦器椀で、復元口径16.0cm、器高5.8cm、復元底径6.6cmを測る。外面にヘラミガキはみられず、下半に指オサエが残る。内面には粗なヘラミガキがみられる。6、7は中国製青磁碗である。6は内面に文様が、また7は外面に鎬蓮弁がみられる。

(12) 土 壙21

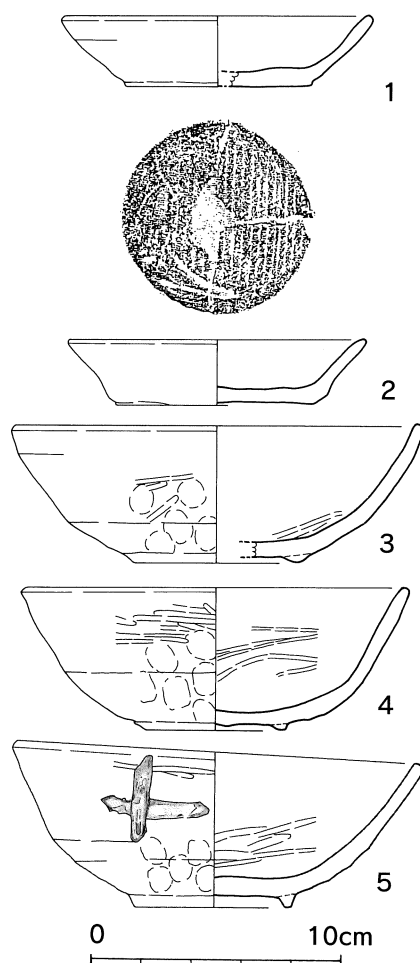
土壙21（第62図）は土壙群の最も南側に位置する。井戸1と重複し、井戸1から切られる。土壙の平面プランは不定形を呈すると思われるが、西側は明確ではない。土壙内の西北部には15～40cmの石が集中する。

出土遺物（第63、64図）のうち、1、2は土師質土器杯である。1は底部ほぼ完形で、回転糸切り後板状圧痕である。体部は内湾気味に斜方向に立ち上がる。復元口径12.4cm、器高2.8cm、底径7.4cmである。2も底部ほぼ完形で回転糸切りである。体部は外反気味に立ち上がる。復元口径11.8cm、器高2.5cm、底径7.8cmである。

3～8は瓦器椀である。3は復元口径16.2cm、器高5.3cm、復元底径5.8cmで、内外面に粗なヘラミガキが



第62図 古庄屋遺跡 土壙21

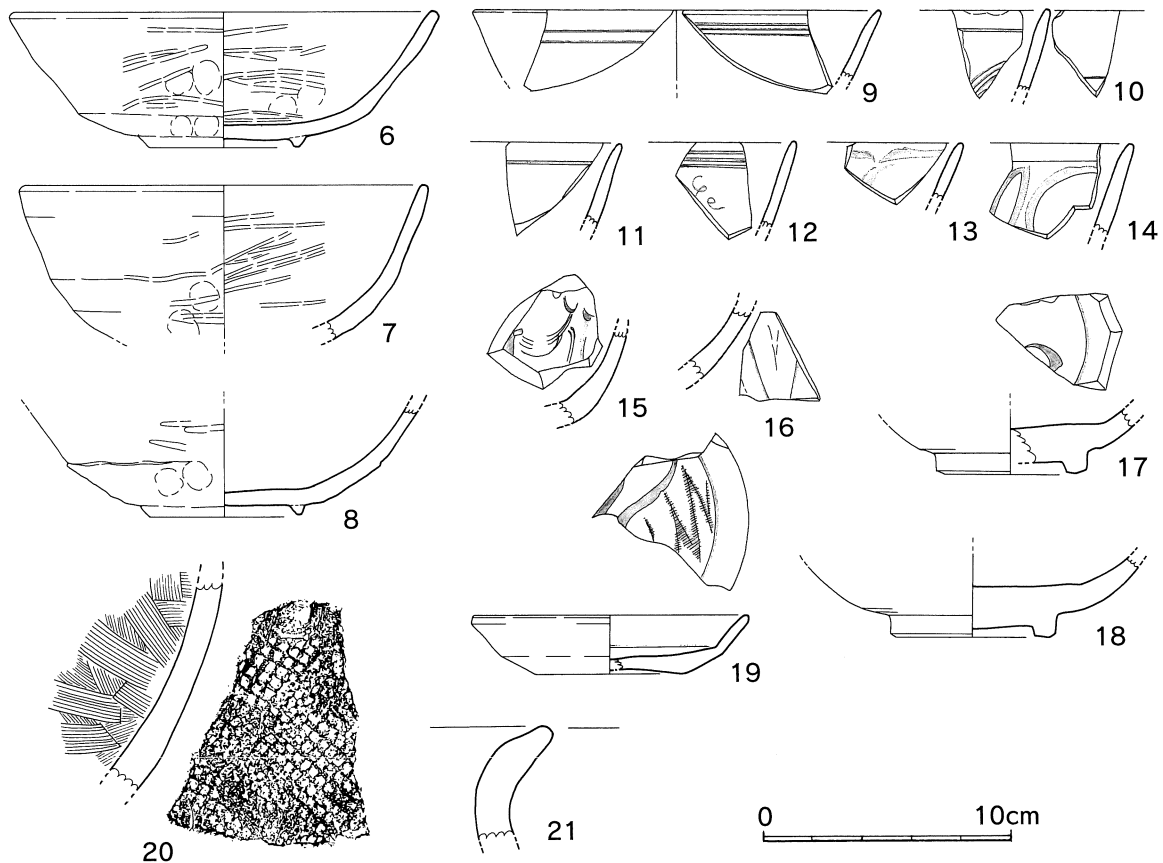


第63図 古庄屋遺跡 土壙21 (1)

みられる。また、外面下半には指オサエが残る。4は外面上部にヘラミガキ、下半に指オサエがみられる。内面には粗なヘラミガキが施される。口径15.3cm、器高5.6cm、底径5.6cmである。5はほぼ完形で、口径16.2cm、器高6.1cm、底径6.2cmを測る。外面口縁下には十の字状の墨書がある。調整は、内外面に粗なヘラミガキがあり、外面下半には指オサエがみられる。6は底部完形で復元口径17.0cm、器高5.3cm、底径6.0cmである。内外面にヘラミガキがみられ、外面下半には指オサエが残る。7は底部を欠く資料で、復元口径16.2cmである。内外面に粗なヘラミガキがみられる。8は口縁部を欠く資料である。やはり、内外面にヘラミガキが施される。底径は6.0cmである。

9～19は中国製の青磁である。9～18は碗で、このうち9～15は、外面が無文で内面に文様がみられる。9は、復元口径16.2cmである。また、16は外面に鎬蓮弁がみられる。17は底部で、復元底径6.0cmを測る。内底面には文様がみられ、外底面は露胎である。18は底径6.0cmを測る。釉には貫入がはいり、畳付けや外底面は露胎である。19は同安窯系の皿で、復元口径11.0cm、器高2.3cm、復元底径5.8cmである。釉色は淡緑灰色で、底部は露胎である。

20は須恵質の甕の胴部と思われる。外面には格子目のタタキが、また内面にはハケメがみられる。21は須恵質の甕口縁部である。緩やかに外反するもので、口縁部内側端部ちかくが凹み気味である。



第64図 古庄屋遺跡 土壙21 (2)

(13) 土壙22

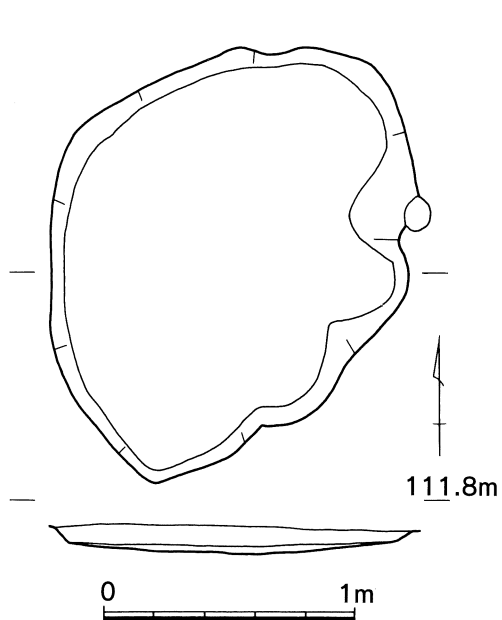
土壙22 (第57図) は、土壙16と重複するが前後関係は不明である。平面プランは長楕円形を呈するもので、長径1.3m以上、短径0.75mである。出土遺物 (第65図) のうち1は土師質土器坏である。器高の高いタイプと思われる、底径は5.3cmを測る。



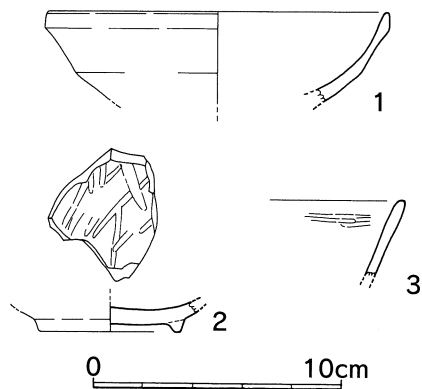
第65図 古庄屋遺跡 土壙22 出土遺物

(14) 土壙23

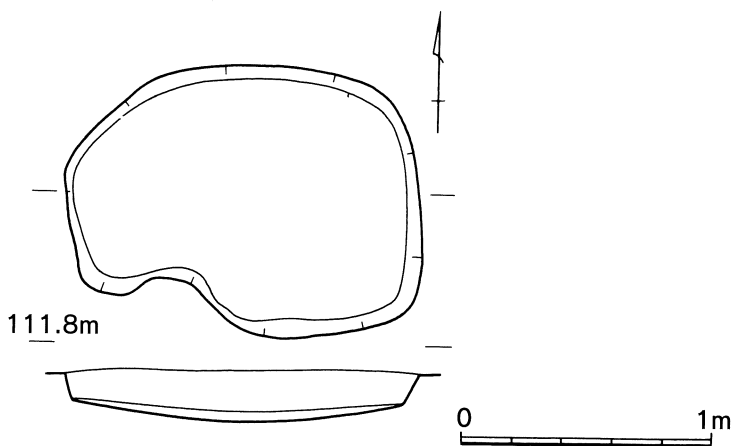
土壙23（第66図）は土壙群の中央部に位置する。平面プランは楕円形基調を呈し、長径1.8m、短径1.5m、深さ0.15mを測る。出土遺物（第67図）のうち1は土師質土器坏と思われる。器高の高いタイプで、復元口径13.5cmを測る。2は瓦器椀の底部である。比較的しっかりした高台が付き、復元底径は5.6cmを測る。内底面にはヘラミガキがみられる。3は瓦器椀の口縁部である。内面にヘラミガキが残る。



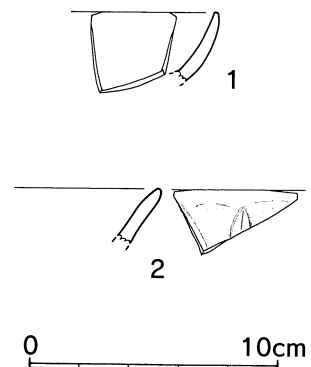
第66図 古庄屋遺跡 土壙23



第67図 古庄屋遺跡 土壙23 出土遺物



第68図 古庄屋遺跡 土壙24



第69図 古庄屋遺跡 土壙24 出土遺物

(15) 土 壙24

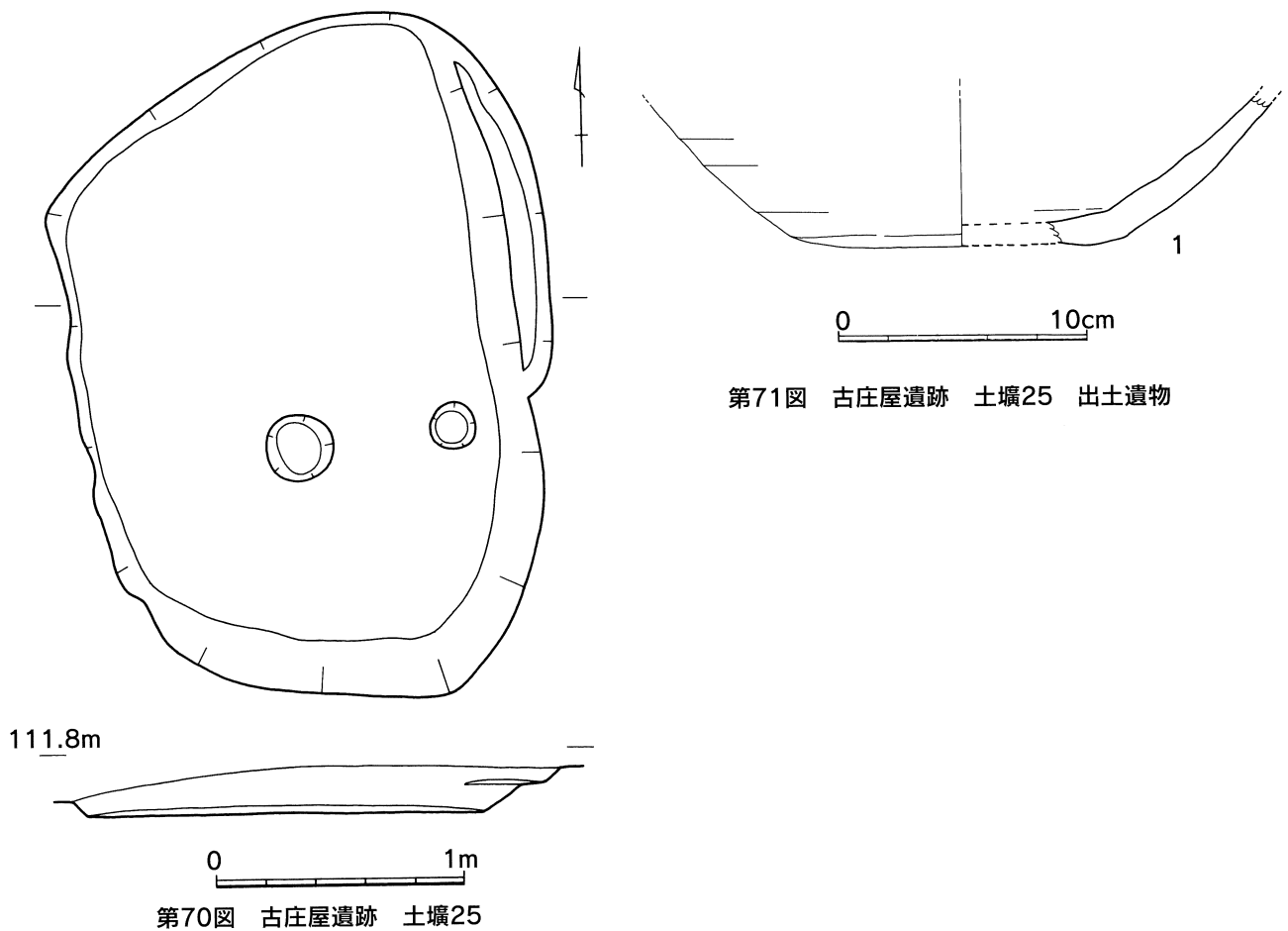
土壙24（第68図）は土壙群の中央にあり、土壙23の北側に位置する。土壙の平面形は不定形を呈し、長径1.4m、短径1.1m、深さ0.2mを測る。

出土遺物（第69図）のうち1は中国製青磁である。釉色は青緑色を呈し、貫入がはいる。2は青磁碗である。緑灰色の釉色を呈し、外面には鎬蓮弁がみられる。

(16) 土 壙25

土壙25（第70図）は建物4の南西側に位置する。平面プランは台形基調を呈し、長辺約2.8m、短辺約2.0m、深さ0.1～0.2mを測る。

土壙内からの遺物（第71図）は、土壙の大きさに比し少数で、図示できたものは1点のみである。1は東播系の須恵質こね鉢である。復元底径は13.4cmを測る。



(17) 土 壙26

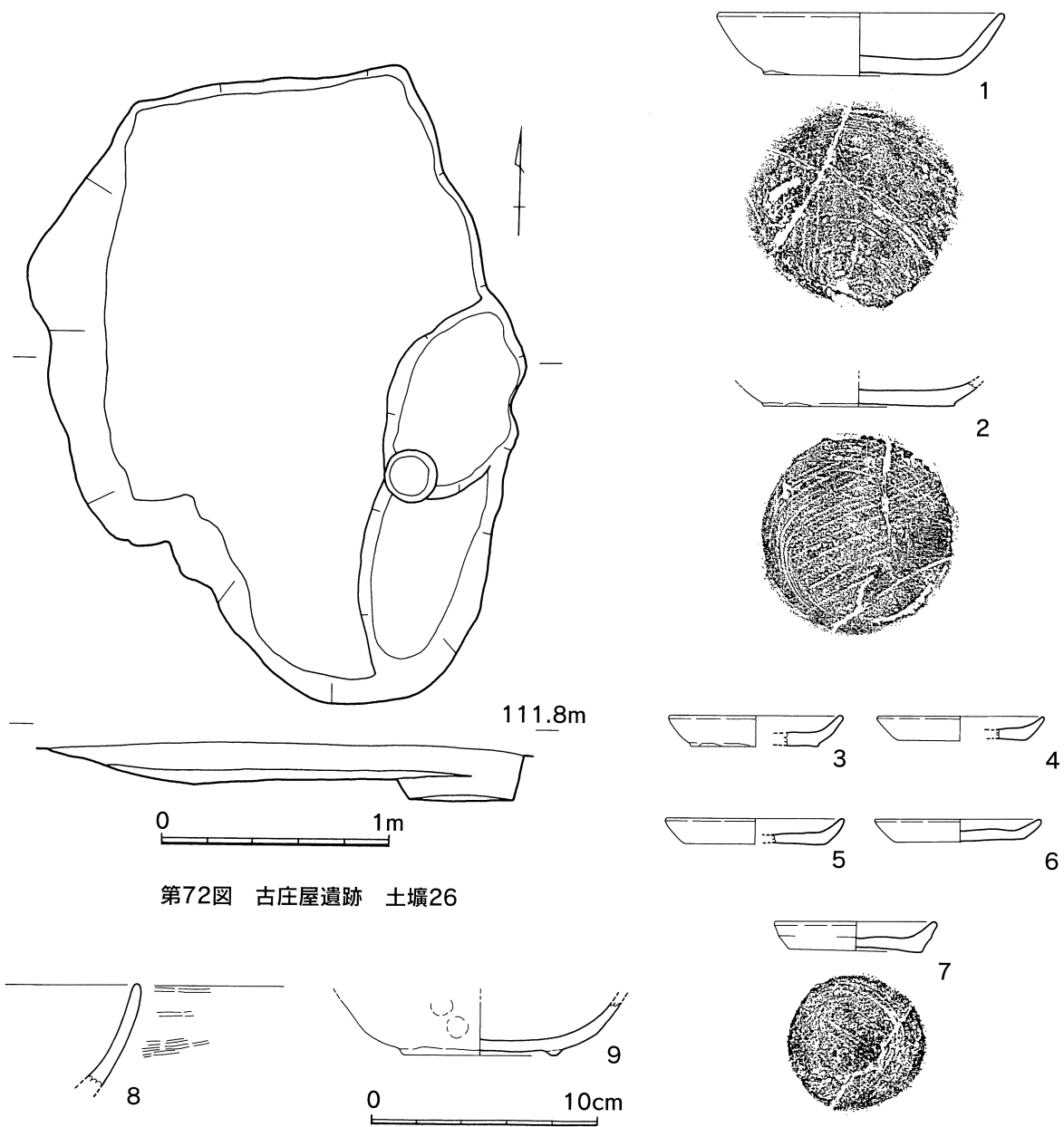
土壙26（第72図）は土壙25の西側に位置する。平面プランは不定形を呈し、長辺約2.8m、短辺約2.1m、深さ0.1～0.25mを測る。

出土遺物（第73図）には、土師質土器杯、土師質土器小皿、瓦器椀がある。1、2は土師質土器杯である。1は底部完形の資料で、復元口径12.7cm、器高2.7cm、底径8.3cmを測る。底部は回転糸切りで、板状圧痕がみられる。器形は、底部と同じ厚みの体部が底部から内湾気味に立ち上がり、直線的に口縁にいたる。2は底部のみの資料である。底部完形で、底部の厚みは1とほぼ同様である。底径は8.4cmを測る。やはり回転糸切りで、

板状圧痕がみられる。

3～7は土師質土器小皿である。3は復元口径7.7cm、器高1.3cm、復元底径5.6cmを測る。底部は摩滅のため明確ではないが、回転糸切りと思われる。体部は、底部から短く斜方向に立ち上がる。4は3と同様な器形を呈するが、口縁部がやや尖り気味である。復元口径7.3cm、器高1.1cm、復元底径5.6cmであるが、底部切り離しは不明である。5は復元口径7.8cm、器高1.1cm、復元底径6.2cmを測り、3と同様な器形を呈する。底部は回転糸切りである。口縁部は、やはりやや尖り気味である。6も3～5と同じ器形を呈し、口縁部はやや尖り気味である。復元口径7.2cm、器高1.0cm、底径5.6cmを測る。底部は回転糸切りである。7は完形品である。3～6とは異なり体部が直立気味に立ち上がる。底部は、回転糸切り後板状圧痕がみられる。法量は口径7.1cm、器高1.3cm、底径5.8cmである。

8、9は瓦器碗である。8は口縁部の資料であるが、小破片のため口径の復元はできなかった。外面にヘラミガキがみられる。9は底部で、復元底径6.8cmを測る。ヘラミガキはみられず、外面に指オサエが残る。



第72図 古庄屋遺跡 土壙26

第73図 古庄屋遺跡 土壙26 出土遺物

(18) 土 壙29

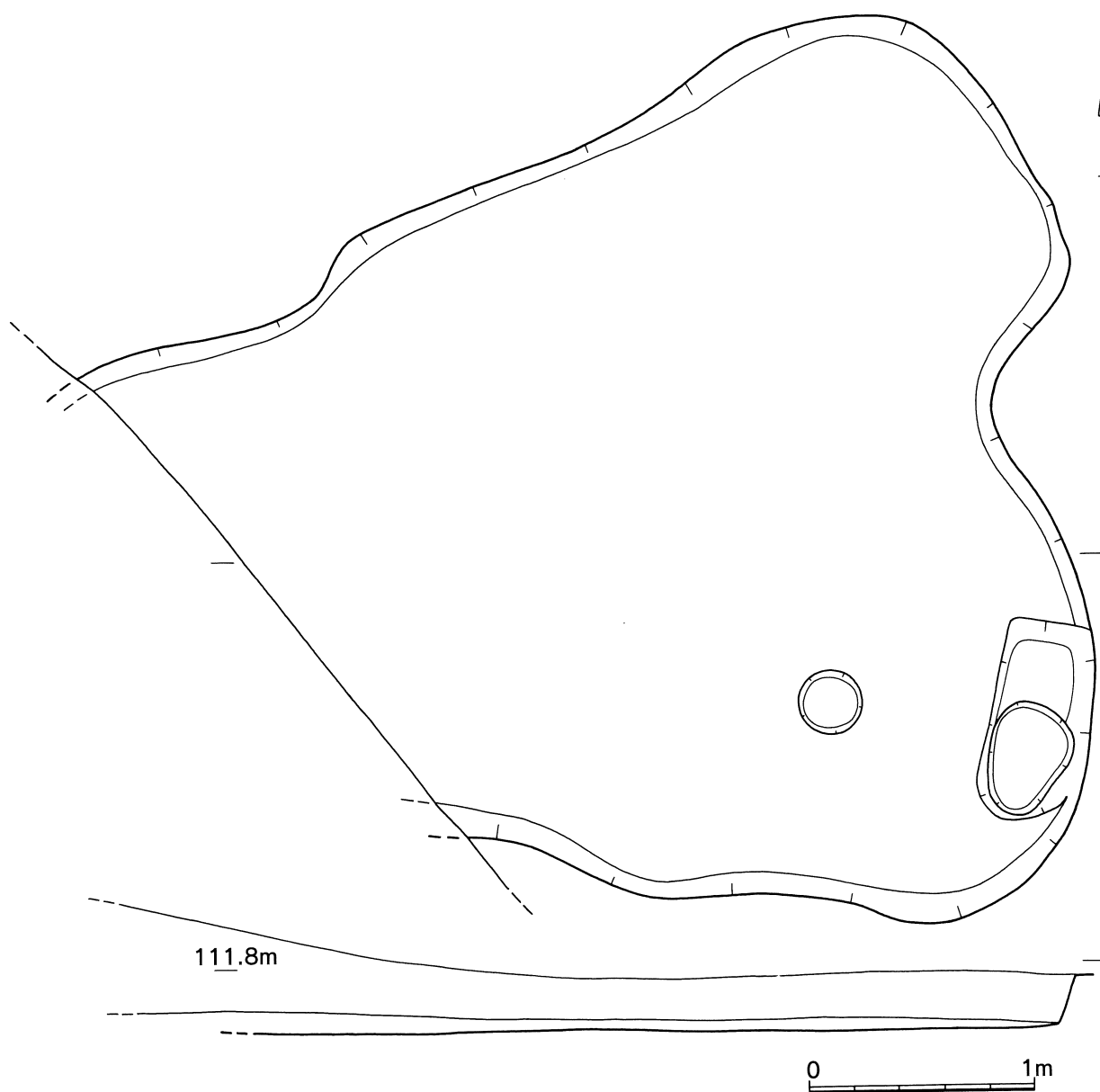
土壙29 (第74図) は井戸1、土壙21のすぐ西側に位置する。大規模な遺構で、西側が調査区外に及ぶ。土壙は不定形の平面プランを呈し、長辺4.2m以上、短辺約4.0m、深さ0.25~0.6mを測る。床面は比較的平坦であるが、一部に柱穴や土壙状のものがみられる。

出土遺物 (第75図) には、土師質土器杯、土師質土器小皿、瓦器椀、中国製青磁碗、石鍋などがある。

1、2は土師質土器杯である。両者とも底部と体部が同じ厚みで、体部が底部より斜方向に立ち上がる。1は復元口径12.0cm、器高2.5cm、復元底径8.0cmで、底部は回転糸切り後板状圧痕がみられる。2は完形品である。口径11.9cm、器高3.0cm、復元底径7.6cmで、底部は回転糸切りである。

3は土師質土器小皿である。体部は底部より器厚が薄く、底部より体部が斜めに立ち上がる。復元口径7.6cm、器高1.3cm、復元底径5.6cmで、底部は回転糸切りと思われる。

4~9は瓦器椀である。4は底部を欠く資料で、復元口径15.0cmを測る。腰部が張り気味で、口縁に向かい

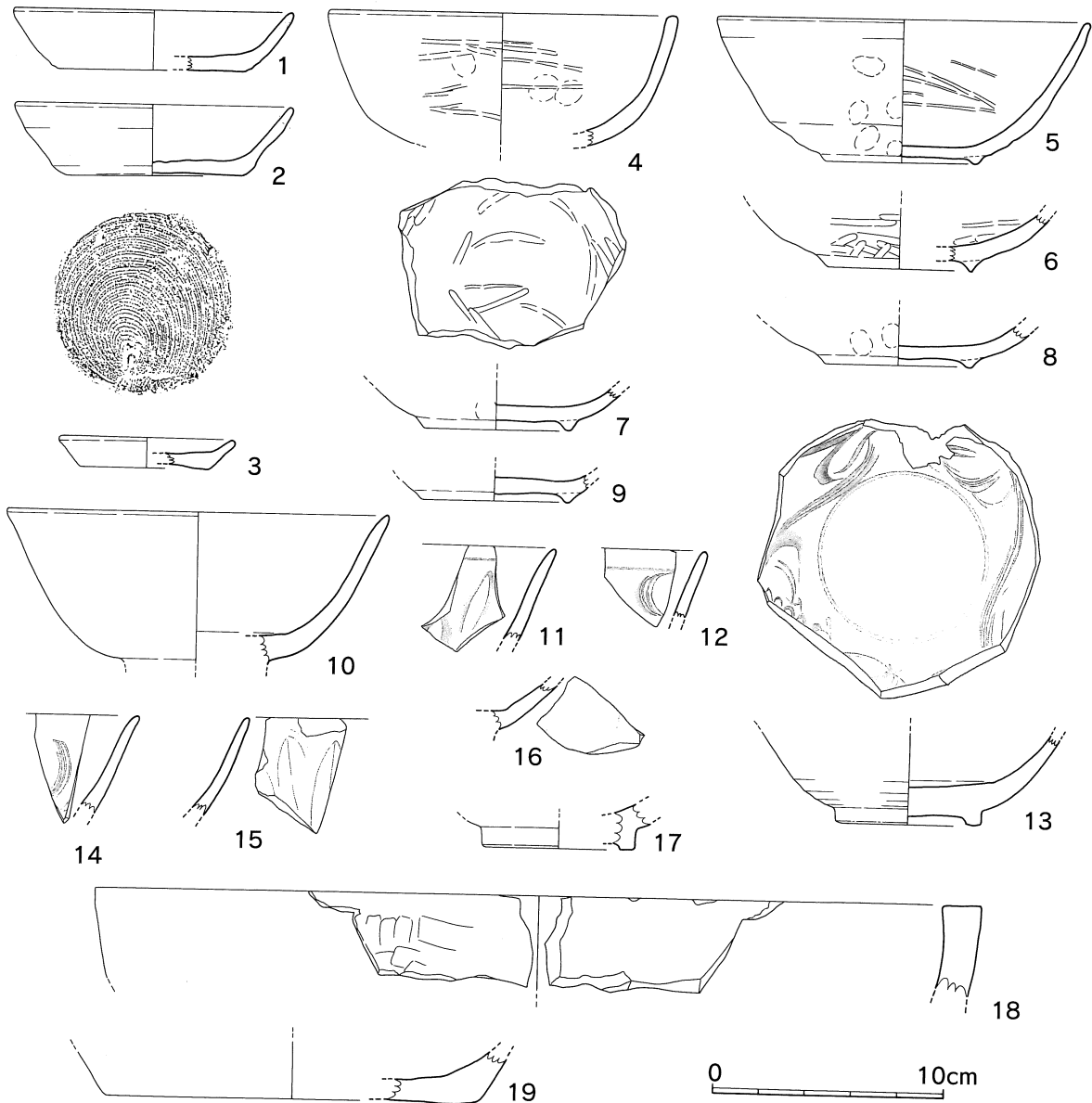


第74図 古庄屋遺跡 土壙29

直立気味に立つ。口縁端部は丸くおさめる。内外面とも横方向の粗なヘラミガキが施される。5は復元口径16.0cm、器高6.0cm、復元底径6.6cmを測る。底部は平坦で、外底面に板状圧痕がみられる。高台は断面三角形で、比較的しっかりと付される。ヘラミガキは内面にのみ粗に施され、外面は指オサエがみられる。6は底部の資料で、復元底径6.2cmを測る。高台は断面三角形で、しっかりとしたものである。体部には内外面にヘラミガキがみられる。7も底部の資料で、底径6.3cmを測る。高台は断面三角形の比較的しっかりとしたものである。内底面には円形状の粗なヘラミガキがみられる。8は復元底径6.4cmを測る底部の資料である。外底面に板状圧痕がみられる。内外面ともヘラミガキはみられず、外面に指オサエが残る。9は復元底径6.4cmを測る。内底面に一部ヘラミガキがみられる。

10～17は中国製青磁碗である。10は内外面無文で、復元口径16.4cmを測る。釉色は灰緑褐色を呈し、貫入がはいる。11～14は内面に文様をもつものである。13は底部完形である。底径は6.2cmで、畳付と内底面が露胎である。釉色は緑灰色を呈し、貫入がみられる。15、16は外面に鎬蓮弁がみられるものである。17は底部で、復元底径6.2cmを測る。畳付は露胎である。

18、19は滑石製石鍋である。18は口縁部で、復元口径38.0cmを測る。また、19は底部である。

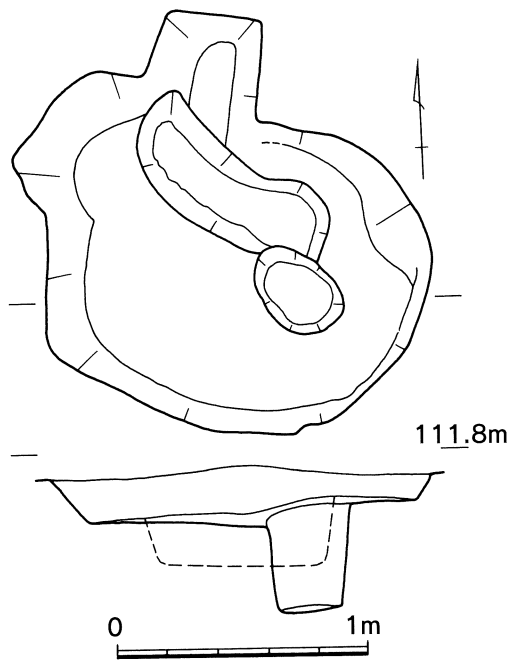


第75図 古庄屋遺跡 土壙29 出土遺物

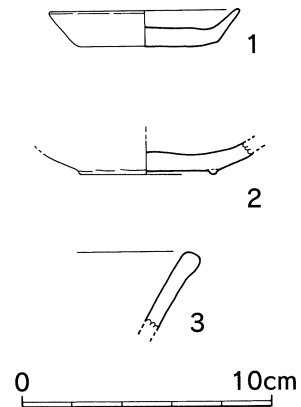
(19) 土 壙30

土壙30（第76図）は土壙群の中央に位置する。平面プランは楕円形基調の不定形を呈し、柱穴などが重複する。規模は長辺1.7m、短辺1.3m、深さ0.1～0.25mである。

出土遺物（第77図）のうち1は土師質土器小皿で、復元口径7.6cm、器高1.4cm、復元底径5.8cmを測る。体部は緩やかに立ち上がり、尖り気味に口縁にいたる。2は瓦器椀底部で、底径5.4cmを測る。低い高台が付されており、内外面ともヘラミガキはみられない。3は焼締陶器の甕か。



第76図 古庄屋遺跡 土壙30

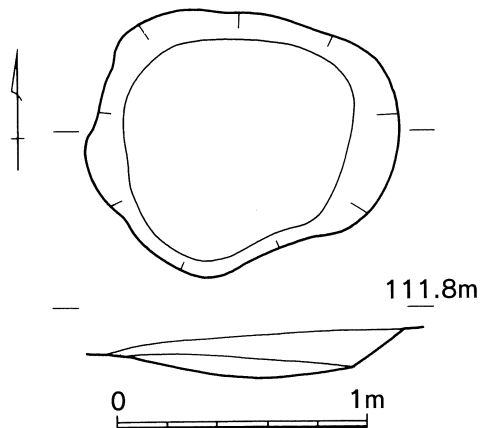


第77図 古庄屋遺跡 土壙30 出土遺物

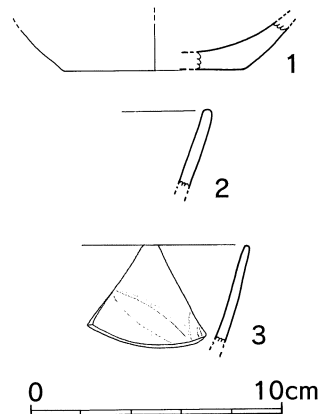
(20) 土 壙31

土壙31（第78図）は土壙30の西側に位置する。平面プランは不整円形を呈し、径1.1～1.3m、深さ0.2mを測る。

出土遺物（第79図）のうち1は土師質土器杯である。器高の高いタイプで、復元底径7.0cmを測る。2は瓦器椀で内外面ともヘラミガキはみられない。3は中国製青磁碗で内面に文様がみられる。



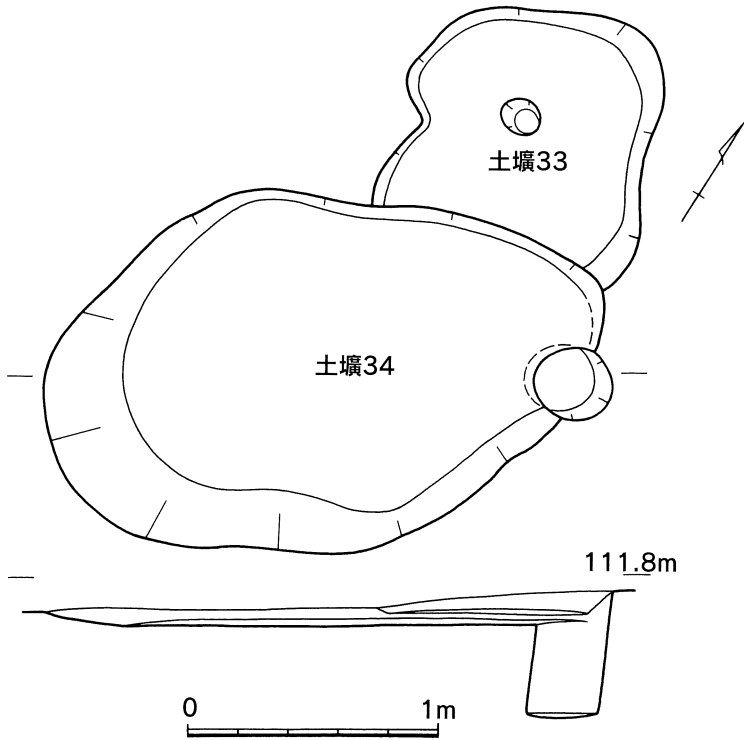
第78図 古庄屋遺跡 土壙31



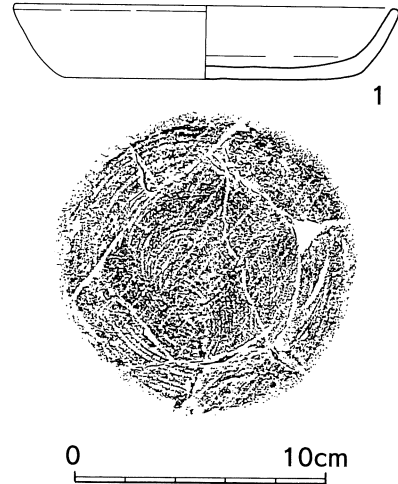
第79図 古庄屋遺跡 土壙31 出土遺物

(21) 土 壙33

土壙33（第80図）は土壙34と重複し、土壙34に切られると思われる。規模は長径1.0m以上、短径0.9m、深さ0.1mである。出土遺物（第81図）は1の土師質土器杯である。ほぼ完形品で、体部は底部と同じ厚みをもつ。体部の立ち上がりは緩やかで、器高は低めである。底部は回転糸切り後板状圧痕である。法量は口径15.1cm、器高2.8cm、底径11.0cmを測る。



第80図 古庄屋遺跡 土壙33・土壙34

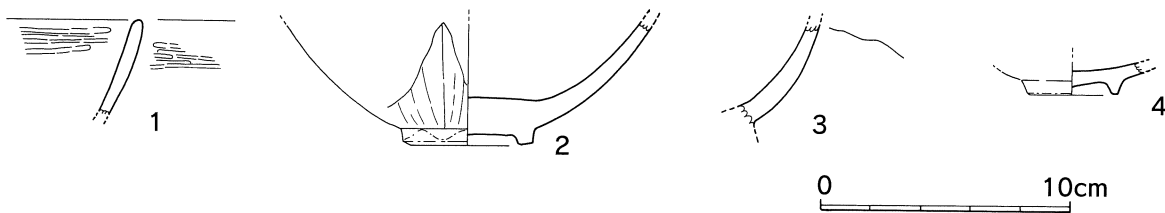


第81図 古庄屋遺跡 土壙33 出土遺物

(22) 土 壙34

土壙34（第80図）は土壙33を切るものである。このあたりは土壙29の北側で、様々な規模の土壙が集中する。土壙34は長楕円形を呈するもので、長径2.3m、短径1.45m、深さ0.1mを測る。床面は平坦で、一部で柱穴が重複する。

出土遺物（第82図）には、瓦器碗や中国製青磁碗などがある。1は瓦器碗である。口縁部資料であるが、小破片のため口径の復元はできない。内外面にヘラミガキがみられる。2～4は中国製青磁碗である。2は口縁部を欠く資料で、底径5.2cmを測る。外面には鎬蓮弁文がみられる。釉色は青緑色で、外底面は露胎である。3も外面に蓮弁文があるが、鎬がみられない。4は復元底径3.6cmの底部で、畳付は露胎である。



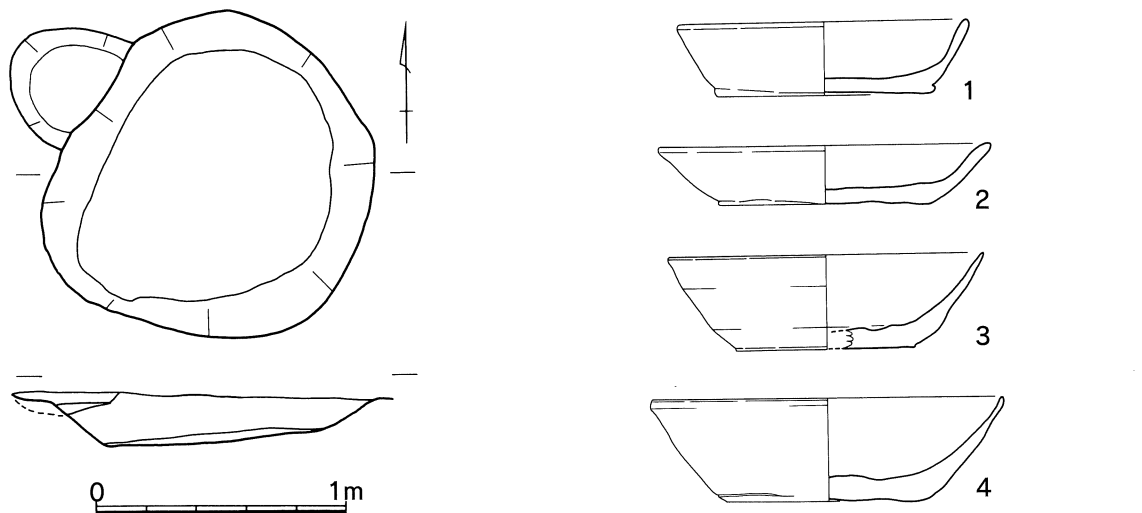
第82図 古庄屋遺跡 土壙34 出土遺物

(23) 土 壙35

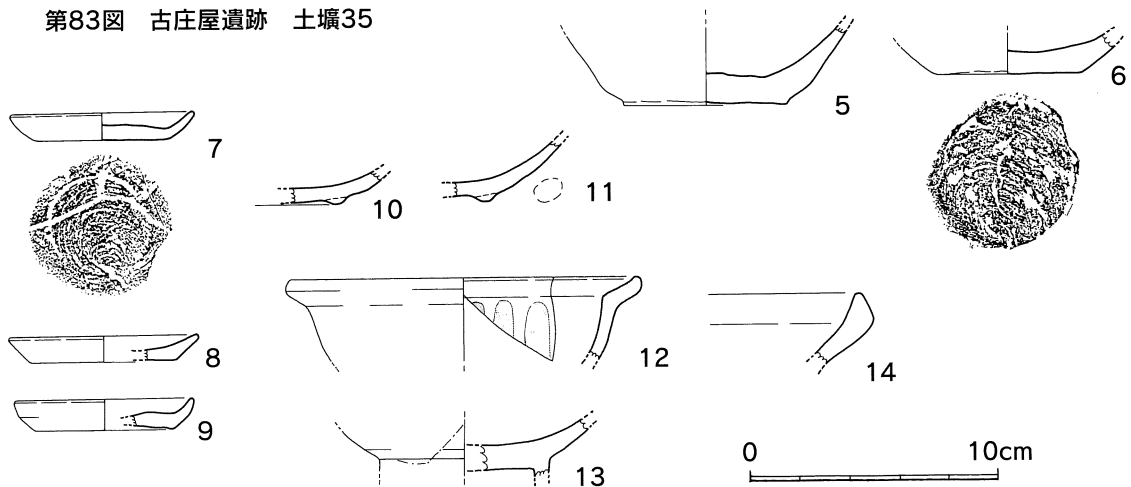
土壙35（第83図）は土壙34の西側にある。平面プランは円形基調を呈し、径1.3m、深さ0.1～0.2mを測る。床面は西に向かい傾斜する。

出土遺物（第84図）のうち、1～6は土師質土器杯である。1は体部が直立気味に立つもので、口縁は丸くおさめる。底部は完形で、回転糸切りと思われる。復元口径11.6cm、器高2.9cm、底径8.6cmを測る。2は体部が斜方向にのびる。底部はほぼ完形で、回転糸切りである。復元口径13.1cm、器高2.3cm、底径8.4cmを測る。3～6は器高の高いタイプのものである。3は斜方向に体部がのび、口縁部は尖り気味になる。底部は回転糸切りで、復元口径12.4cm、器高3.7cm、底径7.0cmである。4も3と同様な器形を呈するが、端部が上方につまみ上げられる。底部は回転糸切り後板状圧痕がみられる。法量は復元口径14.0cm、器高4.0cm、底径8.0cmである。5、6はいずれも底部完形で、両者とも回転糸切りである。5は底径6.4cm、6は5.8cmである。7～9は土師質土器小皿である。7はほぼ完形で、底部は回転糸切りである。体部は底部に比べ薄く、緩やかに立ち上がる。法量は口径7.3cm、器高1.1cm、底径5.0cmである。8は復元口径7.5cm、器高1.0cm、復元底径5.8cmで、底部は回転糸切りである。体部の立ち上がりはシャープである。9は内湾気味に体部が立ち上がる。底部は回転糸切りで、復元口径7.2cm、器高1.2cm、復元底径5.6cmである。

10、11は瓦器椀底部である。12は中国製青磁皿で、口縁部が外方に折れる。体部内面には蓮弁文がみられる。釉色は青緑色で大きな貫入がはいる。13は中国製白磁碗底部。14は東播系の須恵器こね鉢である。



第83図 古庄屋遺跡 土壙35

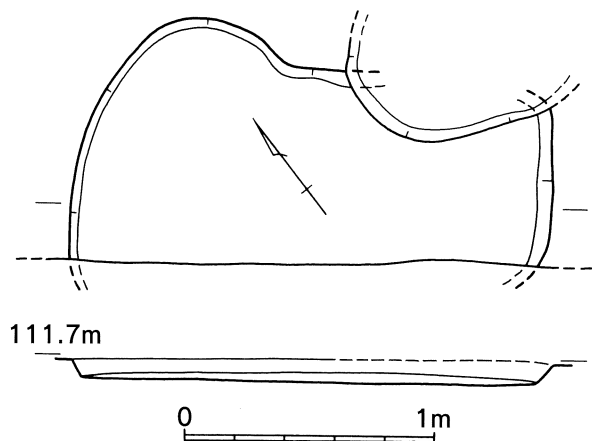


第84図 古庄屋遺跡 土壙35 出土遺物

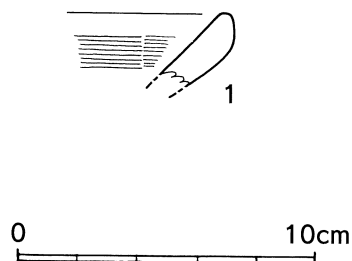
(24) 土 壙40

土壙40（第85図）は、一部を土壙42に切られ、南側を攪乱により破壊される。土壙は長方形基調を呈するものと思われ、長辺1.9m、短辺1.0m以上、深さ0.1mを測る。

出土遺物（第86図）は少なく、図示できるのは1の瓦質土器鉢のみである。口縁端部は上方につまみ上げられる感じで、内面には横方向のハケメがみられる。



第85図 古庄屋遺跡 土壙40

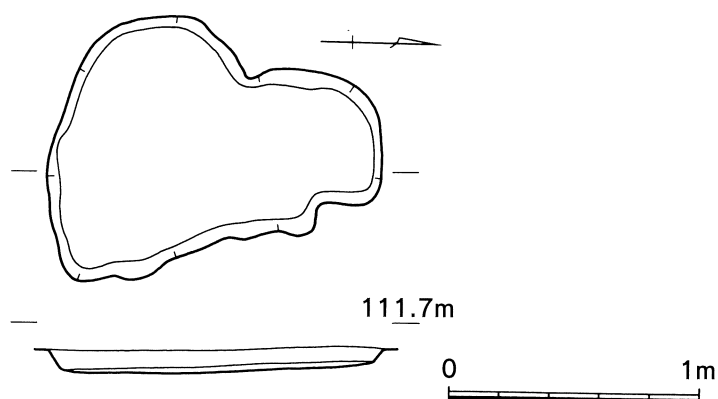


第86図 古庄屋遺跡 土壙40 出土遺物

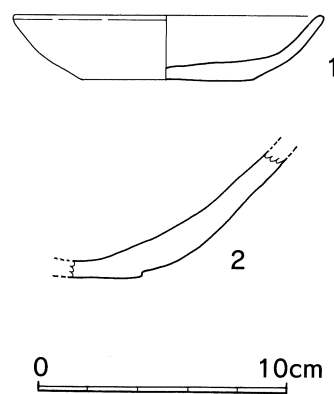
(25) 土 壙42

土壙42（第87図）は土壙1の南側に位置し、土壙40を切る。不定形を呈し、長径1.3m、短径1.0m、深さ0.1mを測る。

出土遺物（第88図）は少なく、図示できたのはわずかである。1は土師質土器杯である。体部は斜方向に内湾気味に立ち上がる。底部は回転糸切り後板状圧痕である。法量は復元口径12.4cm、器高2.5cm、復元底径7.0cmを測る。2は東播系須恵器こね鉢底部である。



第87図 古庄屋遺跡 土壙42

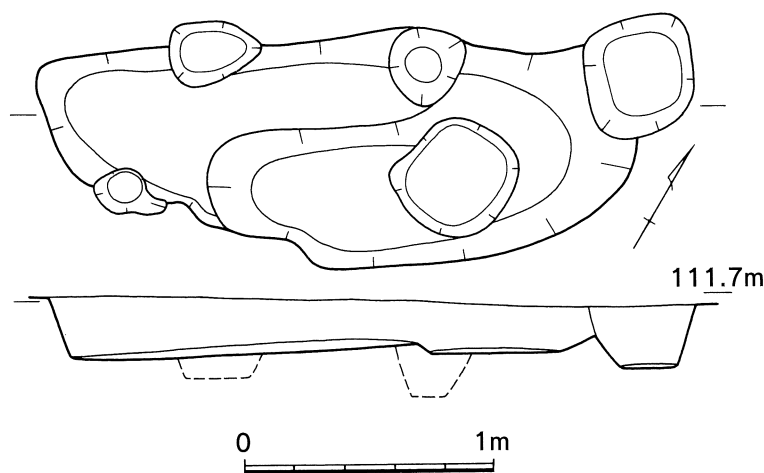


第88図 古庄屋遺跡 土壙42 出土遺物

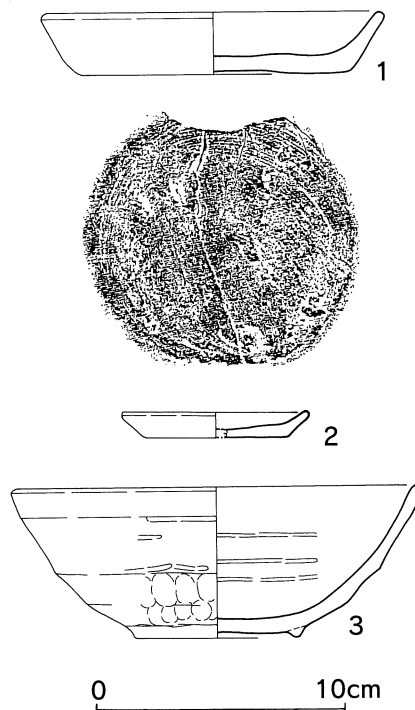
(26) 土 壙43

土壙43（第89図）は土壙25や土壙26の南西側に位置する。平面プランは長楕円形基調を呈するが、柱穴がい

くつか重複する。規模は長径2.4m、短径0.95m、深さ0.2~0.25mである。出土遺物（第90図）のうち1は土師質土器杯である。体部は立ち上がり部がやや丸みを持ち、斜方向に立ち上がる。口径に比し、器高が低い。底部は回転糸切り後板状圧痕である。底部完形で、口径13.6cm、器高2.4cm、底径10.5cmを測る。2は土師質土器小皿で復元口径7.5cm、器高1.0cm、底径5.8cmである。3は瓦器碗で、復元口径16.2cm、器高5.9cm、底径6.5cmを測る。体部内外面には粗なヘラミガキがみられ、内底面にも雑な同心円状のミガキが施される。



第89図 古庄屋遺跡 土壙43



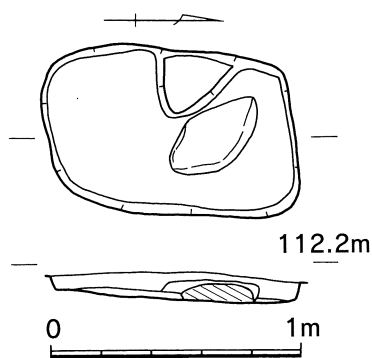
第90図 古庄屋遺跡 土壙43 出土遺物

(27) 土 壙44

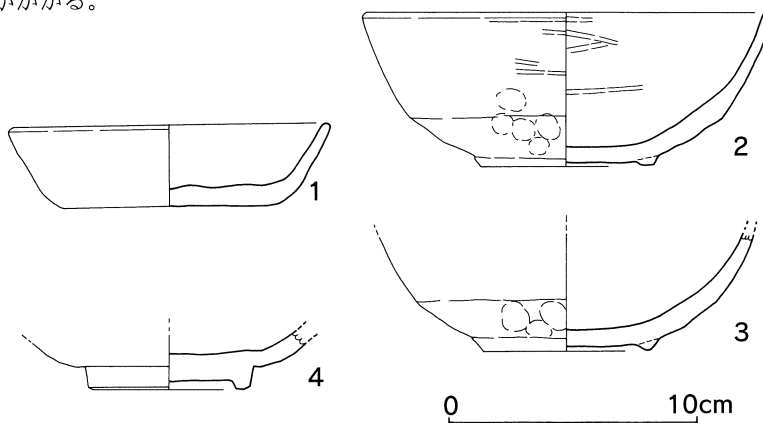
土壙44（第91図）は井戸1の北側に位置する。土壙は長方形を呈し、長辺1.0m、短辺0.6m、深さ0.1mの規模をもつ。床面には一辺0.3mの扁平な石がみられる。

出土遺物（第92図）のうち、1は土師質土器杯である。復元口径12.6cm、器高3.2cm、底径8.6cmで、底部は回転糸切りである。体部の立ち上がり部は緩やかである。2、3は瓦器碗である。2は復元口径16.2cm、器高6.0cm、底径6.8cmで、体部内外面に粗なヘラミガキがみられる。3は口縁部を欠く資料で、底径6.6cmを測る。全体に摩滅が著しく調整は不明である。

4は中国製青磁碗で、緑灰色の釉がかかる。



第91図 古庄屋遺跡 土壙44

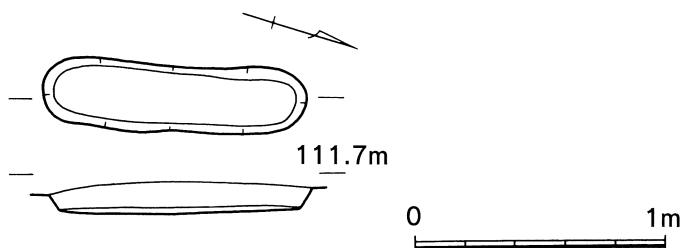


第92図 古庄屋遺跡 土壙44 出土遺物

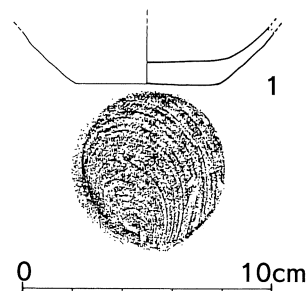
(28) 土 壙46

土壙46（第93図）は土壙1の東北側に位置する。土壙は長楕円形を呈し、長径1.05m、短径0.25m、深さ0.1～0.15mを測る。

出土遺物（第94図）のうち、1は器高の高いタイプの土師質土器坏である。底部完形で、底径5.8cmを測る。底部は回転糸切りである。



第93図 古庄屋遺跡 土壙46

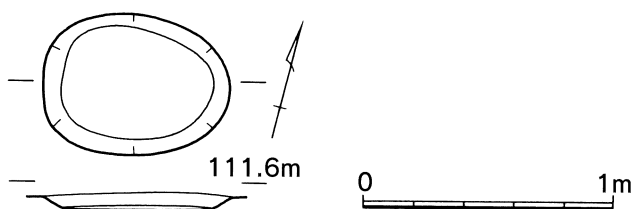


第94図 古庄屋遺跡
土壙46 出土遺物

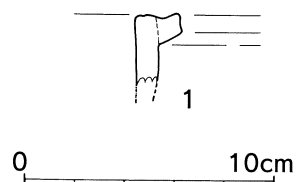
(29) 土 壙49

土壙49（第95図）は溝5の北側に位置する。平面プランは楕円形で、長径0.7m、短径0.55m、深さ0.05mを測る。

出土遺物（第96図）のうち1は土師質の土鍋口縁である。口縁外面に断面方形の鍔が付される。



第95図 古庄屋遺跡 土壙49

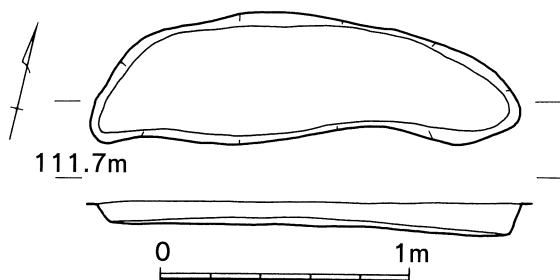


第96図 古庄屋遺跡 土壙49 出土遺物

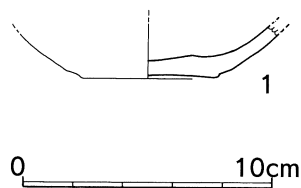
(30) 土 壙50

土壙50（第97図）は、土壙13の南側に位置するものである。土壙50の位置するあたりは、土壙が密集する建物5などの西側の部分とは異なり、やや大型の土壙と細い溝があるのみである。土壙50は長楕円形基調のもので、長径1.7m、短径0.5m、深さ0.1～0.15mを測る。

出土遺物（第98図）は少なく、図示できたのは1点のみである。1は器高の高いタイプの土師質土器坏で、底部は回転糸切りである。底径は5.4cmを測る。



第97図 古庄屋遺跡 土壙50



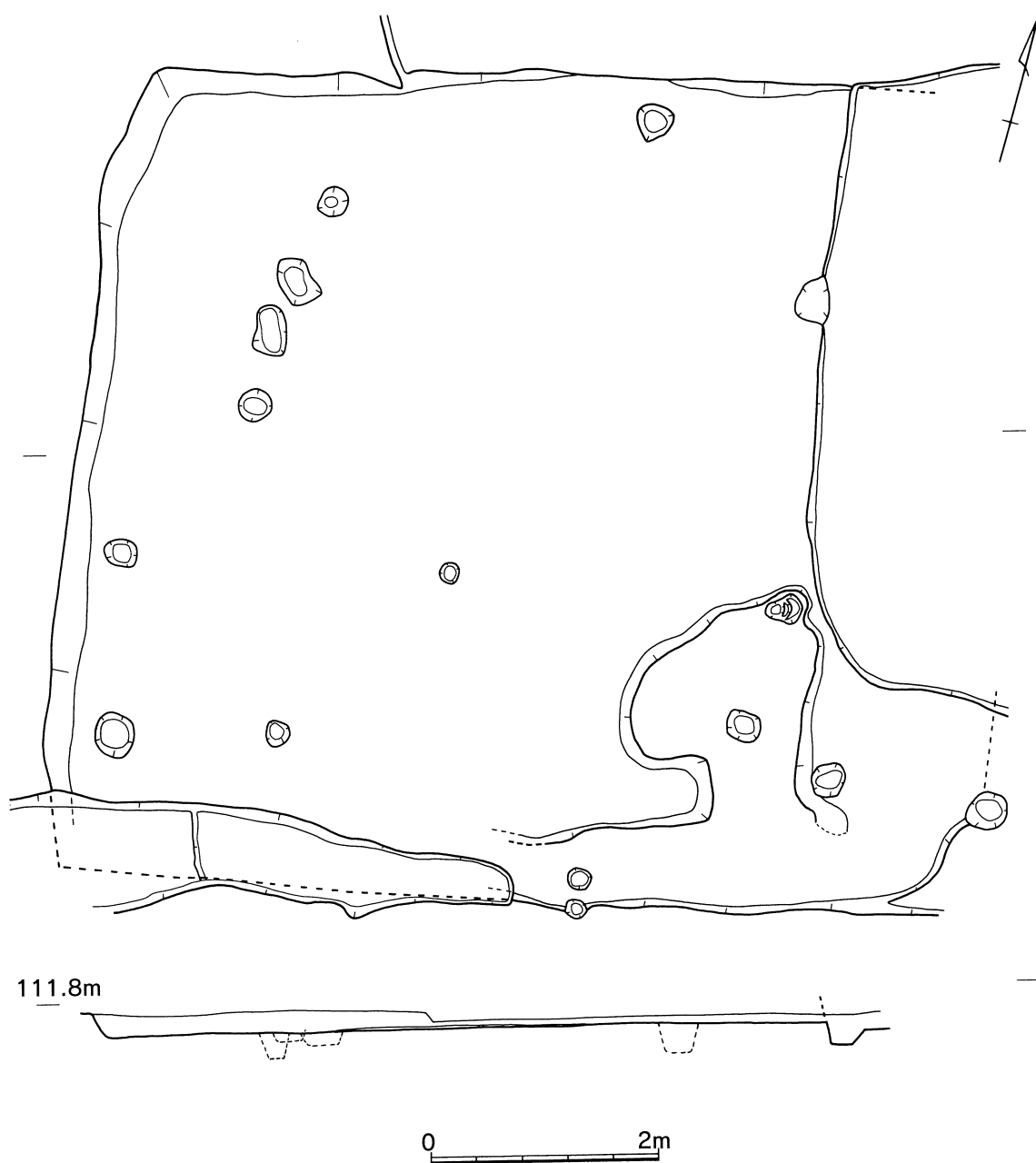
第98図 古庄屋遺跡 土壙50 出土遺物

4 竪穴

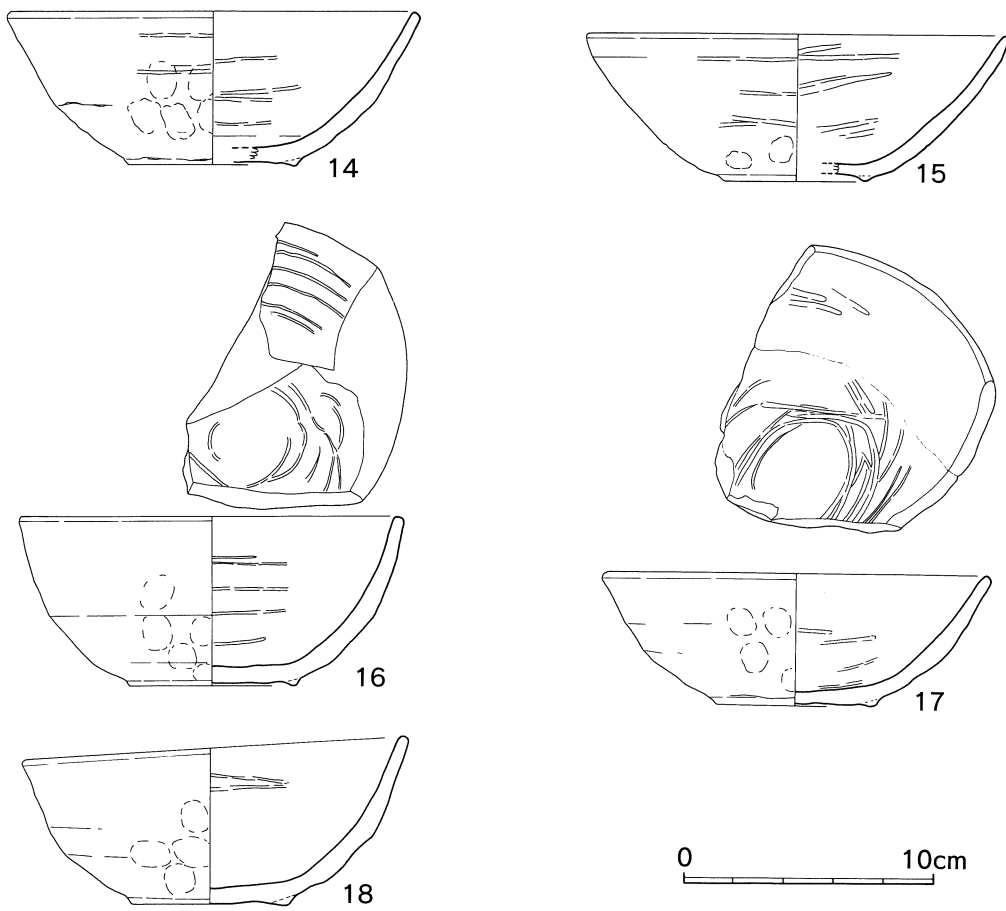
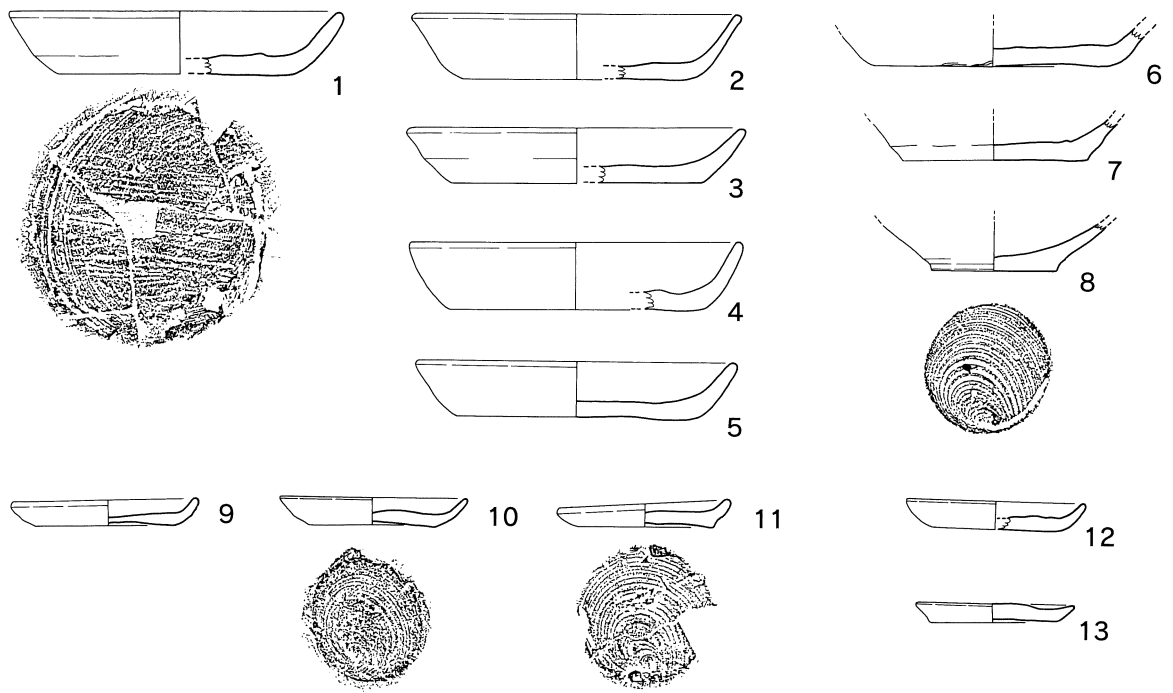
柵列1の西側に竪穴4基が重複してみられる。遺跡内の他の場所に竪穴はなく、屋敷内の遺構配置に計画性がうかがえる。

(1) 竪穴1

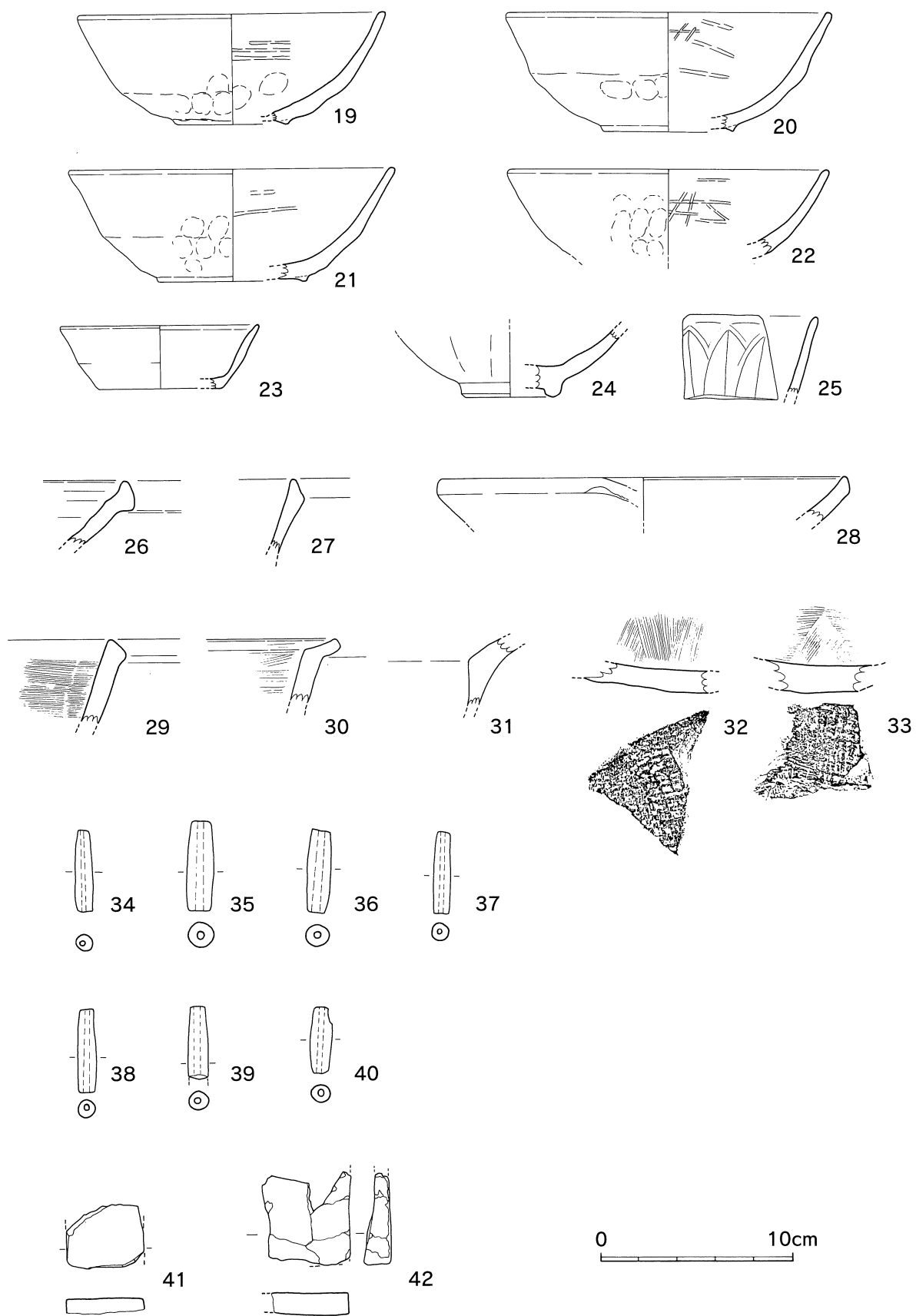
竪穴1（第99図）は、竪穴2を切り、竪穴3と溝2に切られる。竪穴は方形を呈するが、東側を3号竪穴に、また南側を溝2により切られるため全形は不明である。しかし、残存する部分から南北約7m、東西8mの規模



第99図 古庄屋遺跡 竪穴1



第100図 古庄屋遺跡 竪穴1 出土遺物(1)



第101図 古庄屋遺跡 竪穴1 出土遺物(2)

を有することが分かる。現状における深さは0.2mで、床面は一部を除き平坦である。竪穴内には柱穴がいくつみられるが、本竪穴に伴うものであるか不明である。

出土遺物（第100、101図）には土師質土器、瓦器椀、中国製磁器、こね鉢、土鍋、土鍾、砥石などがある。

1～8は土師質土器坏である。このうち1～6は器高の低いもので、底部と同じ厚みの体部が緩やかに立ち上がる。1は底部がほぼ完形で、回転糸切りの後に板状圧痕がみられる。体部は内湾気味に立ち上がる。法量は口径13.2cm、器高2.4cm、底径9.4cmである。2の底部も回転糸切りで、後に板状圧痕がみられる。口縁部はわずかに外反気味である。復元口径13.0 cm、器高2.5cm、復元底径8.8cmを測る。3は復元口径13.4 cm、器高2.2cm、復元底径10.0cmである。体部はわずかに内湾気味で、底部は回転糸切りの後に板状圧痕がみられる。4も体部が内湾気味に立ち上がる。復元口径13.1 cm、器高2.6cm、復元底径10.0cmで、底部は回転糸切りである。5は体部が斜方向にのびる。底部は回転糸切り後板状圧痕である。復元口径12.6 cm、器高2.2cm、底径9.4cmである。6は口縁部を欠くが、底部はほぼ完形である。底部は回転糸切り後に一部にナデがみられる。底径9.6cmを測る。7、8は器高の高いものであるが、両者とも口縁部を欠く。7は復元底径7.8cmで、底部は回転糸切り後板状圧痕である。8は底部完形で、底径5.0cmを測る。体部の立ち上がりはシャープで、底部は回転糸切りである。9～13は土師質土器小皿である。9は底部と同じ厚みの体部が、短く内湾気味に立ち上がる。底部は回転糸切り後板状圧痕である。法量は口径7.4cm、器高1.0cm、底径5.6cmである。10も9と同様な器形を呈する。底部は回転糸切りである。復元口径7.4cm、器高1.1cm、底径4.8cmを測る。11は体部が短くシャープに立ち上がるもので、端部は丸みをもつ。底部はほぼ完形で、回転糸切りである。12は9、10と同じような器形を呈する。復元口径7.1cm、器高1.1cm、復元底径5.0cmを測るもので、底部は回転糸切りである。13は、体部を底部から斜方向に尖り気味につまみ上げる。底部は回転糸切り後板状圧痕である。法量は復元口径6.2cm、器高0.8cm、底径5.0cmを測る。

14～22は瓦器椀である。14は復元口径16.4cm、器高6.0cm、底径6.2cmを測る。底部には低めの高台が付く。体部内外面には粗なヘラミガキがみられる。15は復元口径16.6cm、器高5.7 cm、復元底径5.6 cmである。やはり低めの高台をもち、体部内外面には粗なヘラミガキがみられる。16は体部が内湾気味に立ち上がる。体部外面にはヘラミガキがみられず、下半に指オサエが残る。内面は体部に粗なヘラミガキがあり、内底面にも非常に雑な同心円状のヘラミガキが施される。法量は復元口径15.2cm、器高6.6 cm、底径6.6 cmを測る。17は体部が斜方向に立ち上がるもので、復元口径15.4cm、器高5.1 cm、底径6.2 cmを測る。やはり体部外面にはヘラミガキはみられず、内面にのみ粗なヘラミガキが施される。また、内底面にも雑な同心円状のヘラミガキがみられる。18は口径15.2cm、器高6.1 cm、底径6.2 cmを測るもので、低い高台が付く。体部内側に粗なヘラミガキがみられる。19も内面にのみ粗なヘラミガキが施される。外面下半には指オサエがみられる。復元口径15.8cm、器高5.6cm、復元底径5.8cmである。20は復元口径16.8cm、器高6.0cm、復元底径6.8cmで、低い高台が付く。21は復元口径16.7cm、器高5.7cm、復元底径7.6cmである。22は復元口径16.6cmである。

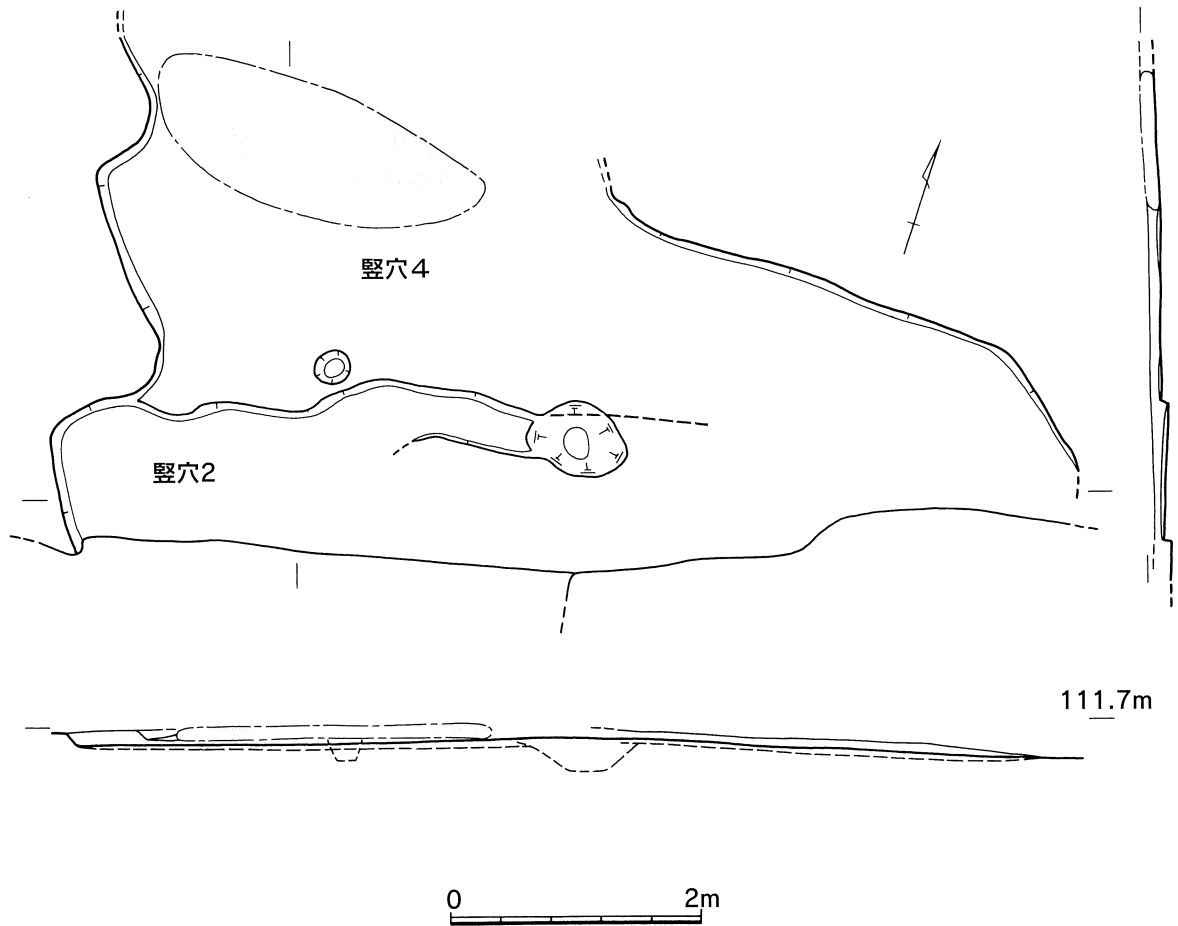
23は中国製の口禿白磁皿である。24、25は中国製青磁碗で、外面に鎬蓮弁がみられる。

26は東播系こね鉢。27～29は瓦質土器こね鉢である。30～33は土鍋で、30には内面に横方向のハケメがみられる。また、32、33は外面に格子目のタタキが施される。34～40は土鍾で、いずれも長さ4cm内外である。41、42は砥石の破片である。

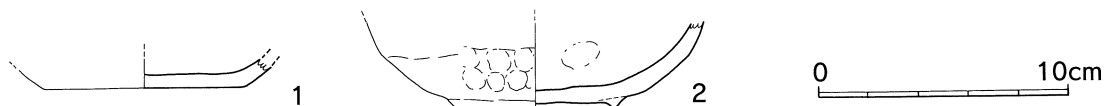
(2) 竪 穴 2

竪穴 2（第102図）は竪穴 4 を切り、竪穴 1 と竪穴 3 に切られる。平面プランは方形であるが、大部分は切られており全容は不明である。規模は定かではないが、深さは0.2mを測る。

出土遺物（第103図）はあまり多くない。1は土師質土器坏である。器高の低いタイプで、復元底径は8.0cmを測る。底部は回転糸切りである。2は瓦器椀である。復元底径6.4cmを測る。体部外面下半には指オサエがみられる。



第102図 古庄屋遺跡 竪穴2、4

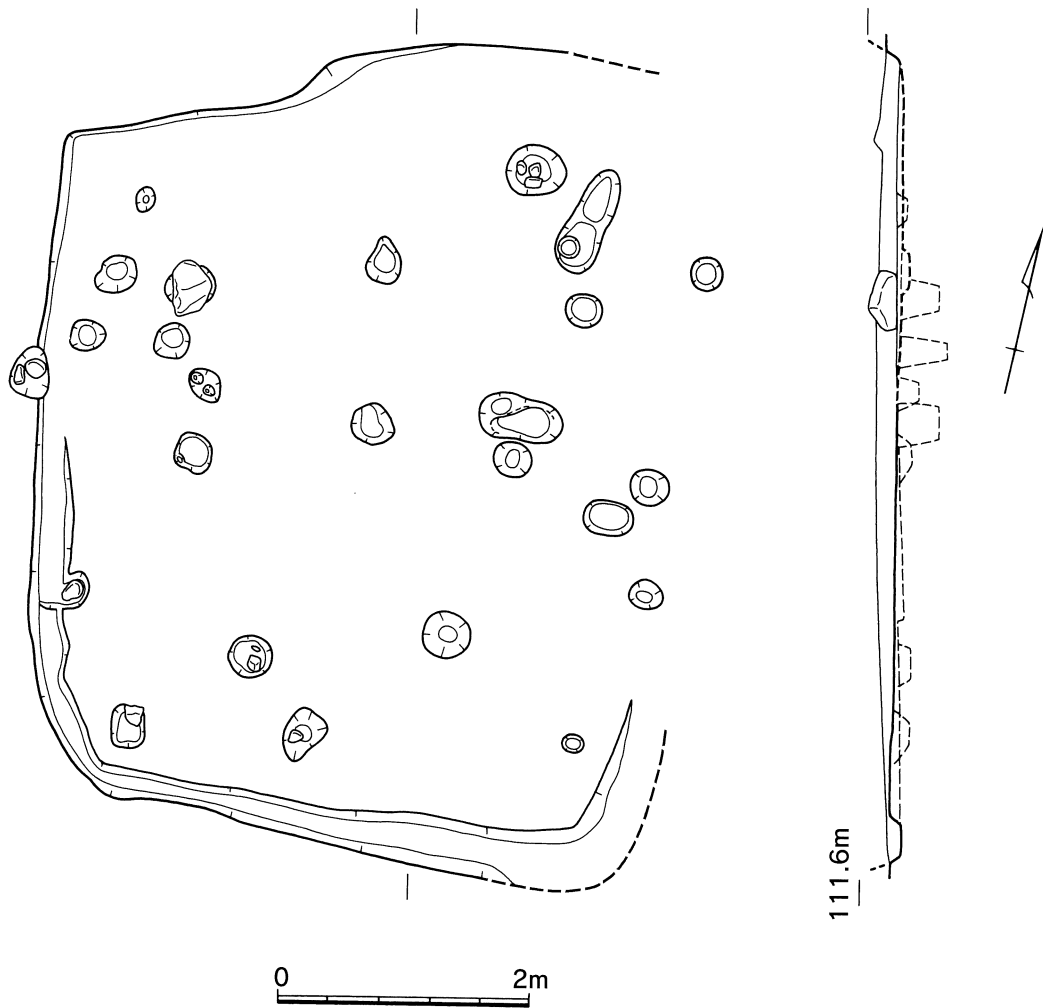


第103図 古庄屋遺跡 竪穴2 出土遺物

(3) 竪穴3

竪穴3（第104図）は竪穴1と竪穴2を切る。やや台形気味の方形を呈すると思われるが、東側が削平のため明確ではない。南北の辺のうち西側が5.2m、東側が6.5mで、東西の辺が約5mである。深さは現状で0.2mを測る。床面は平坦で柱穴が多数みられるが、竪穴に伴うものかは定かでない。また、西側と南側及び東側の壁に沿って幅0.2～0.4m、深さ0.1mの溝が巡る。

出土遺物（第105図）のうち1～6は土師質土器杯である。1～5は器高の高いタイプで、内湾気味に体部が立ち上がる。いずれも底部は底部回転糸切りで、このうち1、3、5には板状圧痕がみられる。1は底部がほぼ完形で、復元口径12.6cm、器高3.6cm、底径6.2cmである。2も底部がほぼ完形で、復元口径11.6cm、器高3.7cm、底径6.2cmを測る。3も底部完形で、復元口径11.7cm、器高3.9cm、底径6.2cmである。4は復元口径12.0cm、器高4.2cm、底径5.5cmで、底部はほぼ完形である。5は口縁部を欠くもので、底径6.0cmを測る。6は器高の低いタイプである。体部が底部から比較的シャープに立ち上がる。法量は復元口径10.7cm、器高



第104図 古庄屋遺跡 竪穴3

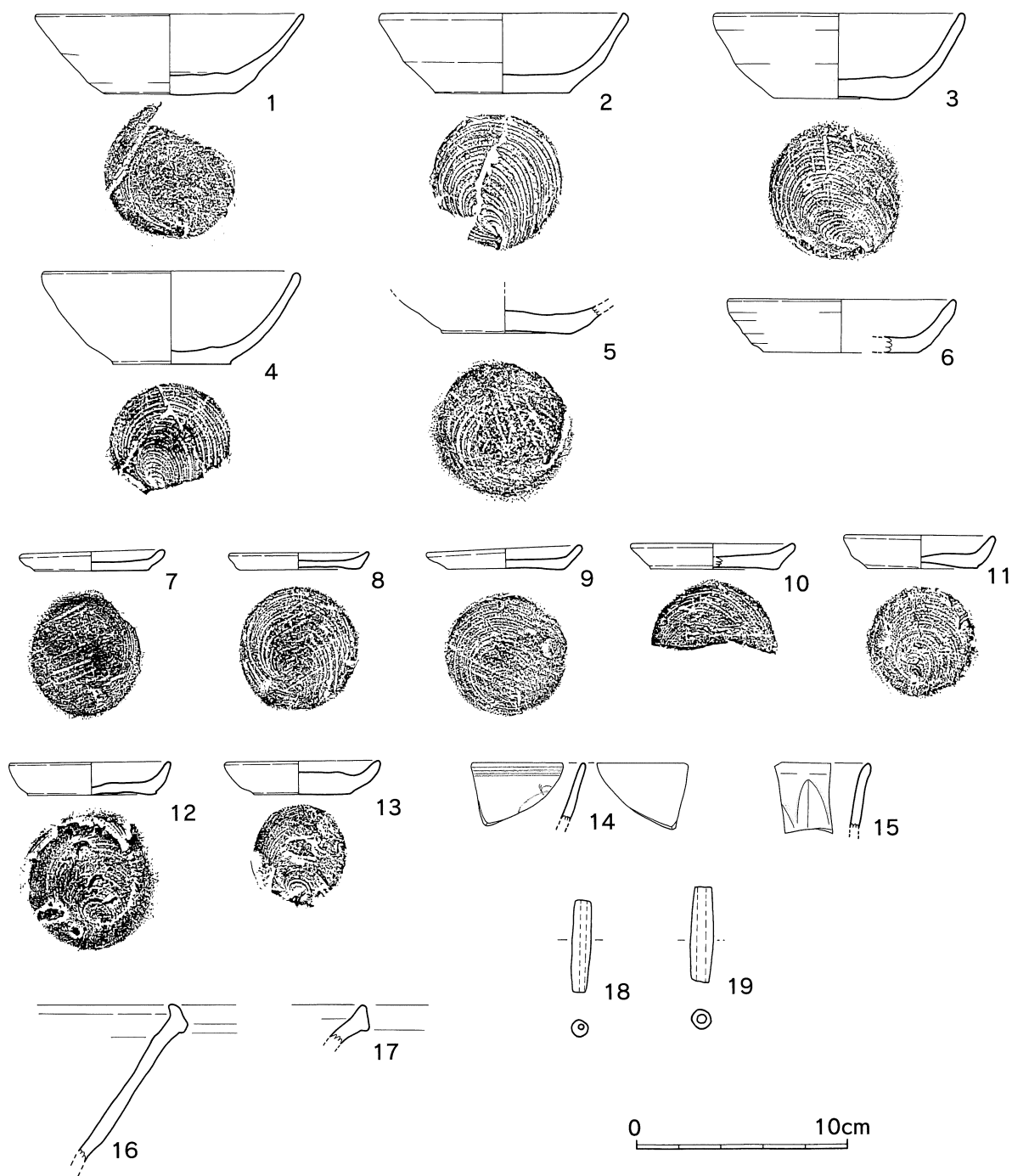
2.4cm、復元底径7.2cmである。

7～13は土師質土器小皿である。7は体部と底部が同じ厚みで、体部が斜方向に比較的シャープに短く立ち上がる。口縁端部は丸くおさめる。底部は回転糸切り後に板状圧痕が付く。ほぼ完形で口径6.7cm、器高0.9cm、底径5.1cmを測る。8も完形で、体部が短くシャープに口縁尖り気味に立ち上げられる。底部は回転糸切り後板状圧痕がみられる。口径6.6cm、器高0.8cm、底径5.6cmである。9は7と同様な器形を呈する。底部は回転糸切り後に板状圧痕が付く。完形で口径7.3cm、器高0.9cm、底径5.4cmを測る。10は口縁尖り気味に体部が引き上げられる。底部は回転糸切りである。口径7.6cm、器高1.2cm、底径5.8cmである。11は器高がやや高く、体部が直立気味に立つ。底部は完形で回転糸切りである。口径7.1cm、器高1.6cm、底径5.0cmを測る。12も11と同様な器形を呈する。底部は回転糸切りで、口径7.6cm、器高1.5cm、底径6.0cmである。13は完形品である。底部は体部に比べるとかなり厚い。体部は内湾気味に口縁にいたり、口縁端部は尖り気味である。口径7.2cm、器高1.5cm、底径4.5cmを測る。

14、15は中国製青磁碗である。14は貫入のはいった灰緑色の釉がかかるもので、内面に文様がみられる。15は青緑色の釉色を呈し、貫入がはいる。外面に鎬蓮弁がみられる。

16、17は東播系の須恵器こね鉢である。

18、19は土錘である。

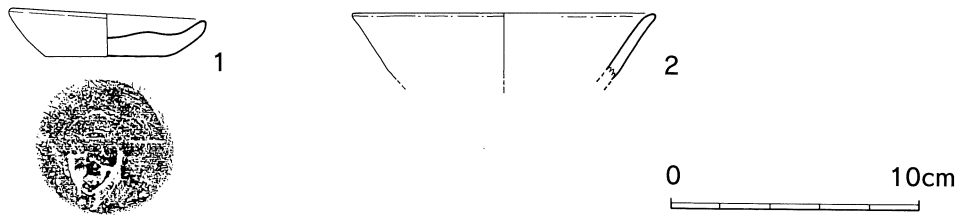


第105図 古庄屋遺跡 竪穴3 出土遺物

(4) 竪穴4

竪穴4（第102図）は2号竪穴とSX 1により切られる。また、削平が著しいため全体の平面プランも定かではない。竪穴の西壁ちかくには厚さ0.2mほどの焼土層がみられる。しかし、竪穴内のこのほかの遺構については明らかにできない。

出土遺物（第106図）のうち1はほぼ完形の土師質土器小皿である。底部は厚く、体部が斜方向におびる。口径7.8cm、器高1.7cm、底径4.8cmを測る。2は中国製の白磁口禿皿である。



第106図 古庄屋遺跡 竪穴4 出土遺物

5 井戸

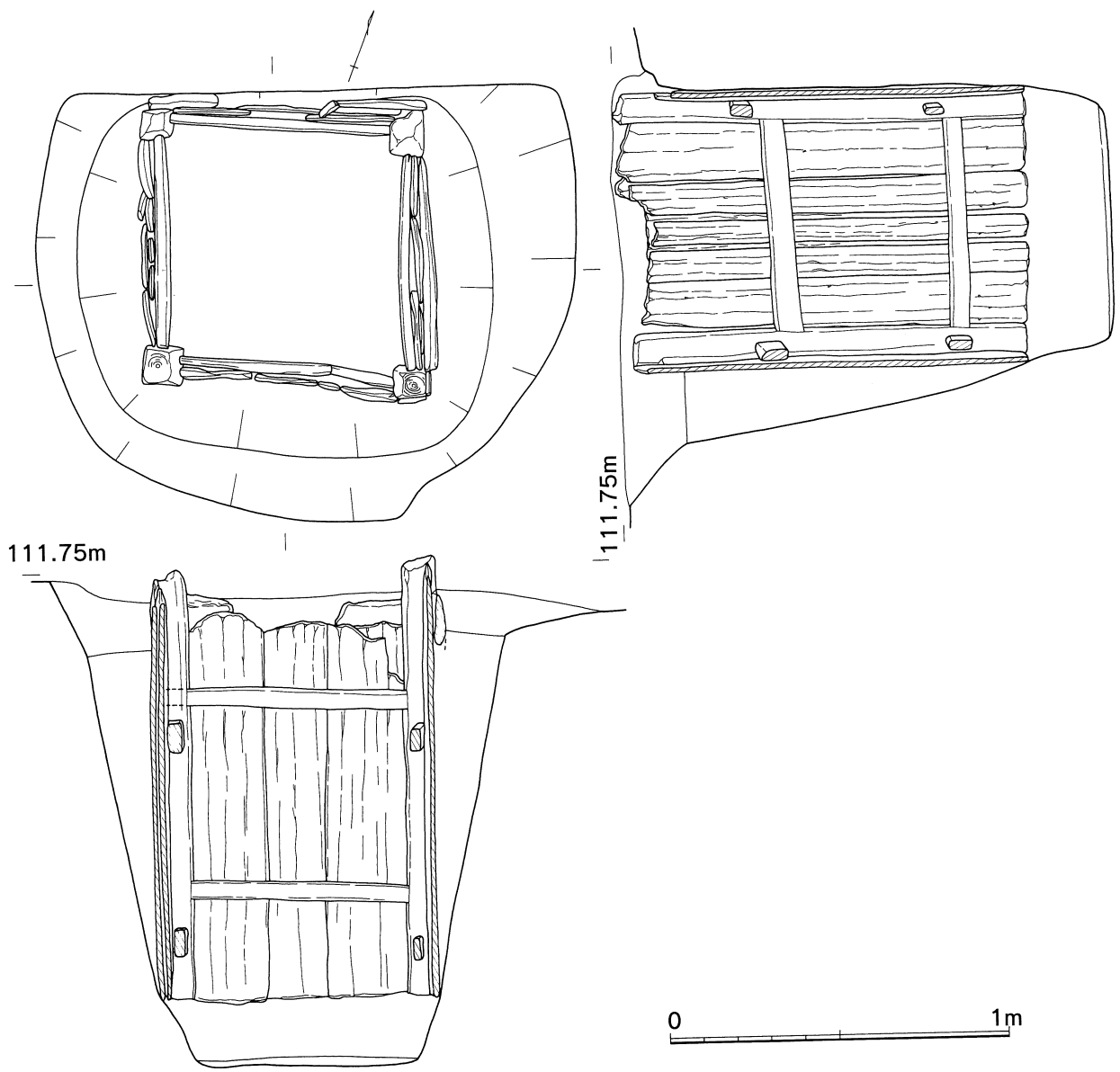
(1) 井戸1

井戸1（第107図）は、建物群の西側に展開する土壌群中に位置する。土壌21と重複しており、土壌21を切る。井戸は木組方形縦板組横棧型井戸である。掘形は隅丸方形基調を呈するもので、一辺1.2×1.5m、深さ1.45mを測る。掘形は北側の辺が直線的で、北側の辺に接するように木組の井側を据える。井側は内法の一辺が約0.7mで、高さは1.25mである。井戸の底には井筒はみられない。井側の木組は四隅に一辺10～16cmの角柱（第111、112図）を立てる。柱は一部に表皮を残すものの、角柱に仕上っている。また、先端を杭状に加工したものもある。角柱には柄穴をあけ、一辺4～8cmの角材で作った横棧を各辺2段ずつ差し込む。横棧の外側には幅5～20cm、厚さ2cm前後、長さ約110cmの縦板を各辺3～5枚たてる。縦板継目の外側には添板をあてる部分もある。以上の木組に鉄釘などは全く使用していない。井戸内からは土師質土器や木製品などのほかに、多くの木切れ、籾殻などが出土した。

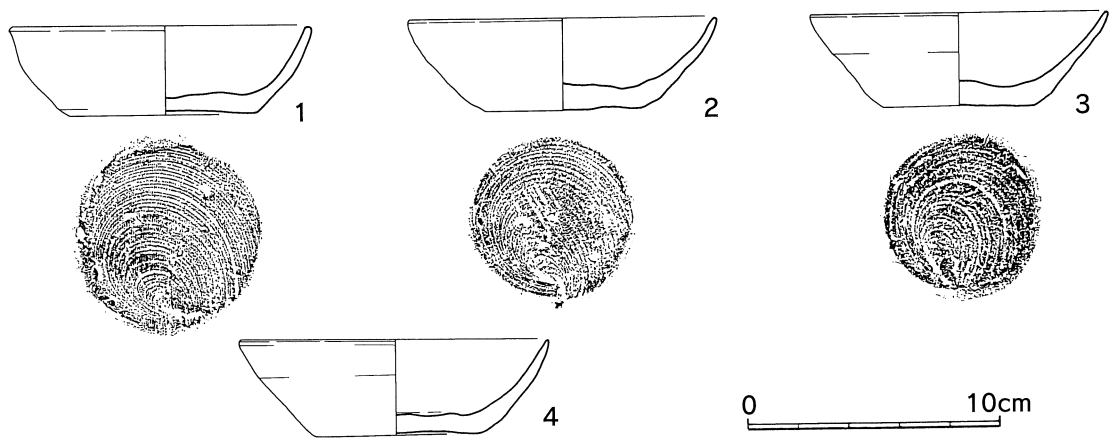
出土遺物（第108～110図）のうち1～4は土師質土器杯で、いずれも底部回転糸切りである。1は最下層出土のほぼ完形品である。体部が内湾気味に立ち上がる。口径12.0cm、器高3.5cm、底径7.4cmを測る。2～4は1に比べ底径が小さい。2は体部上半が内碗気味である。底部完形で、復元口径12.2cm、器高3.6cm、底径6.2cmを測る。3は体部が斜方向に直線的にのびる。やはり底部完形で、復元口径11.8cm、器高3.6cm、底径6.0cmを測る。4は底部完形で、わずかに内湾気味である。口径12.1cm、器高3.7cm、底径6.4cmを測る。5～8は土師質土器小皿である。いずれも底部は回転糸切りで、6、8には板状圧痕がみられる。5は完形品で、厚い底部から内湾しながら体部が立ち上がる。口径7.3cm、器高1.4cm、底径5.0cmである。6、7は内湾気味に短く体部が立ち上がる。6は復元口径7.6cm、器高1.1cm、復元底径6.0cmを測る。7は復元口径7.2cm、器高1.1cm、復元底径5.6cmである。8は体部が外反する。口径7.7cm、器高1.1cm、底径6.2cmを測る。9は瓦器碗の底部である。低い高台が付き、内面には一部ヘラミガキもみられる。底径6.1cmを測る。10は土錘である。

11は砥石である。長さ32.9cm、最大幅11.0cm、最大厚5.0cm、重量2.1kgで、片方の側面を除く3面に砥石として使用した痕跡がみられる。

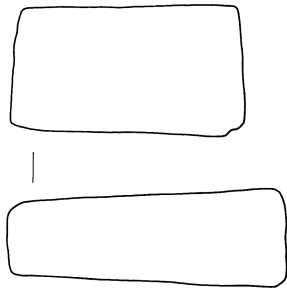
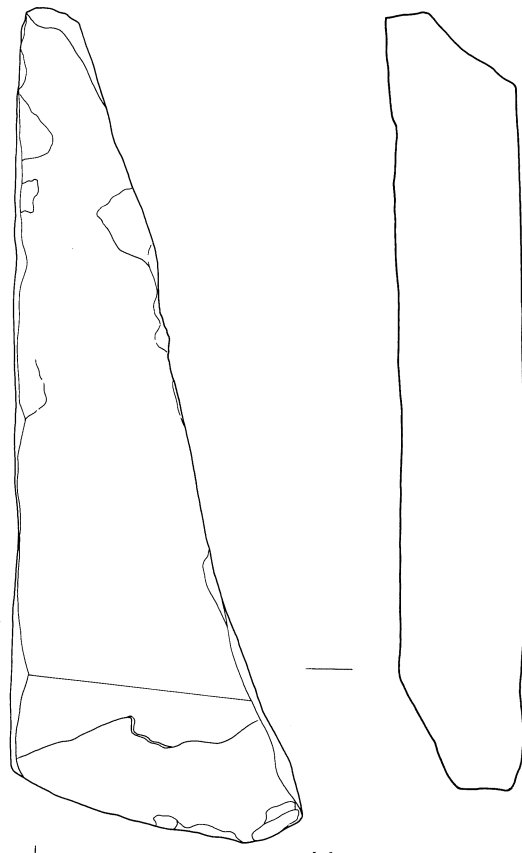
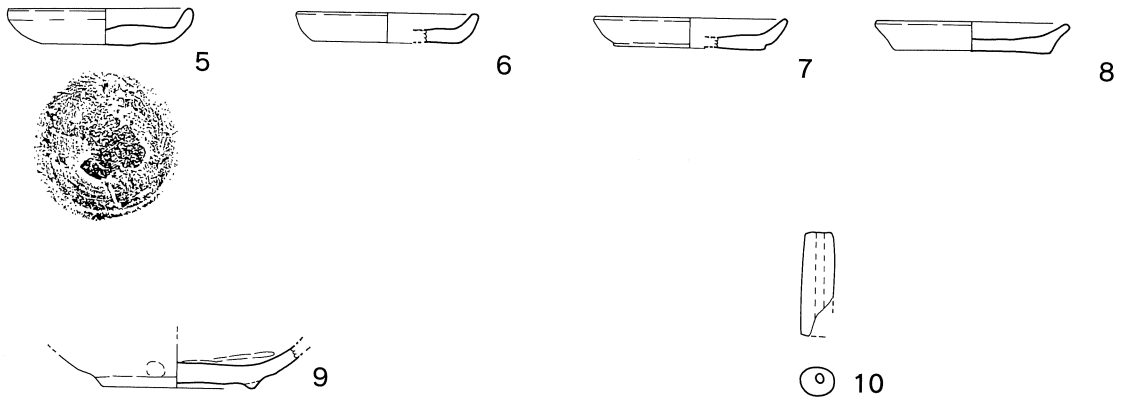
12～16は木製品である。12は下駄で、先端部と側辺の一部を欠損する。鼻緒の穴が2ヶ所確認される。現状で長さ17cm、最大幅9cm、歯でない部分の厚み1.9cmを測る。歯は差し歯でなく、一体となって作られている。歯の高さは約5cmである。13は折敷で、本来は方形を呈するものであったと思われる。1ヶ所綴じ皮が残存する。14は曲物の側板で底板を欠く。小型品で径約11cm、厚さ0.3cmである。綴じ皮が一部残存する。15は曲物の底板である。径8.4cmの円形を呈し、厚さは0.6～0.7cmである。側面には側板と接合するための釘穴が3ヶ所みられ、うち1ヶ所に木釘が残る。16は不明木製品である。板状の製品の一部に切り込みを入れたり、先端を尖らせたものである。長さ43.6cm、幅2.4cm、厚さ0.6cmである。



第107图 古庄屋遺跡 井戸1

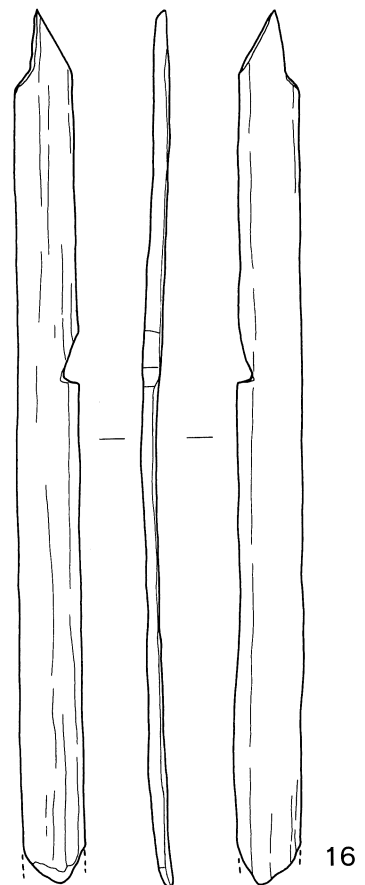
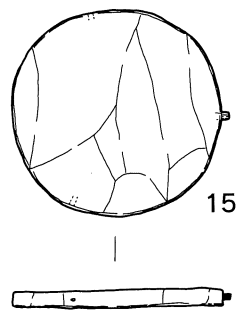
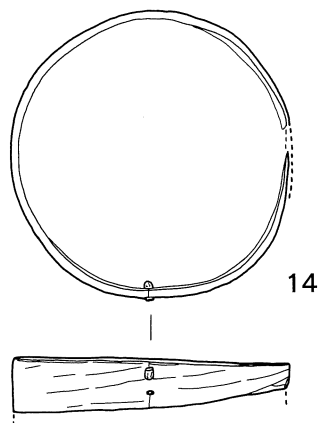
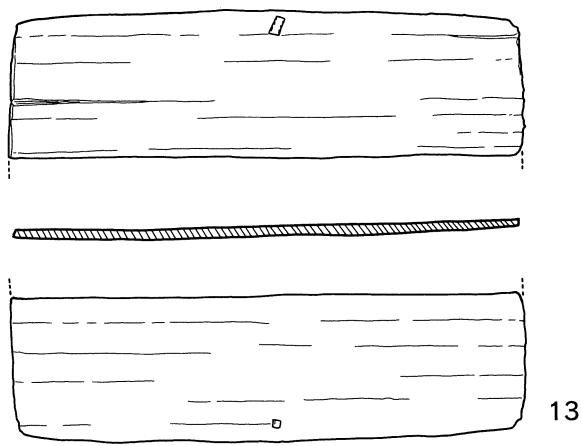
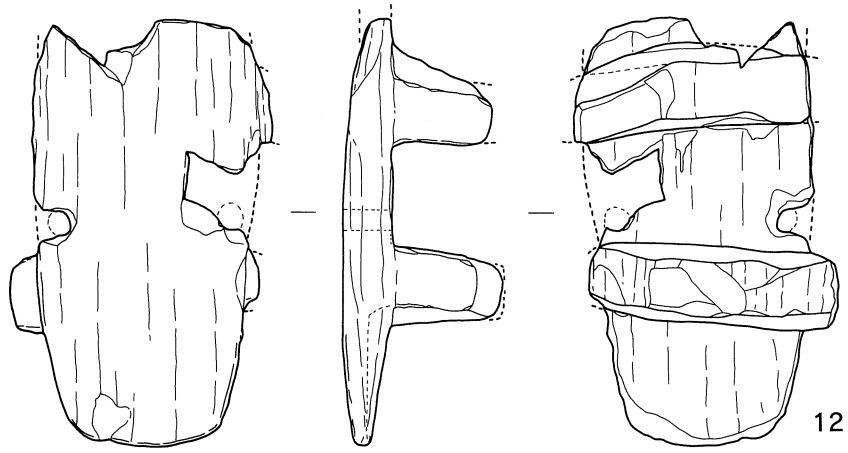


第108图 古庄屋遺跡 井戸1 出土遺物(1)

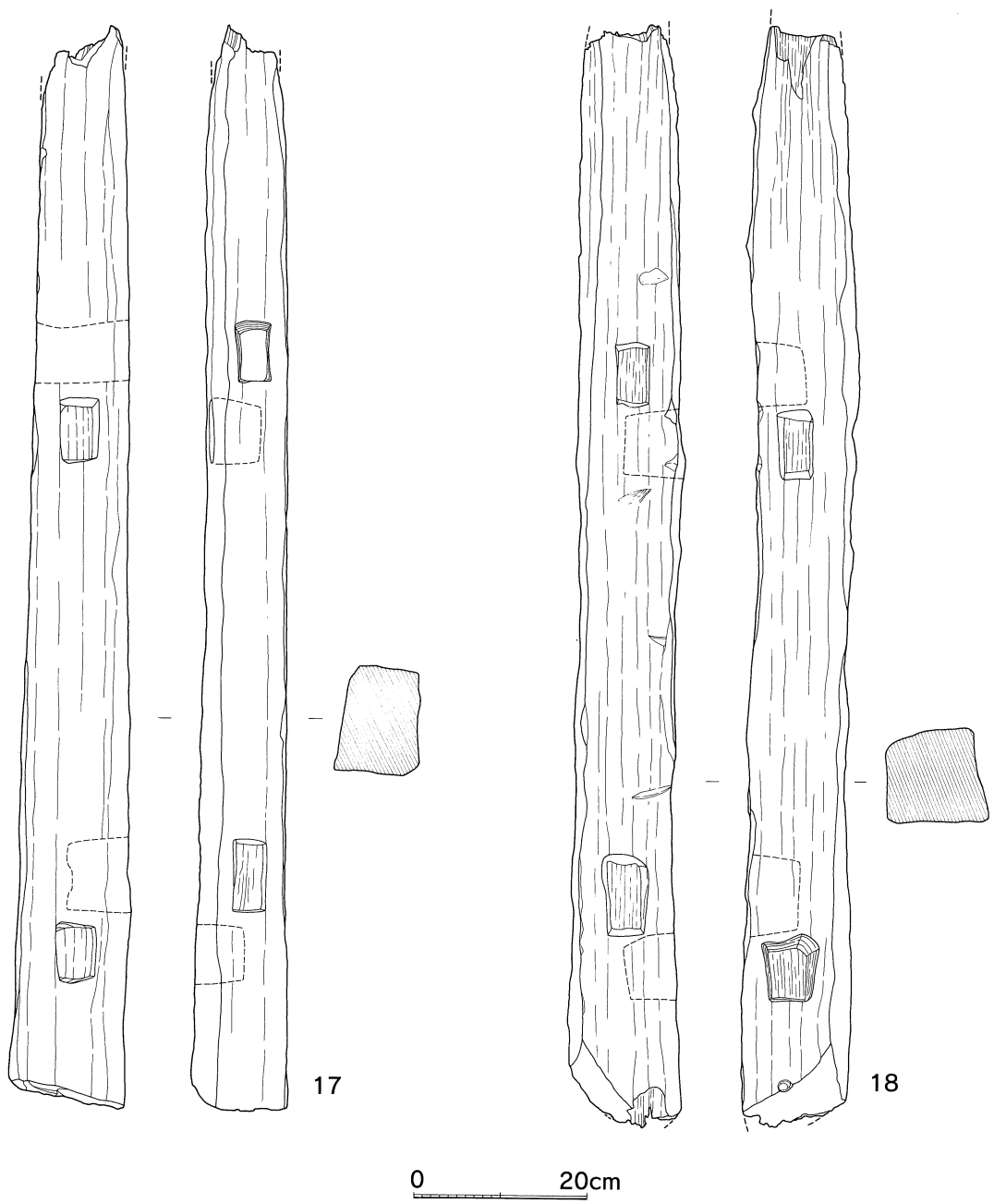


0 10cm

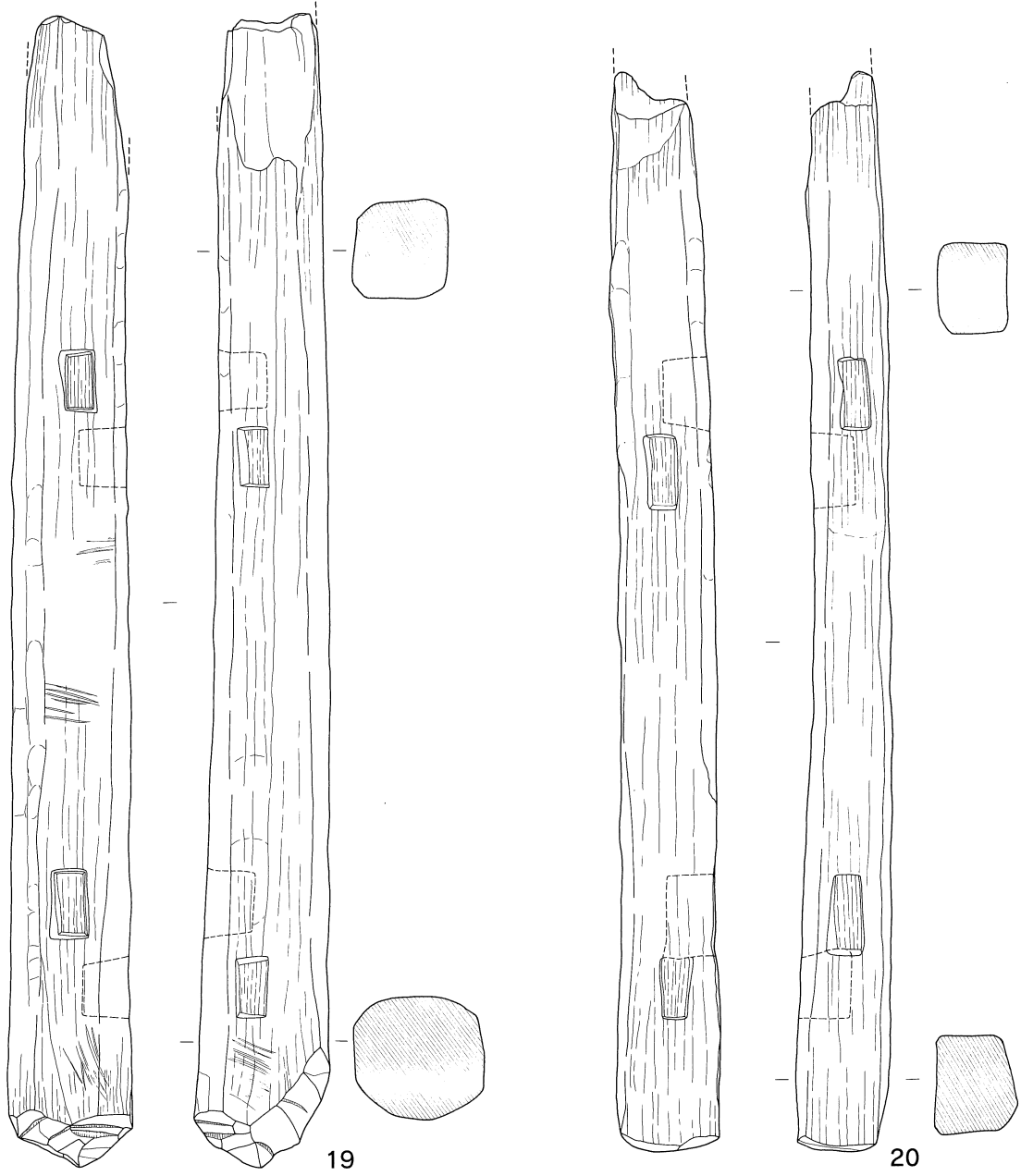
第109図 古庄屋遺跡 井戸1 出土遺物 (2)



第110図 古庄屋遺跡 井戸1 出土木製品



第111图 古庄屋遺跡 井戸1 井戸樫 (1)



0 20cm

第112図 古庄屋遺跡 井戸1 井戸枠 (2)

6 溝

(1) 溝1

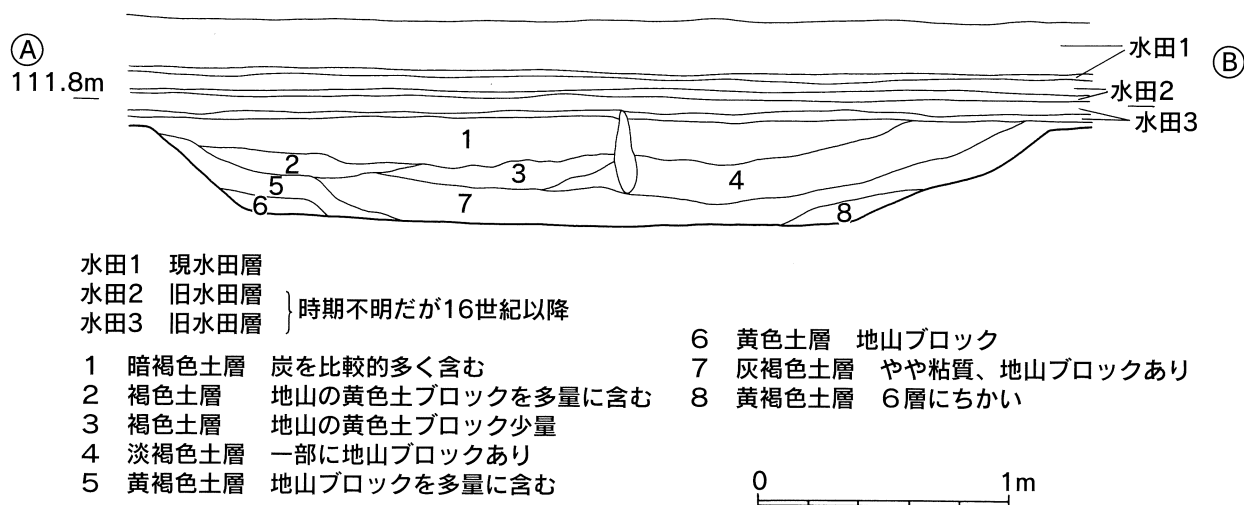
溝1(第3図)は調査区の南端に位置する。溝は西に行くにつれ削平のため浅くなるが、幅2.5~3.4m、深さ0.2~0.5mを測る。方位はN85°Eで、位置的にみて屋敷の南を画する施設と考えられる。屋敷の北を画すると思われる溝6との距離は、溝の内側で約100mである。溝の断面土層図(第113図)をみると、土層図の右側(溝の南側)からの流れ込みが著しいことに気づく。このことから、溝の南側、すなわち屋敷区画の外側に土塁があったものと推定される。これは溝1の北側(屋敷の内側)には溝に沿うように土壇墓が並び、土塁を築造する余地がないこととも符合する。

出土遺物(第114~116図)のうち、1~9、11、12は土師質土器である。これらは12を除き器高の高いタイプで、いずれも底部回転糸切りである。1はやや内湾気味に体部が立ち上がる。復元口径11.2cm、器高3.3cm、底径6.0cmである。2、3は両者とも底部完形で、2が底径5.7cm、3が底径6.6cmである。4は体部がわずかに内湾気味で、端部は丸くおさめる。復元口径11.2cm、器高3.6cm、底径5.8cmである。5~9、11は底部のみの資料で、5は底径6.4cm、6は復元底径5.9cm、7は底径5.6cm、8は底径5.4cm、9は底径5.8cm、11は底径5.4cmである。12は器高の低いタイプで、底径8.2cmを測る。底部は回転糸切りで、体部が丸みを持ち立ち上がる。10、13~15は土師質土器小皿である。10は1~9、11のような器高の高い坯に対応する小皿であると思われる。底部は回転糸切りで、復元口径8.4cm、器高2.4cm、底径5.0cmを測る。13~15はいずれも底部と同じ厚みの体部が斜方向に立ち上がる。底部は回転糸切りで、15には板状圧痕がみられる。13は復元口径6.7cm、器高1.2cm、復元底径4.7cm、14は復元口径6.7cm、器高0.9cm、復元底径5.0cm、15は口径7.2cm、器高0.9cm、底径5.6cmである。

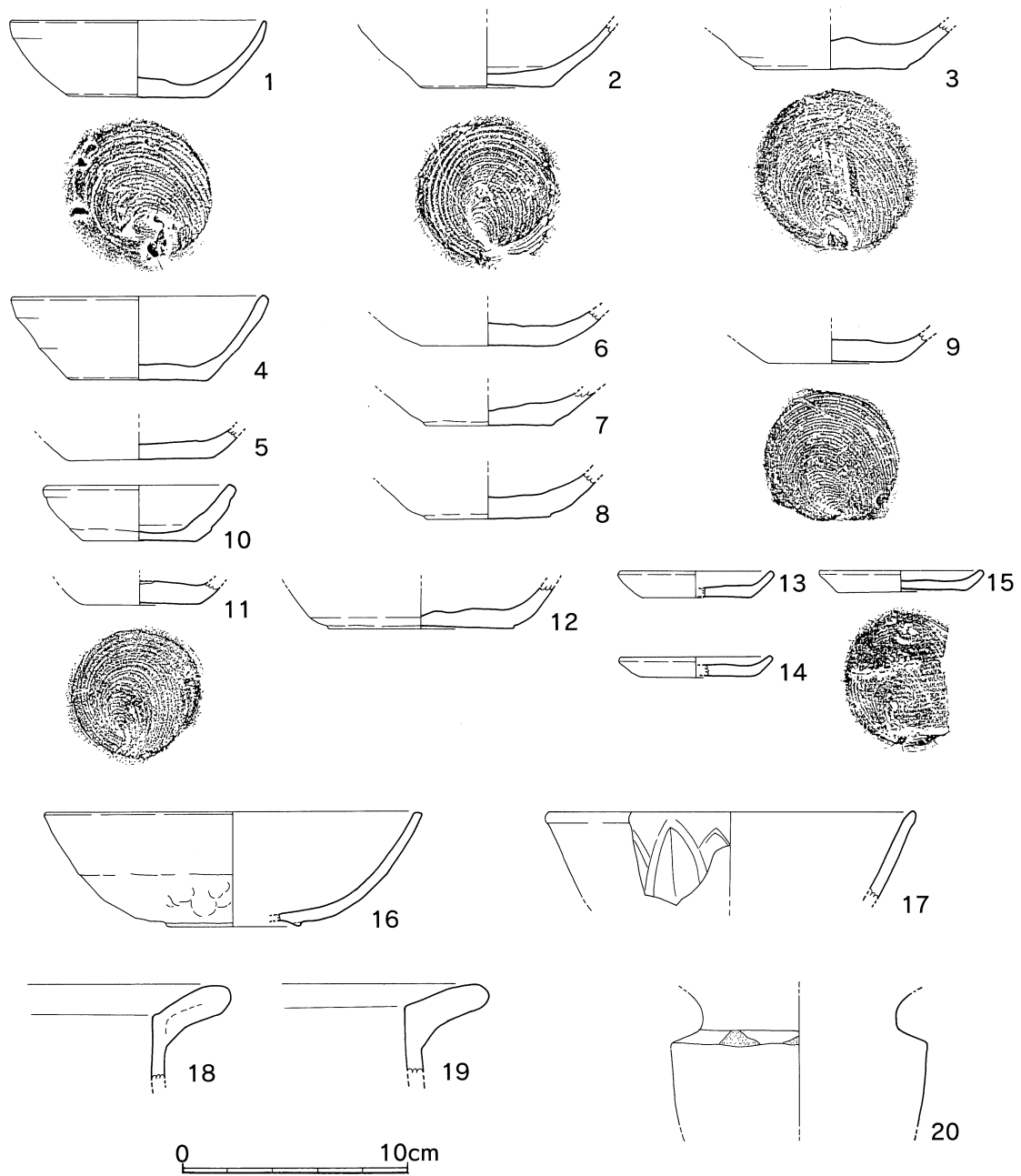
16は瓦器椀で、退化した高台が付く。体部内外面ともヘラミガキはみられず、器高もやや低めである。復元口径16.6cm、器高4.9cm、復元底径6.0cmを測る。17は中国製青磁碗で、外面に鎬蓮弁文がみられる。復元口径は16.1cmである。18、19は土鍋で、両者とも口縁がL字状に外方に折れる。

20は五輪塔の空風輪部である。

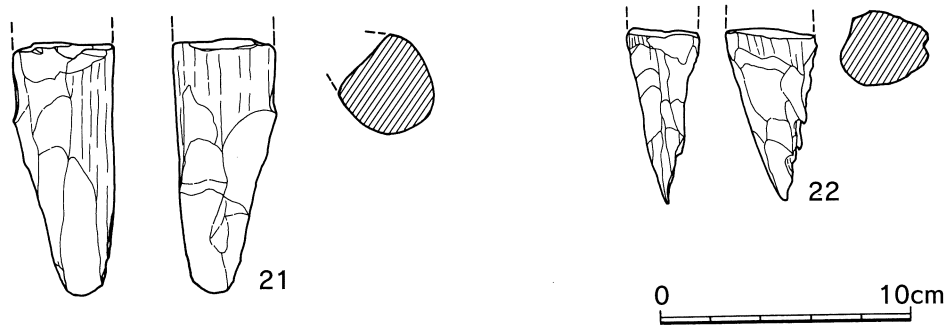
21~24は木製品である。21、22は杭の先端である。23は羽子板状の製品で、基部の一部を欠くもののほぼ完形である。現存長26.6cm、最大幅5.3cm、厚さ1.4cmを測る。24は曲物の底板と思われる。径14.0cm、厚さ0.8cmを測る。



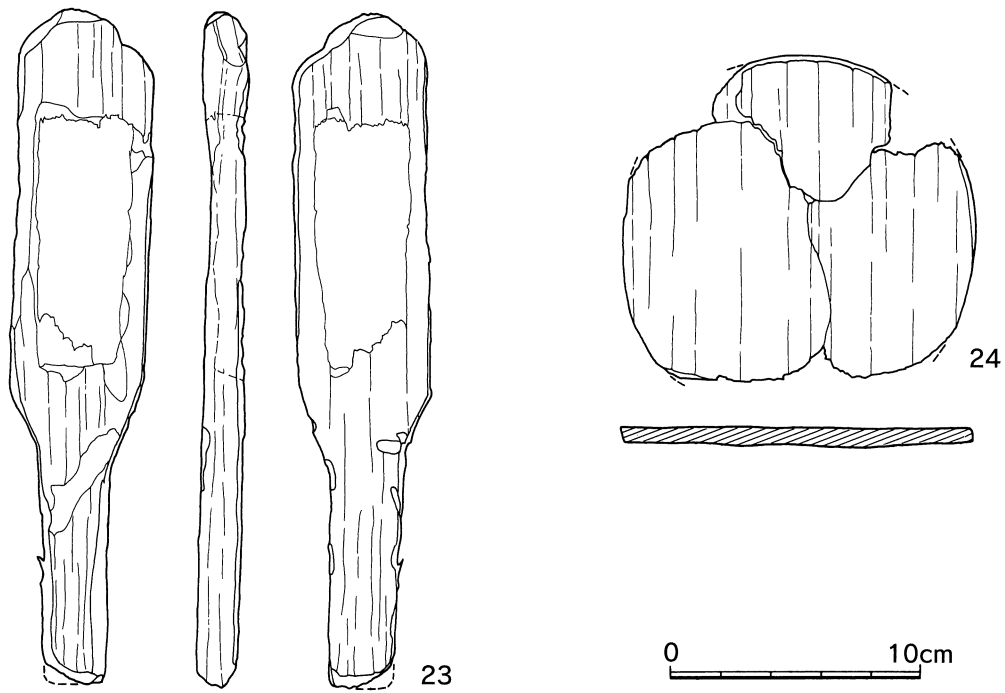
第113図 古庄屋遺跡 溝1 土層断面図



第114図 古庄屋遺跡 溝1 出土遺物



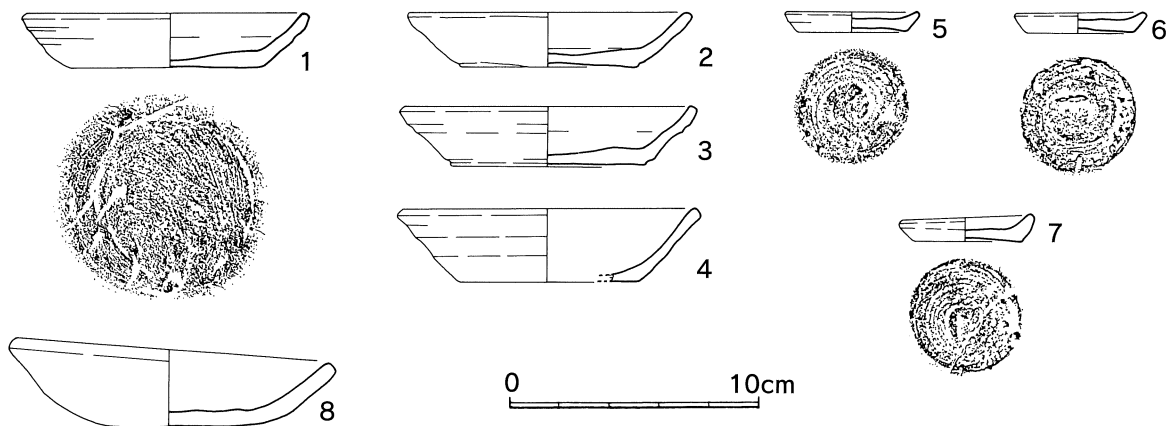
第115図 古庄屋遺跡 溝1 出土木製品 (1)



第116図 古庄屋遺跡 溝1 出土木製品 (2)

(2) 溝2

溝2 (第3図) は竖穴1を切り、東西方向に走る。埋土は灰褐色を呈し、他の遺構と明らかに異なる。幅は0.5~1.1mであるが、深さは0.1~0.2mと比較的浅い。溝内の床面からは、完形の土師質土器や瓦器碗が径1m程の範囲から出土した。出土遺物(第117図)のうち1~4は土師質土器坏である。1~3は器高の低いもので体部が斜方向に直線的に立ち上がる。底部は回転糸切りで、2と3には板状圧痕がみられる。1は完形で口径11.3cm、器高2.1cm、底径7.5cmを測る。体部外面にはロク口痕が残る。2は復元口径11.2cm、器高2.1cm、復元底径7.0cmである。3も体部外面にロク口痕がみられる。復元口径11.7cm、器高2.4cm、底径7.6cmを測る。4は器高の高いもので、体部外面に幅広のロク口痕が残る。底部は回転糸切り後板状圧痕がみられる。復元口径12.0cm、器高2.9cm、復元底径7.0cmである。5~7は土師質土器小皿の完形品である。これらは口径5.3~5.4cm、器高0.8~0.9cm、底径4.3cmを測る。8は丸底状の瓦器碗で口径13.0cm、器高2.6~3.6cmである。



第117図 古庄屋遺跡 溝2 出土遺物

(3) 溝3

溝3（第3図）は溝2の北西に南北方向にのびる。埋土は溝2と同じ灰褐色で、本来溝2とつながっていたものと推定される。出土遺物（第118図）は1の土師質土器小皿である。完形品で、体部は直立気味に立ち上げ、口縁にむかい外反する。口径5.4cm、器高0.8cm、底径4.3cmを測る。



第118図 古庄屋遺跡 溝3 出土遺物

(4) 溝4

溝4（第3図）は遺跡中央付近に位置し、南北方向に走る。幅は0.2mと非常に狭く、深さは0.2mである。規模や形態的には溝5と類似する。

出土遺物（第119図）は少なく、1は中国製白磁碗の底部である。玉縁状口縁を呈するものの底部と思われ、復元底径5.6cmを測る。



第119図 古庄屋遺跡 溝4 出土遺物

(5) 溝5

溝5（第3図）は、土壌1の北側に位置する。溝の規模は幅0.2m、深さ0.1~0.2mで、溝1や溝6などに比べると圧倒的に小規模である。規模や形態からみると、溝4にちかい状況である。溝は土壌12からはじまり土壌11を切り、ここで直角に折れ土壌13方向に向かう。そして、土壌13の端を切り西進する。

(6) 溝6

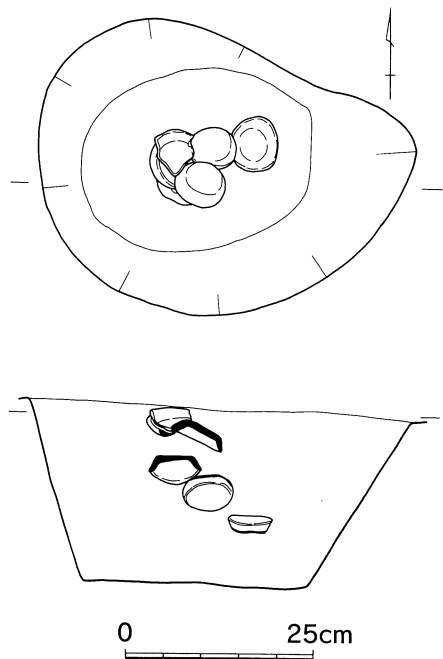
溝6（第3図）は調査区の北端に位置する。規模は幅約3m、深さ0.3mで、方位はN70°Eである。この溝は屋敷地の北の端を画する施設で、南を画する溝1と対応するものである。溝から出土遺物は非常に少量で、わずかに土器の細片が出土したのみである。

7 土器一括埋納遺構

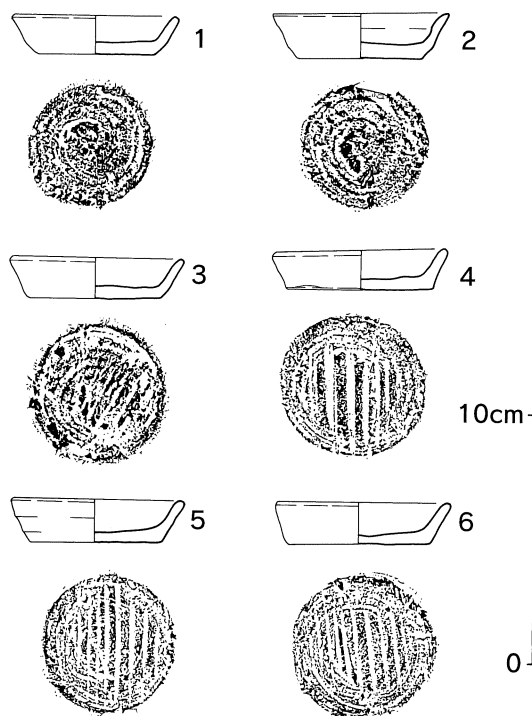
(1) SX2

SX2（第120図）は遺跡最北端の溝6に近い位置にある。長径0.5m、短径0.35m、深さ0.2m余の土壌に土師質土器小皿の完形品が6個体埋納されていた。土器の埋納状態は必ずしも整然としたものではない。

出土土器（第121図）はすべて土師質土器小皿で、底部は回転糸切り後板状圧痕がつく。1~6はすべて体部が直立気味に立つ同様な器形で、色調も近似する。1は口径6.6cm、器高1.6cm、底径4.7cm、2は口径7.0cm、器高1.8cm、底径4.8cm、3は口径6.9cm、器高1.6cm、底径5.2cm、4は口径6.9cm、器高1.6cm、底径5.7cm、5は口径6.9cm、器高1.7cm、底径5.3cm、6は口径7.0cm、器高1.6cm、底径5.5cmである。



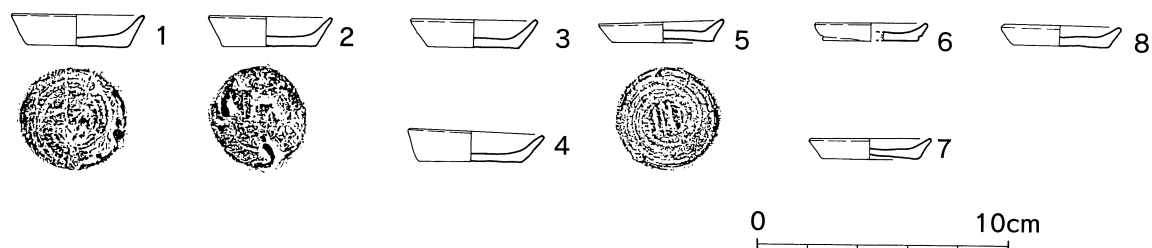
第120図 古庄屋遺跡SX2



第121図 古庄屋遺跡SX2 出土遺物

(2) SX3

SX3（第3図）はSX2の南約10mに位置する。土師質土器小皿が8個体埋納されていたが、調査ミスから出土状況の記録をせずに土器を取り上げてしまった。出土土器（第122図）は土師質土器小皿で、体部が直立気味に立ち器高の高いもの（1～4）と器高の低いもの（5～8）がある。1は口径5.2cm、器高1.2cm、底径4.0cm、2は口径5.0cm、器高1.2cm、底径3.7cm、3は口径5.0cm、器高1.1cm、底径3.6cm、4は口径5.4cm、器高1.2cm、底径4.1cm、5は口径5.0cm、器高0.8cm、底径4.0cm、6は口径4.5cm、器高0.7cm、底径3.8cm、7は口径4.8cm、器高0.8cm、底径3.8cm、8は口径4.8cm、器高0.8cm、底径4.0cmである。

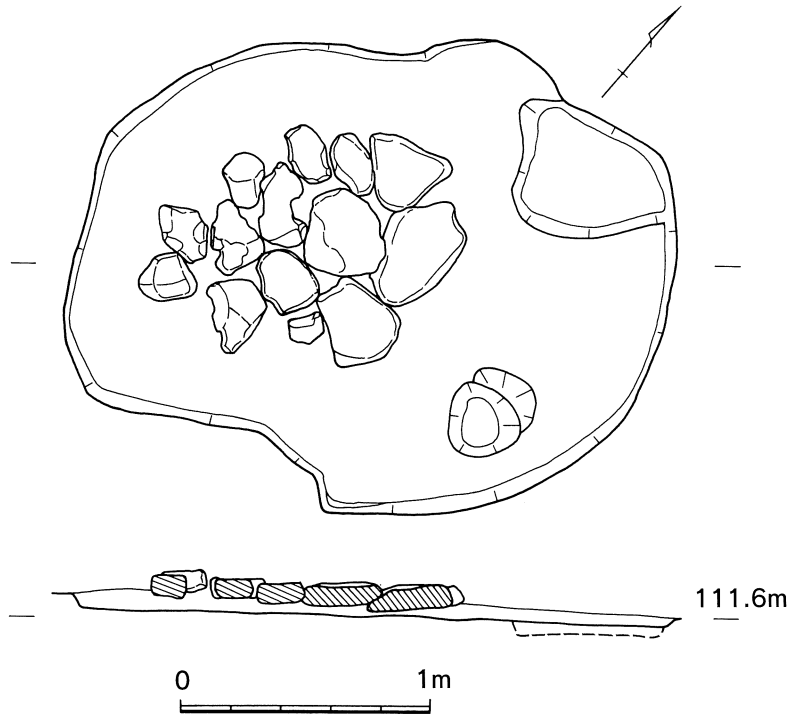


第122図 古庄屋遺跡SX3 出土遺物

8 その他の遺構・遺物

(1) SX1

SX1（第123図）は屋敷の東南部に位置し、竪穴4と重複する。竪穴4の掘り込み自体は削平のためSX1付



第123図 古庄屋遺跡S X 1

近で不明確になるが、竪穴4内の厚い焼土層を切っており、竪穴4より後出するものと思われる。遺構は楕円形基調の不整形を呈するもので長径2.4m、短径1.8m、深さ0.05mを測り、中央からやや西に寄って扁平な石が敷かれる。使用されている石は20～40cm程のもので、凝灰岩と安山岩系の二種類がみられる。石敷は中央の石を囲むように花弁状に配置したようにもとれ、上面がほぼ平坦になるように整えている。石はすべて焼成を受けている。

遺構に伴う良好な遺物がなかったので明確な時期は不明だが、竪穴4を切ることから中世以降の所産と考えられる。

(2) その他の出土遺物

建物として復元できなかった柱穴や、遺構検出作業中に出土した遺物を紹介する(第124、125図)。

1、2は縄文土器である。1は中世の遺構検出面となっている黒褐色土から出土した。この黒褐色土は部分的にしか認められず、1以外の遺物は出土しなかった。外面には横方向の山形押型文が施文され、加えて口縁下3cm程には円形のコブ状突起が付され、また口縁直下には円形の刺突がなされる。刺突は内面まで達しないが、外面からの刺突の影響で内面がやや膨らむ。内面は口縁部にのみ横走の山形押型文が施文される。2は建物1の柱穴から出土した。口縁部がわずかに内方に折れて立ち上がり、口縁端部上面は内傾する。外面には平行沈線文や列点文が施文される。1、2とも縄文時代早期に位置付けられる。

3～19は土師質土器である。このうち3～11は器高が低く、体部が直線的にのびる。3は底部がほぼ完形である。底部は回転系切り後板状圧痕がみられる。体部は斜方向に直線的に立ち上がる。復元口径13.0cm、器高2.2cm、底径10.0cmである。4は3と同様な器形を呈するが、体部の立ち上がりは3に比べシャープさに欠く。底部は回転系切り後板状圧痕である。法量は復元口径13.4cm、器高2.0cm、復元底径9.4cmである。5は3、4に比べ器高が高い。体部は底部からシャープに立ち上がる。復元口径13.7cm、器高2.9cm、復元底径9.8cmで、底部は回転系切りである。6も5と同様な器形を呈するが、体部の立ち上がりが弱い。底部は回転系切り後板状圧痕で、復元口径13.2cm、器高2.6cm、復元底径9.0cmを測る。7は3、4にちかい器形を呈する

が、体部の立ち上がりにシャープさを欠く。底部は回転糸切り後板状圧痕である。復元口径12.6cm、器高2.4cm、底径9.0cmを測る。8は6と同様な器形で、底部は回転糸切りである。法量は復元口径12.9cm、器高2.3cm、復元底径8.0cmを測る。9は体部が斜方向にのびるものであるが、立ち上がり部が丸みをもつ。底部は回転糸切りで、復元口径12.2cm、器高2.7cm、復元底径7.8cmである。10は回転糸切りで、復元口径12.0cm、器高2.5cm、復元底径7.8cmを測る。11は16と同じ柱穴から出土した。体部は内湾気味に立ち上がり、復元口径10.8cm、器高2.2cm、復元底径7.0cmを測る。

12～14は器高が低く、体部が外反する。12は底部完形で、回転糸切り後板状圧痕である。体部は中程から外反し、外面にはロクロ痕が残る。口径11.7cm、器高2.5cm、復元底径7.6cmである。13は体部全体が大きく外反する。底部は回転糸切りで、復元口径11.5cm、器高2.0cm、復元底径7.8cmを測る。14は18と同じ柱穴から出土した。完形で底部は回転糸切り後板状圧痕である。体部が外反し、ヘラ状工具による回転ナデが施される。口径11.3cm、器高2.4cm、底径7.2cmを測る。

15、16は底径に比し器高が高いものであるが、いずれも底部だけの資料である。15は底部完形で、底径5.0cmを測る。16は11と共伴するもので、復元底径5.8cmである。

17も器高が高いものである。底部完形で、回転糸切り後板状圧痕である。体部外面にはロクロ痕がみられる。底径は7.2cmである。

18、19は器厚が薄く、体部が大きく斜方向に開くものである。体部は回転ナデにより調整される。色調はともに白灰色ないしは白黄色を呈する。18は14と共伴するもので、復元口径19.8cm、器高3.4cm、復元底径8.8cmを測る。底部は回転糸切りの後にハケメ状の削痕がはいる。19は完形で、底部は回転糸切り後板状圧痕である。口径10.8cm、器高2.0cm、底径5.2cmを測る。

20～35は土師質土器小皿である。このうち20～23は体部が短く内湾気味で、立ち上がりも緩やかである。20は底部回転糸切りで、復元口径7.3cm、器高0.8cm、復元底径5.8cmである。21も底部回転糸切りで、復元口径7.2cm、器高1.1cm、底径5.4cmを測る。22は復元口径7.4cm、器高1.1cm、復元底径5.5cmで、底部は回転糸切りである。23は底部完形で、底部は回転糸切り後板状圧痕である。

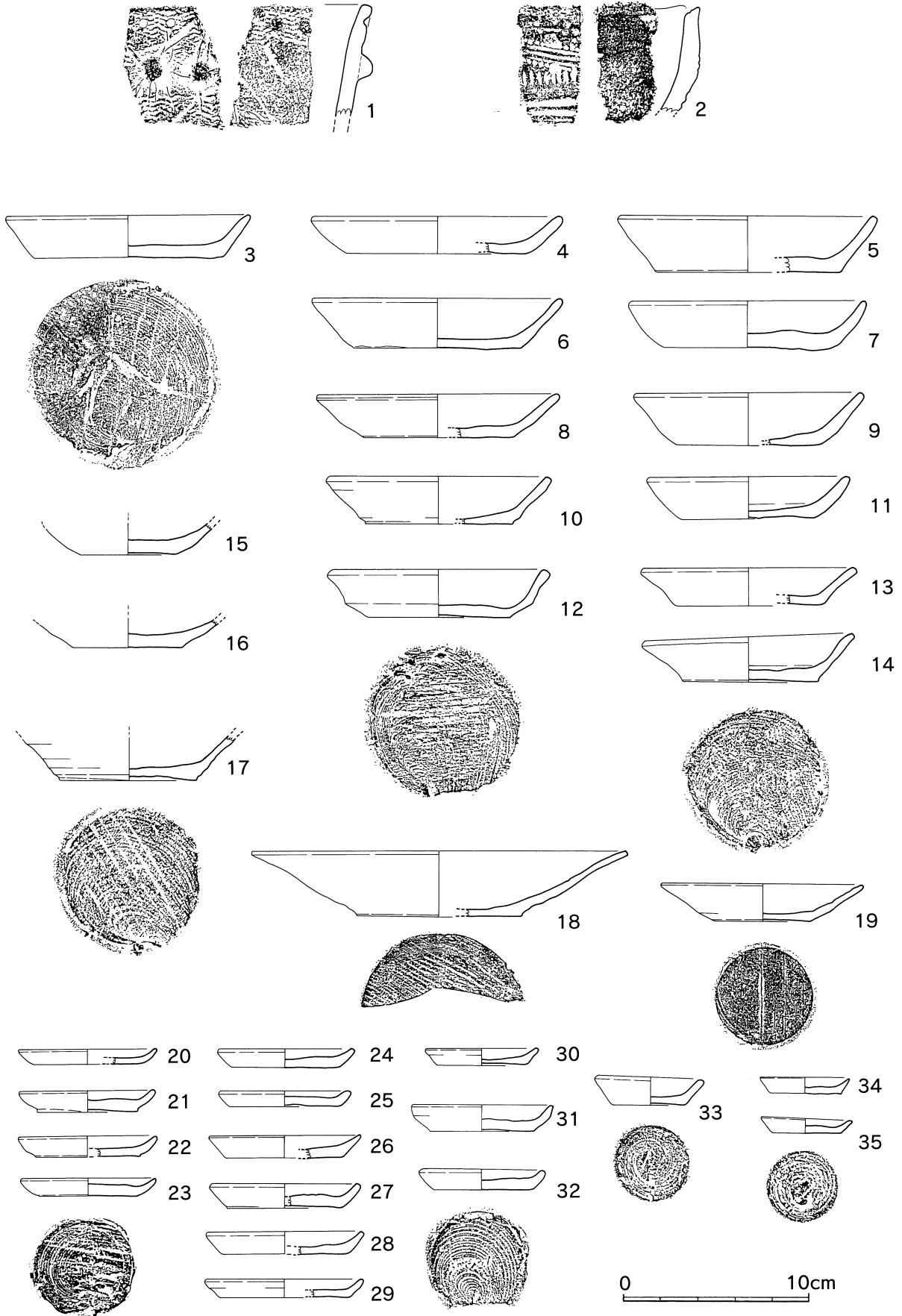
24～29は底部から比較的シャープに体部が立ち上がり、短く直線的に口縁にいたるものである。しかし、器形に若干のバリエーションがみられる。24は底部回転糸切りで、復元口径7.2cm、器高1.0cm、復元底径5.8cmを測る。25は復元口径7.0cm、器高0.8cm、復元底径5.8cmで、底部は回転糸切り後板状圧痕がみられる。26は底部回転糸切りで、復元口径8.2cm、器高1.2cm、復元底径6.2cmを測る。27は復元口径8.0cm、器高1.3cm、復元底径6.1cmで、底部回転糸切りである。28は底部回転糸切りで、復元口径8.4cm、器高1.1cm、復元底径6.6cmを測る。29は復元口径8.4cm、器高1.0cm、復元底径6.8cmで、底部には回転糸切り後板状圧痕がみられる。

31、32は体部が比較的シャープに立ち上がるものの、わずかに内湾気味のもの。31は底部回転糸切りで、復元口径7.5cm、器高1.4cm、復元底径5.5cmを測る。32は口径6.7cm、器高1.1cm、底径5.2cmで、底部は回転糸切りである。

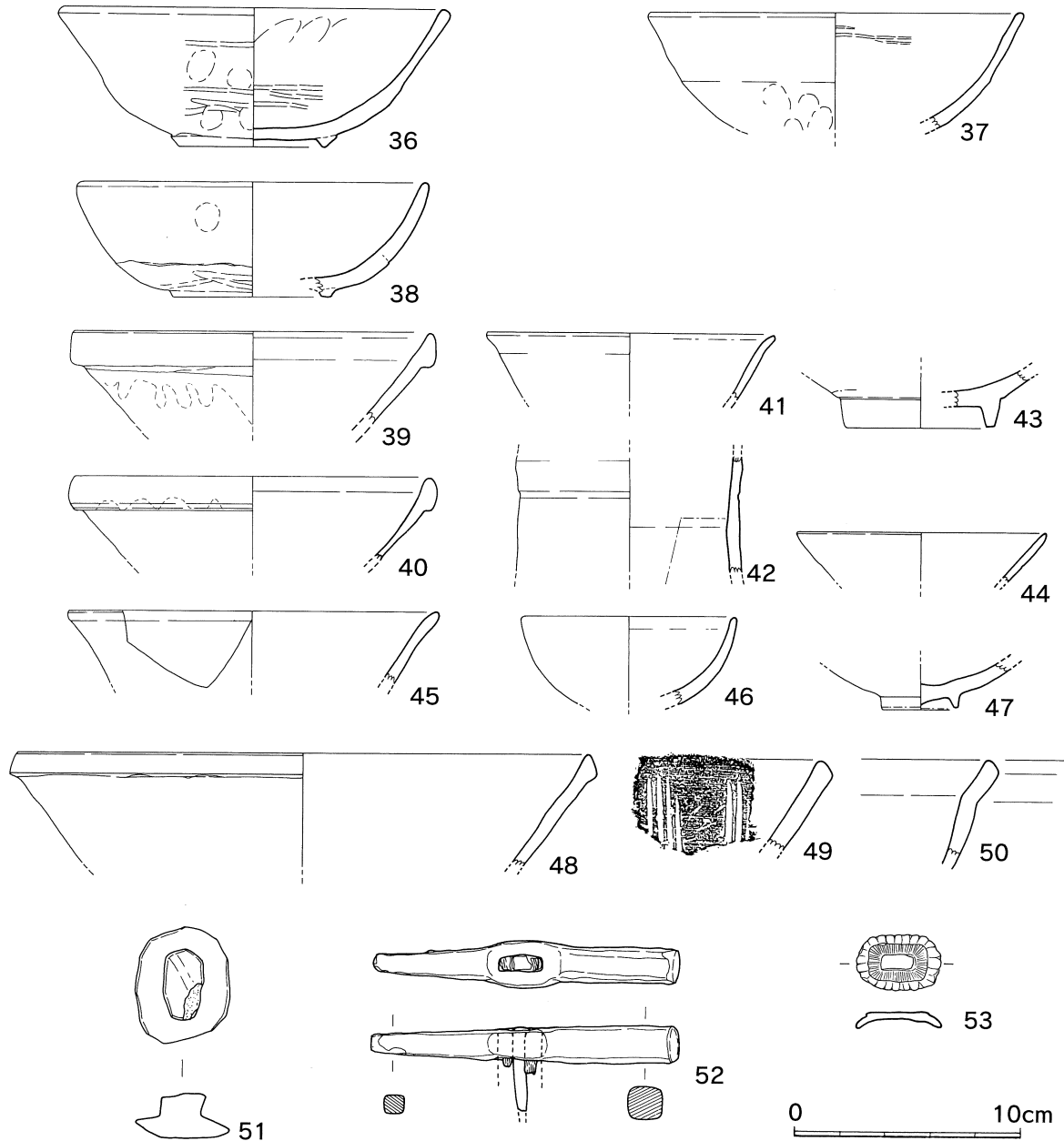
33は直立気味に体部を立ち上げるもので、比較的器高が高い。完形品で、口径5.8cm、器高1.5cm、底径3.8cmを測る。底部には回転糸切り後板状圧痕がみられる。

34、35は体部を短く直立気味に立ち上げるもので、口縁端部が尖り気味である。34は底部回転糸切り後板状圧痕で、口径4.8cm、器高0.9cm、底径3.8cmを測る。35は完形で、口径4.9cm、器高0.7cm、底径3.7cmをはかり、底部は回転糸切り後板状圧痕がみられる。30は34、35と24～29の中間形態を呈するものである。底部は回転糸切り後板状圧痕で、復元口径6.0cm、器高0.9cm、復元底径4.8cmを測る。

36～38は瓦器碗である。36は内外面に粗なヘラミガキがみられる。37は内面にのみヘラミガキが残る。38は復元口径15.4cm、器高4.9cm、復元底径7.0cmと器高が低い。外面下部に部分的にヘラミガキがみられる。



第124図 古庄屋遺跡 その他の遺物 (1)



第125図 古庄屋遺跡 その他の遺物 (2)

39～44は白磁である。39、40は玉縁の碗、41は口禿、42は壺の頸部か、43は碗の底部で、以上は中国製である。44は灰色の釉がかかるもので、中国産以外の可能性をもつ。45～47は青磁である。45、46は外面に鎬蓮弁文をもつ。47は底部である。

48は須恵器東播系こね鉢、49は瓦質播鉢、50は土鍋である。

51は滑石製品である。石鍋片の二次加工品と思われ、4.1cm×5.0cmを測る。中央につまみ状の部分を作りだすが、この部分にはスス状の付着物がみられる。

52は柱穴出土の金槌の頭で、長さは13.3cmを測る。断面方形を呈し、片方が尖る。中央はやや膨らみ柄を挿入する長方形の穴がある。穴には柄の一部と思われる木質と、それを固定するために打ち込んだ釘が残る。釘は頭部が四角形で、現状の長さは3.6cmである。53は青銅製品で、3.6cm×2.4cmを測る。中央に長方形の穴をもち、その穴を細線帯で囲む。また、縁辺部は蓮弁状に仕上げる。

第4章 まとめ

1 古代・中世の土器祭祀遺構 一大分県下の例から

1 はじめに

古庄屋遺跡からは土器埋納遺構が2基(SX2, SX3)検出された。このほか、掘立柱建物跡の柱穴の一部からも完形土器の出土(建物1, 建物4, 建物6, 建物7)が確認されている。このような土器祭祀遺構は、出土状況などにいくつかの形態があるものの、大分県内でも古代・中世の遺跡から多数確認されている。これらの遺構については、多くの場合、地鎮などの祭祀に係わるものと理解されているが、時代的な変化や形態的な差異が何を意味するのかなど、その実態は必ずしも明らかにされていない。

県外では、この種の遺構について早くから注目されており、いくつかの検討がなされている。最初は、寺院などの宗教施設に係わるものに取り上げられてきた(註1)。これらは古代から近世にまで及ぶが、やや特殊な遺構であるという感があり、広く一般的に扱われることは少なかった。その後、都城遺跡や広く一般集落遺跡での例が検討され、これらのもつ様々な要素や問題点が整理された(註2)。加えて、各地域での細かな集成・分析も行われ、その実態が明確にされつつある(註3)。

小稿では、大分県内における古代・中世の土器祭祀遺構を集成・検討し、今後の研究に向けた基礎資料とすることを目的としている。今回取り扱った土器祭祀遺構は、すでに報告書等で報告されているもののうち、土器を意識的に埋納したものやそれにちかい状況で出土したもので、祭祀に係わるであろうと思われるものを取り上げている。

以上のほかに、同様な性格をもつ遺構として銭貨単独などの土器を含まない埋納遺構がみられる。これについては今回取り扱っていないが、土器祭祀遺構と強い関連性があると推察されることから、稿を改めて検討する。

2 土器祭祀遺構の例

大分県内の土器祭祀遺構について、管見のもののみを以下にまとめた。その状況から大きくⅠ、Ⅱ、Ⅲ類の3タイプに分けて検討する。

(1) Ⅰ類

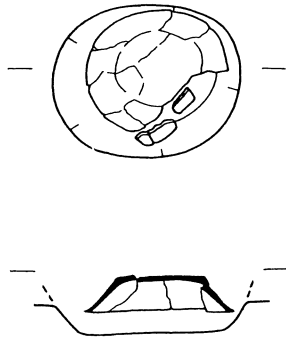
Ⅰ類は、集落外で確認されるものである。これらは明らかに日常の生活の場である集落とは離れた場所に位置するもので、このような場所が意識的に選ばれたものと考えられる。

・上牧ノ内Ⅰ遺跡(註4) 遺跡は、大分市東部を流れる大野川左岸の丘陵上にある。標高は約126mを測り、周囲は急峻な谷に囲まれる尾根上に位置する。土器は尾根上平坦面の約25×16mの範囲から出土しており、複数のブロックが存在すると考えられている。土器埋納などに係わる明確な掘り込みは確認されておらず、本来は尾根上に置かれていたものが、一部は斜面に流れ落ちるなどしているものと理解されている。出土土器は小破片も含め6565点を数え、その多くが坏と小皿である。時期的には、8世紀後半から10世紀初の約100年間にも及んでおり、土器を尾根上に安置する行為を長期にわたり続けてきたことがうかがえる。

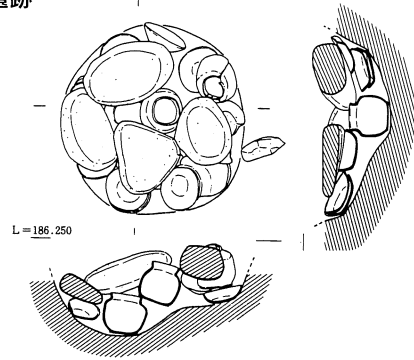
同様な立地と土器の出土状況を示す遺跡は、上牧ノ内Ⅱ遺跡、一方平Ⅲ遺跡などがある。いずれも、上牧ノ内Ⅰ遺跡と近接した場所にあり、同様な性格をもった一連の遺跡と考えられる。

・虫喰谷遺跡(註5) 遺跡は、上牧ノ内Ⅰ遺跡など同じ丘陵内にある。標高は62mで、松岡丘陵を深く開削する挾間川を見下ろす位置にあり、上牧ノ内Ⅰ遺跡などとは挾間川が流れる谷を挟んで対峙する関係にある。立地する場所は、挾間川河床との比高差約15mを測る丘陵の裾で、緩やかな傾斜地となっている。遺跡からは、縄文時代の遺構・遺物が極めて少量出土しているのみで、土器埋納遺構を除いては、同時代の遺構・遺物はまったく確認されていない。土器埋納遺構は、完形の土師器坏1個体の底部を上にして埋納したもので、9世紀代に

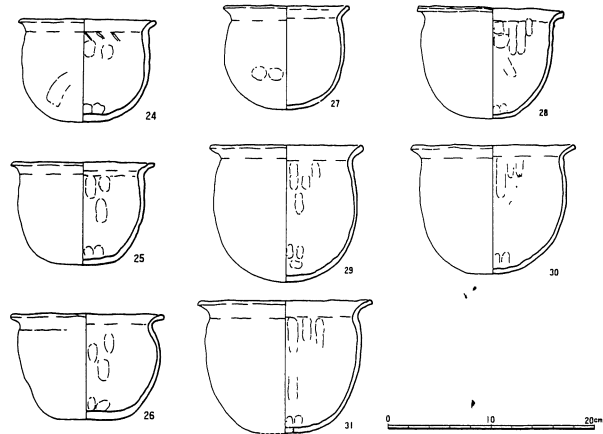
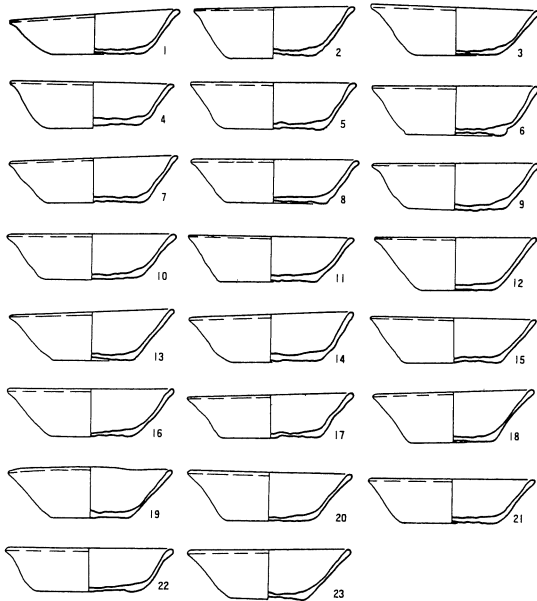
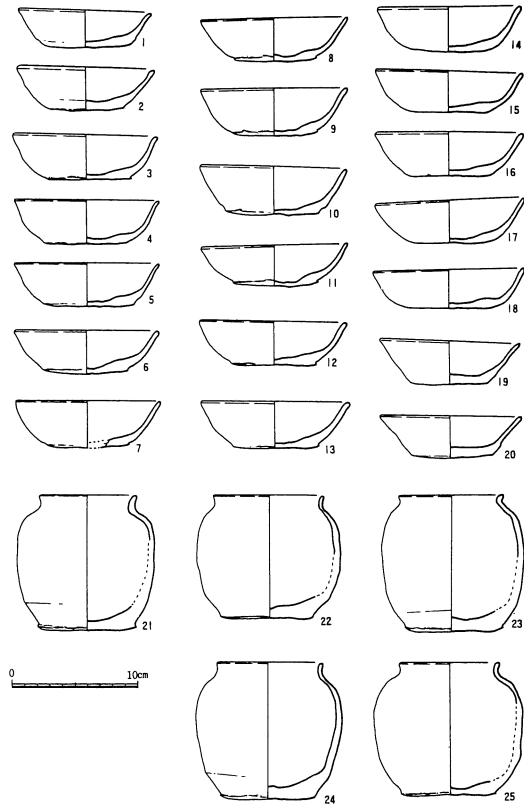
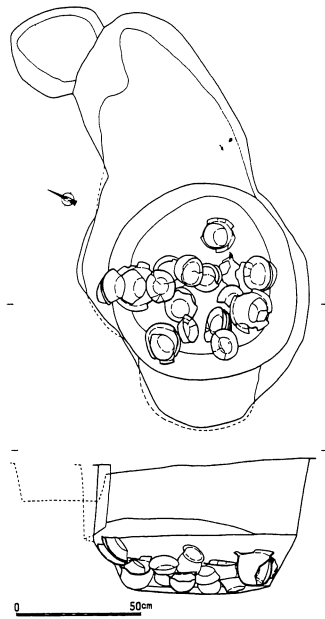
虫喰谷遺跡



古市遺跡

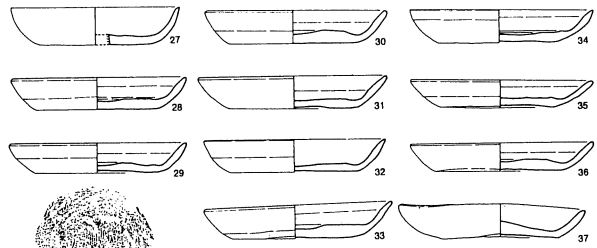
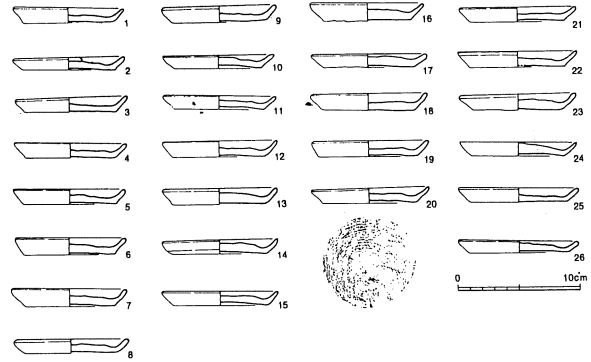
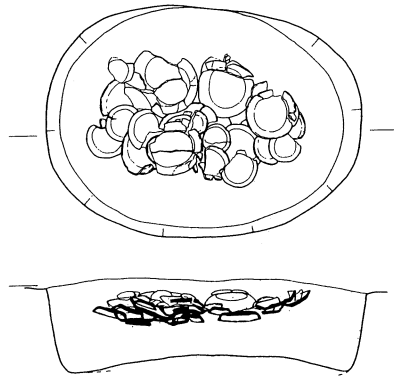


信重遺跡

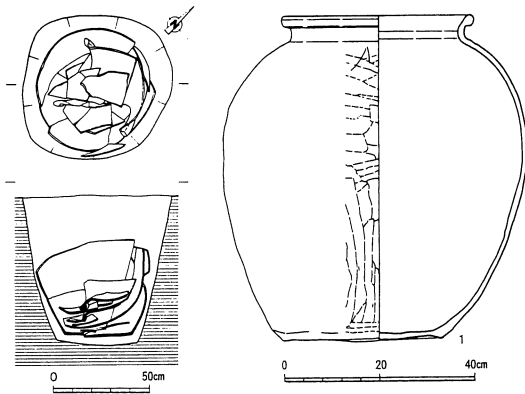


第126図 大分県内の土器祭祀遺構 (1)

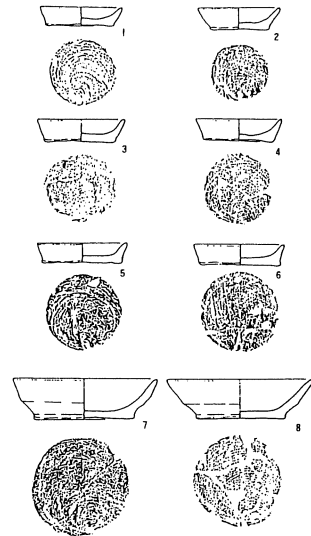
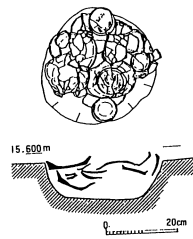
六田遺跡



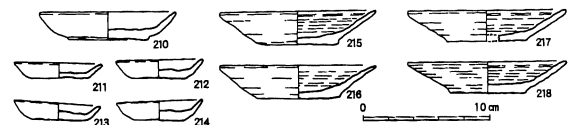
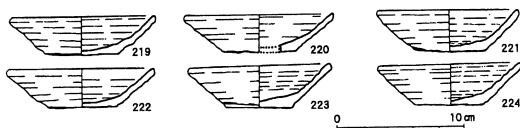
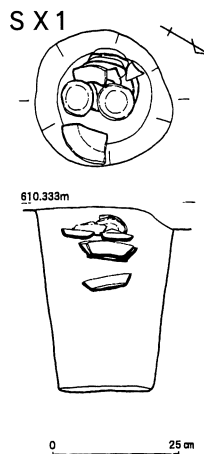
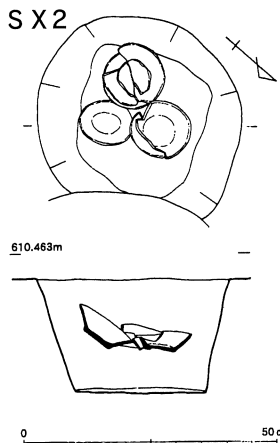
小路遺跡 (香々地町)



植田市遺跡



小路遺跡 (久住町)



第127図 大分県内の土器祭祀遺構 (2)

位置付けられる。

(2) II類

II類は、屋敷内でみられるもののうち、掘立柱建物を構成する柱穴以外の遺構に土器を埋納するものである。

・久末京徳遺跡（註6） 遺跡は安岐町の山間部である朝来地区に所在する。時代的には8世後半から9世紀後半に及び、古代安岐郷の中核部から遠く離れているにもかかわらず、建物の整然としたコの字状配置や緑釉や塩壺など希少な遺物がみられる。土器祭祀遺構は、須恵器や土師器の壺が単体もしくはそれにちかい状況で埋納されるSX1、SX2、SX3、土師器坏が数個から30数個出土するSK6、SK8、SK9、SK10がある。これらはいずれも9世紀代の所産で、建物がコの字状配置された中央空間部に位置する。なお、SX1、SX2、SX3については、壺内の脂肪酸分析で動物性脂質が検出されており、胞衣埋納遺構の可能性をもつ。

・信重遺跡（註7） 遺跡は香々地町に所在する。古代伊美郷の中核をなす竹田川下流域の平野に位置しており、石帯などの出土遺物がみられる。土器祭祀遺構はSK19で、完形の土師器坏23、土師器甕8が埋納され、意識的に砂を用い埋められていた。9世紀後半のもので、建物がコの字状配置された中央空間部に位置する。

・古市遺跡（註8） 遺跡は朝地町に所在するもので、一万田川左岸の丘陵裾部に位置する。部分的なグリッド調査であるが、土師器坏20、土師器壺5が埋納された遺構が確認されている。しかし、本祭祀遺構が屋敷内のどのような位置にあるのかは不明である。時期は9世紀代か。

・六田遺跡（註9） 遺跡は国東町の田深川左岸に位置するもので、12～14世紀に及ぶものである。1号土壇からは完形の土師質土器坏11、土師質土器小皿26が出土している。調査区の関係で屋敷地全容は不明であるが、屋敷地の東南隅に近い位置である可能性が高く、建物とも近い位置にある。

・深水邸埋納遺構（註10） 三光村に位置する当遺跡は、犬丸川右岸に形成された河岸段丘上に位置する。遺構は庭園造成中に発見されたもので、備前焼大甕の中に鉄刀、和鏡、鉄鉞、鉄鎌、鉄鍋、金輪などとともに土師質土器小皿58が納められていた。時期は14世紀前半に位置付けられる。

・小路遺跡（註11） 遺跡は香々地町の見目川右岸に所在する。13世紀から16世紀にかけての遺物が出土しており、遺構的には16世紀の建物などが確認されている。ここでは備前焼の甕が単独で埋置されているSX1が検出された。甕は13～14世紀に位置付けられるものであるが、内部からは何も出土しなかった。深水邸埋納遺構のような例も考えられるが、墓や貯蔵用施設の可能性もある。

・植田市遺跡（註12） 遺跡は、大分市の七瀬川左岸に展開する玉沢地区条里跡内に位置する。幅広い時期の遺構が確認されるなか、一辺60m程の方形を呈した屋敷跡が確認された。土器祭祀遺構のSK3は、屋敷跡の北西隅に近い位置から検出された。土壇内からは土師質土器坏7及び土師質土器小皿10が出土し、時期は15世紀後半に位置付けられる。また、屋敷地北東隅からは備前焼を埋置したSK4が確認されている。内部から白歯1本が検出されており墓の可能性もある。

・猪野中原遺跡（註13） 遺跡は大分市の乙津川左岸の丘陵上に位置する。屋敷地は南北50m、東西40mに溝を巡らし、南側に長方形の張り出し区画を有する。土器祭祀遺構はSX050、SX005、SX065の3基が検出された。SX050は屋敷の中央部に位置するもので、土師質土器5点に銭貨が3枚ずつのせられていた。SX005は屋敷南端ちかくに位置し、隣接して建物もみられる。土壇からは土師器碗1、京都系土師質土器4が出土した。SX065は屋敷の北西隅近くにあり、土師質土器坏が出土している。以上の時期は16世紀代に位置付けられる。

・小路遺跡（註14） 遺跡は久住町にあり、大友氏の有力家臣である朽網氏の居館であると考えられる。土器祭祀遺構はSX1、SX2の2基が確認され、いずれも館中央部近くに位置する。SX1からは土師質土器坏などが9点出土した。建物を構成する柱穴と接するようにみられるが、建物との関係は不明である。SX2から出土したのは土師質土器坏6である。位置的に複数の建物と重複するが、その関係は不明である。時期は15～16世紀に位置付けられる。

・古庄屋遺跡 SX2、SX3の2基が確認された。SX2からは土師質土器小皿が6点、SX3からは土師

質土器小皿が8点各々出土している。位置的には、屋敷地の北西部にあたる。両者の時期は、15世紀後半から16世紀にかけてのものと考えられる。

(3) III類

屋敷内の掘立柱建物を構成する柱穴から出土するものである。しかし、掘立柱建物跡の柱穴などから完形の土器が単独で出土する場合については、出土状態などが詳細に報告されていない場合が多く、今回の集成ではこの種のものがかかなり漏れているものと思われる。

・瀬戸遺跡(註15) 遺跡は玖珠町の丘陵上に位置するもので、2棟の建物柱穴から土器が出土した。6号掘立柱建物は南北に主軸をもつ2×1間の建物である。規模は20㎡余で、北東隅と北西隅の柱穴から完形土器が検出された。北東隅柱穴から白磁合子、土師質土器小皿が1点ずつ、北西隅柱穴から土師質土器坏が3点出土した。7号掘立柱建物も南北に主軸をもつ2×1間のもので、建物面積は28.4㎡である。土器が出土したのは北東隅柱穴で、土師質土器坏が4点検出された。両建物の土器とも12世紀後半から13世紀にかけてのものである。

・安平遺跡(註16) 遺跡は中津市に所在し、掘立柱建物4棟などが検出された。このうちの1棟には建物内に鍛冶炉がみられる。建物を構成する柱穴から土器が出土したのは建物1である。建物1は本遺跡で最も大型の建物で、四面に庇を持ち身舎面積62.15㎡の規模を有する。土器は身舎を形成する3本から出土したもので、いずれも柱穴底面に完形のまま置かれたような状態で出土している。出土土器は土師質土器坏と小皿で、時期的には14世紀後半に位置付けられる。

・伐株山城跡(註17) 遺跡は玖珠町の玖珠盆地を望む標高700mの山上に位置する。山上には一辺20～50mを測る方形の土塁遺構が7基みられ、各土塁遺構の中に掘立柱建物が配される。第1土塁遺構では2棟の建物柱穴から土器が出土している。4号建物は東西に主軸をもつ3×2間のもので、建物面積は約24㎡である。北東隅柱穴から完形にちかい土師質土器小皿1が出土した。小皿の口縁部のほぼ全周には、スズ状の付着物がみられる。6号建物は南北に主軸をもつ3×2間のもので、建物面積は約22㎡である。東側柱列の南から2番目の柱穴より土師質土器小皿1が出土した。第5土塁遺構では1号建物の柱穴から土器が検出されている。1号建物は東西に主軸をもつもので、東西4間、南北2間以上の規模を有する。口縁部の一部を欠いた土師質土器小皿が1点、南東隅の柱穴から出土している。

・古庄屋遺跡 建物1、建物4、建物6、建物7の柱穴から完形の土師質土器坏、小皿が出土している。建物1と建物6は13、14世紀代、建物4と建物7は15、16世紀代である。

3 土器祭祀遺構の検討

前段では、大分県内における古代・中世の土器祭祀遺構をI類、II類、III類に分類して整理した。ここでは、これら各類がどのような性格をもつかを考え、さらに各類のなかでのバリエーションや時代的な差異などについてみていく。

(1) I類

I類として分類した上牧ノ内I遺跡と虫喰谷遺跡は丘陵の中にあり、通常の集落でないのはもちろんのこと、周辺にも集落があったとは考えられないところである。これら遺跡の立地する松岡丘陵は、国府や大分郡衙の存在する大分川下流域の東側にある。松岡丘陵東側には海部郡へと続く大野川下流域の平野がみられ、丘陵は、両平野すなわち大分郡と海部郡をつなぐルート上にあり、大きな意味での境界をなす。道に係わる祭祀行為に加え、国府や郡衙を鎮護するための祭祀行為、あるいは宗教的な意味合いをもつものであった可能性も考えられよう。以上のようにI類は、通常の集落の外にみられるもので、屋敷地の地鎮というような個々の屋敷レベルを越えた単位での祭祀行為であったと考えられる。大まかに言えば、地域単位の祭祀として捉えることができる。今回は、土器を埋納する虫喰谷遺跡と土器を安置する上牧ノ内I遺跡を、同様な性格を有する遺跡として考えてきた。しかし、埋納と安置の違いが祭祀の目的などに大きな違いをもつものなのか今後の検討が必要と思われる。

時代的な観点からみると、類例は少数ながらも古代前半に位置付けられるものである。よって、少なく

とも大分市松岡丘陵では古代前半に盛行した祭祀行為で、古代後半以降は行われなかったと推定される。律令体制の盛期のみにみられるという時代的な流れを考えると、松岡丘陵での祭祀行為は古代律令体制と大きく係わるものであった可能性も否定できない。すなわち、律令体制下に特有な思想を背景に行われた祭祀であることが考えられる。しかし、その場合でも出土遺物が坏や小皿などに限られることから、国府や郡衙が直接的に係わったものであるかは疑問である。

(2) II類

II類については、古代から戦国期に及ぶものが認められる。これらについては、屋敷内での位置やその形態にバリエーションがみられることから、時代的变化や祭祀形態そのものに差異があるとも考えられるが、地鎮など大まかに屋敷の祭祀に係わるものとして理解される(註18)。以下、その内容を検討していく。

使用される土器の量についてみると、久末京徳遺跡や信重遺跡、古市遺跡のように古代では数十個に及ぶものがみられるなど、時期が上につれ使用される土器の量が多い傾向にある。この傾向は六田遺跡や深水邸埋納遺跡のように中世前半までは残るものの、中世後半になると猪野中原遺跡、小路遺跡、古庄屋遺跡などのように使用される土器は十個体以下に落ち着いてくる。加えて、土器の種類についてみてみると、古代には坏などの供膳土器に加え壺や甕もみられるが、中世以降は基本的に供膳土器のみになる。使用される土器の量や種類が時代により異なってくることから、具体的な祭祀の形態や方法に変化があったものと理解される。

次に、遺跡内における遺構の配置をみてみる。古代の久末京徳遺跡や信重遺跡では建物をコの字状配置した中央の空間部にみられるという共通性を読み取ることができる。このような明確な特徴は、遺構の性格を考えるのに示唆的である。これに対し、中世のものは明確な傾向をつかみにくく、配置についてはいくつかのバリエーションがあるようである。すなわち六田遺跡、植田市遺跡、猪野中原遺跡、古庄屋遺跡では、屋敷地の隅近くに配置される。この場合、中世前半の六田遺跡では東南隅に、中世後半の植田市遺跡、猪野中原遺跡、古庄屋遺跡では北西隅近くに配置されるものがみられる。また、屋敷の中央に配置されるものとして、猪野中原遺跡と久住町の小路遺跡がある。猪野中原遺跡のS X 0 5 0は屋敷中央付近に配置され、土壇に土師質土器5点を十の字状に配し各々に銭貨を3枚ずつのせるなど、他に比べ定式化した様相が認められる。

また、このような土器祭祀遺構のみられる遺跡は、古代・中世を通じて上位階層の屋敷と推定されるものばかりである。よって、これら祭祀行為は各時代とも上位階層と密接に係わり行われたものと考えられる。

以上からII類は、(1)古代、(2)中世前半、(3)中世後半の各段階に分けて整理することができる。(1)では上位階層の屋敷の中央空間部に配される傾向にあり、使用される土器は数が多く、供膳土器に加え壺や甕も使用される。(2)でも上位階層の屋敷で行われる。使用される土器は多いが、供膳土器のみになる傾向になる。配置される場所も屋敷地の隅にもみられるようになる。(3)の段階も引き続き上位階層の屋敷でみられる。使用される土器は坏、小皿などの供膳土器のみで、量も十個体以下になる。屋敷内での位置は中央であったり、隅近くであったりする。隅近くにあるものは北西隅近くにあるものが多い傾向にある。また、単に土器を集めて埋納したのではなく、明確な意味をもち意識的に土器を並べるような定式化したものもみられる。

(3) III類

掘立柱建物を構成する柱穴からの出土が明確に報告された例は意外と少ない。また、報告されたものでも柱穴の埋土から出土したのか、抜き跡から出土したのかが明らかでない。そのため、柱穴出土の土器が掘立柱建物の建築時の祭祀行為なのか、廃棄時の祭祀行為なのかを明確にすることができない。いずれにしても完形の土器が柱穴内から出土するという事は、偶然ではなく意識的な埋納であると考えられ、掘立柱建物に係わる祭祀であったものと理解する(註19)。

類例が少ないが、現状では古代のものは確認されていない。古代における掘立柱建物に係わる祭祀の状況は、今後の資料の増加をもって判断したい。今回確認されたものは中世のもので、埋納された土器は数個体以内で、大部分が土師質土器の坏や小皿である。これらが確認された遺跡はII類のように上位階層の屋敷地のみでなく、中位階層や山城でも認められ、III類の祭祀行為がII類よりも広い階層で行われていたことが分かる。また、建物

の規模については、大規模なもののみにもみられるというようなことはないが、各遺跡とも遺跡の中において規模の大きな建物が含まれる傾向が認められる。

4 おわりに

小稿では大分県内の土器祭祀遺構について、管見のもののみを取り上げて検討を行い、その概要を述べた。資料に漏れがあると思われるが、稿を改めて銭やその他を含む祭祀遺構とも併せて検討を行いたいと考えている。また、今回取り扱ったものとは別に、土器を一括して廃棄したと思われる遺構もみられる（註20）。遺構は土壙や溝などであったりするが、厳密には本稿で扱ったものと区別するのが困難なものもある。加えて、廃棄されたものでも一連の祭祀行為の中、あるいは祭祀行為後の廃棄だった可能性を有するものがあることを考えれば、このような遺構の位置付けについても考えていく必要があるだろう。

註

- (1) 森 郁夫 「古代の地鎮・鎮壇」『古代学研究』28・29 1984
木下密運 「中世の地鎮・鎮壇」『古代学研究』28・29 1984
水野正好 「近世の地鎮・鎮壇」『古代学研究』28・29 1984
- (2) 久世康博 「平安京の埋納遺構」『考古学論集』3 1990
鳴谷和彦 「地鎮めの様相」『関西近世考古学研究』Ⅲ 1992
- (3) 山元敏裕 「古代から中世にかけての土器埋納遺構」『香川考古』6 1997
降矢哲夫 「博多遺跡群における地鎮め遺構について」『博多研究会誌』8 2000
- (4) 甲斐寿義 『上牧ノ内Ⅰ遺跡』スポーツ公園内遺跡群発掘調査報告書 大分県教育委員会 1999
- (5) 後藤一重 『虫喰谷遺跡』大分県教育委員会 2001
- (6) 松本啓子 『久末京徳遺跡』安岐町教育委員会 1991
- (7) 後藤一重 『香々地の遺跡』Ⅰ 香々地町教育委員会 1994
- (8) 宮内克巳・後藤一重 『田村遺跡・池在遺跡・古市遺跡・一万田遺跡』朝地町教育委員会 1994
- (9) 金田信子・永松みゆき・藤本啓二 『六田遺跡・前田遺跡・秋国遺跡・外園遺跡』国東町教育委員会 1997
- (10) 村上久和・吉田寛 『三光村の遺跡』三光村の遺跡 1989
- (11) 後藤一重 『香々地の遺跡』Ⅱ 香々地町教育委員会 1995
- (12) 吉田寛 『植田市遺跡』大分県教育委員会 1994
- (13) 塩地潤一 『猪野・中原遺跡』大分市埋蔵文化財年報8 大分市教育委員会 1997
- (14) 後藤一重 『小路遺跡 上屋敷遺跡』久住町教育委員会 2000
- (15) 染谷和徳 『瀬戸墳墓群 瀬戸遺跡 帆足城跡』大分県教育委員会 2000
- (16) 小林昭彦 『中津市伊藤田地区遺跡群』大分県教育委員会 1987
- (17) 渋谷忠章 『伐株山城跡』玖珠町教育委員会 1984
- (18) Ⅱ類については屋敷に係わる地鎮などの祭祀であるとしたが、なかには掘立柱建物に近接してみられるものもあり、一部は個々の掘立柱建物に対する祭祀であった可能性もある。その場合はⅢ類と同じ性格をもつものとなるが、現状ではⅡ類の中を区別するのは難しい。
- (19) Ⅲ類としたもののほか、掘立柱建物を構成しない柱穴から完形の土器が出土する場合が確認される。今回はこれらについては全く触れていない。このような柱穴が本来的には掘立柱建物を構成するもので、調査において建物を復元するにいたらなかっただけなのか、もともと建物を構成するものではなく土器埋納用に柱穴状の深い遺構を掘ったものかは判断しかねる。
- (20) 例えば、宇佐宮弥勒寺にみられるSK3、SK4、SK5、SK6などの遺構がこれに相当するものと思われる。
甲斐忠彦・真野和夫・宮内克巳・後藤一重 『弥勒寺』大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館 1989

2 古庄屋遺跡出土土器の編年的位置付けと遺跡の性格

1 土器の編年

古庄屋遺跡出土土器は、大きく中世前半（Ⅰ期）と中世後半（Ⅱ期）のものがみられる。

(1) Ⅰ期の土器編年（第128図）

・ⅠA期

この段階は土壙11、土壙33の土器が相当する。土師質土器杯は杯Aのみで、体部が糸切りの底部から直線的あるいは丸みをもち立ち上がり、口縁に向かい斜方向にのびる。体部はわずかに内湾気味のもの、直線的なものがある。口径はいずれも14cm以上で、本遺跡出土の杯のなかでは口径が最も大きい。なかには15cmをこすものもあるが、その数は少ない。器形的には、浅めの杯A1に対しやや深めの杯A2がみられる。前者の器高が3cm未満で、後者は3cmをこえる。土師質土器小皿については、共伴の良好な資料がないが、遺跡内で出土する口径8cmをこえるものは確実にこの段階にあたるものと考えられる。

また、瓦器椀については内外面に比較的ていねいなヘラミガキが施されるものが伴出する。瓦器椀は小倉正五氏の分類によるⅠ型式にあたる（註1）。

ⅠA期は12世紀末を含むものの、全体としては13世紀初頭から前葉に主体を置くものと思われる。しかし、遺跡内でこの段階の遺物は非常に少量である。

・ⅠB期

土壙43から出土の土器をこの段階にあてる。土師質土器杯は杯Aのみで構成される。しかし、前段階にみられた器高のやや高い杯A2はみられない。器形的には、糸切りの底部から短めの体部が直線的あるいは丸みをもち立ち上がる。体部は斜方向に口縁部にいたるもので、ⅠA期と同様な形態を呈する。口径は13cm代、器高は2cm代前半と、ⅠA期に比べると確実に小型化が進行している。

土師質土器小皿は底部がいずれも糸切りで、体部が斜方向に直線的に立ち上がる小皿Aのみが確認される。口径は7cm代で、ⅠA期からみると口径の小型化が進んでいるものと推定される。

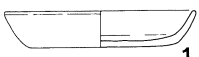



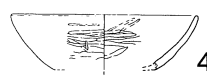

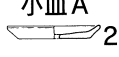

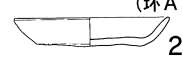
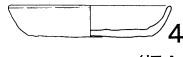

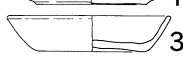
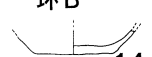
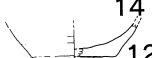
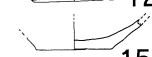
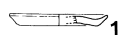



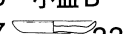
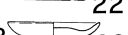
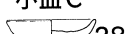


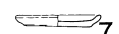
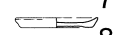


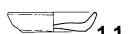
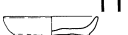
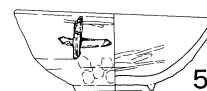

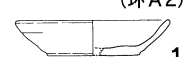



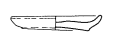
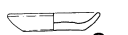





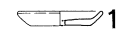




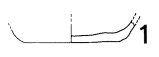

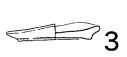
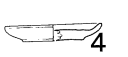
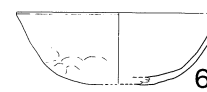
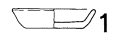

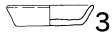
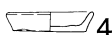

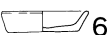

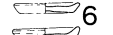
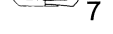
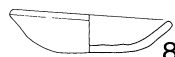
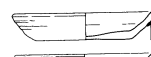

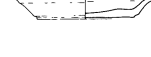



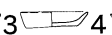


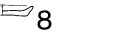



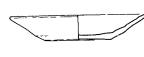

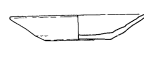
瓦器椀は、外面が上半に粗なヘラミガキ、下半に指オサエ、内面が体部に粗なヘラミガキ、内底面に雑な同心円状のヘラミガキが施される。瓦器椀は小倉正五氏の分類によるⅡb型式にあたる（註2）。

ⅠB期は13世紀中葉に位置付けられる。

・ⅠC期

土壙2、土壙21、竪穴3の土器がこの段階に相当する。この段階の大きな特徴として、土師質土器杯において杯Aに加え、新たに杯Bが出現する。杯Aには器高の低い杯A1と器高の高い杯A2がみられる。口径は12cm代のものが現れる。器高は杯A1が2cm代前半、杯A2が2cm代後半から3cmに及ぶ。杯A1は糸切りの底部から体部が内湾気味に口縁部にいたる、これに対し杯A2は体部内湾気味なものに加え直線的なものや外反気味のものもみられる。前段階に比べ杯A2の占める割合が増加した傾向にある。杯Bは杯Aに比べ底径が2～3cm小さく、器高が1～1.5cm高い。そのため、杯Aに比べ明らかに器高が高く、深めの印象を受ける。杯Bの口径は11.5cm～12.5cm、器高4cm内外である。土器の色調は黄白色系統の白っぽい色のものが多く、杯Aの大部分が赤褐色を呈するのと大きな違いをみせる。杯Bは、同じ豊前に属する宇佐地域はもとより（註3）、大分県内における同時期の遺跡ではこれまで確認されていない（註4）。佐藤浩司氏によれば、豊前北部の北九州市域では13世紀中頃～後半に、底径が小さく器高の高い杯が出現するという（註5）。佐藤氏はこの杯をDタイプとしているが、本遺跡の杯Bと特徴が酷似する。杯Bは豊前北部地域との関係で考えられるものであろうか。

土師質土器小皿は小皿Aに加え、体部が内湾気味に立ち上がる小皿Bと、直立気味に立ち上がり器高のやや高い小皿Cがみられる。小皿Aの口径はⅠB期と顕著な差はみられないが、6cm代のものがやや増えるなど小型化の傾向がわずかにうかがえる。小皿Bは、底部が体部に比べ明らかに厚いものがみられるようになる。切り離し

I A 期	坏A (坏A1) 土壤33  1 土壤11  1  3 (坏A2)  2	瓦器碗  4					
	土壤43 (坏A1)  1	小皿A  2	 3				
I C 期	土壤2 (坏A1)  2  4 (坏A2)  1  3	坏B  14  12  15	小皿B  16  17  18  19	小皿C  22  23  28	豎穴3  1  2	 7  8  9  13  11  12	 5  6
	土壤21 (坏A2)  1  2	建物1 (坏A1)  1  5	 7  8	小皿D  11	 10  16		
I D 期	溝1  1  4	 13  14  15	 10  16				
I E 期	土壤15  1  2  3  4	 6					
II 期	SX2  1  2  3  4  5  6	 5  6  7	 8				
	溝2  1  2  3  4	 1  2  3  4  5  6  7  8	 18  19				
	SX3	 18  19					

第128图 古庄屋遺跡出土土器編年表 (S=1/6)

の際に、意識的に厚く切り離したものであろう。口径はI B期に比べ顕著な差はみられない。小皿Cは底部からの立ち上がり部は丸みをもつものの、体部は直立気味になり口縁にいたる。器高は小皿A、小皿Bに比べると0.5cmほど高い。また、口径は7.1cm～7.6cmを測る。

瓦器碗については、器面調整からみるとI B期のものとほとんど差異を見いだすことができず、小倉正五氏の分類によるII b型式にあたる(註6)。しかし、器形的には、I B期のものが高台部から体部がほぼ直線的に口縁にいたるのに対し、I C期のものは体部下半に丸みをもつようになる。これに関連するものと思われるが、器高はI B期のものの大半が5cm代後半～6cm代であるのに対し、I C期のものは5cm代前半のものもみられるなど明らかに低平化がすすむ。概して、I C期のものはI B期のものに比べやや雑で、個体差が著しい。

I C期は13世紀後葉に位置付けられる。

・ I D期

建物1柱穴出土一括土器、溝1の土器をこの段階にあてる。土師質土器坏は坏Aと坏Bがあるが、坏Aはあまり目立たなくなり坏Bが主体となる。坏Aのうち器形を確認できるのは坏A1のみで、口径は12.0cmである。坏Bは口径11cm代のもので多くなり、I C期に比べ小型化が認められる。

土師質土器小皿は、新たに小皿Dが出現する。小皿Dは口径8cm、器高2cmこえるやや大型のものである。体部はわずかに内湾気味に斜方向に立ち上がる。小皿Aは口径6cm代のものもあるが、量的に少ないため明確な傾向は読みとりにくい。小皿Bは前段階同様、体部に比べ底部が厚い特徴を有する。ただ、口径の面では際だった差異は認められない。

瓦器碗は小倉正五氏の分類によるIII型式にあたり(註7)、内外面ともヘラミガキがみられなくなり、高台も著しく退化する。器高も5cmを割り、前段階にみられた低平化の傾向がさらにすすむ。

I D期は14世紀前葉に位置付けられる。

・ I E期

土壇15の土器がこの段階に相当する。土師質土器坏は良好な資料に乏しいものの、坏Aと坏Bがみられる。両者とも口縁部を欠くが、底径などからみて小型化が進行している様子がうかがえる。

土師質土器小皿は小皿Aと小皿Bがみられる。いずれも底部が厚い。

瓦器碗は小倉正五氏の分類によるIV型式にあたり(註8)、底部の高台が完全になくなる。

I E期は14世紀中～後葉に位置付けられるが、この段階のものは土壇15を除き他には全く確認されていない。

(2) II期の土器編年(第128図)

この段階の土器は、S X 2、S X 3、溝2及び柱穴から出土している。以下、それらについての検討を行う。

S X 2は、土師質土器小皿のみが6点出土している。いずれも体部直立気味で、口径6.6～7.0cm、器高1.6～1.8cmを測る。これと同様な資料として、大分市植田市遺跡S K 3出土資料(註9)がある。S K 3も土器一括埋納遺構で、土師質土器坏と小皿が出土している。このうち小皿は体部直立気味の器形を呈し、口径7cm前後、器高2cm前後を測るもので、本遺跡S X 2出土土器に極めて類似する。植田市遺跡S K 3出土資料は坏の形態などから15世紀後半に位置付けられている。

S X 3も土器一括埋納遺構で、土師質土器小皿が8点出土している。器高の高いものと低いものの2タイプがあり、前者は口径5.0～5.4cm、器高1.1～1.2cm、後者は口径4.5～5.0cm、器高0.7～0.8cmである。前者は器形的にS X 2出土土器と同じ範疇に入ると思われる。法量の違いを時期差とするのか、あるいは同時期におけるバリエーションとしてとらえるのかで理解が異なってくるが、積極的に時期差として考えれば、S X 2に後出するものと思われる。

溝2出土土器は、完形品も含まれ、溝内の比較的近接した範囲から出土した。このため、一括性は高いものと考えられる。土師質土器坏は器高の低いものと高いものがある。前者は口径11cm代、器高2.1～2.4cmで、体部の一部にはロクロ痕跡がみられる。後者は口径12.0cm、器高2.9cmで、幅広のロクロ痕が残る体部が斜方向にのび

る。後者については久住町小路遺跡で同様なものが出土しており、15世紀の後半に位置付けられている（註10）。土師質土器小皿は、S X 3出土の器高が低いタイプに類似する。口径5.3～5.4cm、器高0.8～0.9cmを測る。瓦器椀は器高が低く丸底をなすもので、豊前における瓦器椀の最終形態を呈するものである。口径13.0cm、器高2.6～3.6cmである。中津市長者屋敷遺跡S K 3からは、瓦器椀と土師質土器小皿が出土している（註11）。瓦器椀は2点で、口径12.4～12.6cm、器高3.0cmである。また、土師質土器小皿は口径5.0cm、器高0.8cmを測る。瓦器椀と土師質土器小皿の法量から比較すると、古庄屋遺跡溝2出土のものは長者屋敷遺跡よりも古相の様相を呈する。

柱穴出土遺物のうち注目されるのは、薄手で体部が大きく斜方向に開く土師質土器である。色調も白色系を呈し、他の土師質土器とは明らかに異なる。口径20.0cmと10.8cmのものが出土しており、法量分化の進んだ状況がうかがえる。これに類似する土器は、山口県の大内氏館跡などに求めることができるが、豊前北部の北九州市域でも類品が出土している（註12）。

以上のようにⅡ期は、小皿のみなどセット的に良好でないものが多く、加えて年代決定の根拠になるものが乏しいため、全体として15世紀後半～16世紀前半の幅でとらえておく。

2 遺跡の性格

古庄屋遺跡が立地する場所は、前面を跡田川と西谷川に画され、背後に山塊をもつ要害の地であるとともに、西谷と東谷が出会う交通の要衝でもある。Ⅰ期には遺跡の南側と北側に溝を、また東側の跡田川沿いには柵列を配し屋敷地を画する居館が築かれる。地形の関係からきちんとした方形にはならないが、遺跡の南側（溝1）と北側（溝6）に平行に配された溝間の長さはほぼ100mを測る。規模的には、一辺1町クラスの居館に匹敵するものである。居館内では、中央に掘立柱建物が重複しながらみられ（建物1、建物3、建物5、建物6、建物8、建物9、建物10）、建物群の西側には多くの土壇や井戸が、また建物群の東南側には竪穴がほぼ同位置で配される。加えて、南側の溝の内側には溝に沿うように土壇墓が規則的に並び、墓域として利用されている。以上のように、居館内の諸施設は、居館が存続した全期間にわたって整然とした空間利用がなされた様子がうかがえる。このうち注目されるのは土壇墓である。土壇墓は屋敷を区画する南側の溝の内側に、溝に沿うように配置されている。溝の埋土を観察すると、溝の南側からの流れ込みが顕著で、溝の南側（居館の外側）に土塁があったことが分かる。地形的にみて居館の正面入り口は、館の北側にあったと推定され、土壇墓のある墓域は館の最も奥に位置していたことになる。土壇墓は、主軸を南北にもつものと東西にもつものが一定の間隔をもち整然と交互に配置されており、屋敷墓として厳格な管理と利用がなされていたことが分かる。

また、居館の南に隣接して小字「浄正」があり、地元の伝承では浄正寺という寺院が存在したという。さらに、居館の北側には小字「前田」もみられ、居館周辺の景観を考えるうえで示唆的である。居館は12世紀末～13世紀前葉のⅠA期に成立し、14世紀前葉のⅠD期には溝がほぼ埋没しており、この段階には溝により周囲を画された居館は終焉をむかえる。概ね鎌倉時代全般にわたり存続していたことが分かる。しかし、居館が廃絶した後のⅠE期にも遺構・遺物がわずかに確認されており、極めて小規模ながら屋敷が存在したものと思われるが、大規模な居館の面影はない。

豊前国では源平の戦いの後、東国の下野国御家人であった宇都宮信房が、建久3年（1192）に頼朝の下文により豊前国伊方荘地頭職を安堵された。信房はこのほかにも、豊前国柿原名地頭職、豊前国仲津郡城井郷、豊前国税所職などを給与されたらしく、以後多くの庶家を分出しながら宇都宮一族は豊前国内に強い影響力をもつようになる。豊前国のうち現在大分県になっている宇佐郡、下毛郡の地は、平安時代まで宇佐大宮司一族やその関係諸氏が勢力をもつ地域であったが、鎌倉時代になり新たに入部した東国御家人一族が幕府の力を背景に急速に勢力を強めていったであろうことが推測される。このような目で古庄屋遺跡をみると、大規模な居館で、立地的にも西谷と東谷を押さえる位置にあることから、本地域における最も有力な支配層が居館の主であったと考えるのが妥当であろう。居館の成立はⅠA期の12世紀末以降と推察され、同地に前身の屋敷などが確認されていないことから、ある意味において唐突な感さえ受ける。当時の時代背景を考えると、居館の出現には政治的な背景が

色濃くみえる。すなわち、前代から下毛郡地域で勢力をもっていた宇佐宮関係諸氏は各々独自の支配体制を確立しており、突然新たな場所に大規模な居館を構える必要性は低いと思われ、それを考慮にいれると既存の古い勢力とは別の勢力による居館の築造が想定される。古庄屋遺跡においてIC期に出現する坏Bは、前代から関係の深かった宇佐地域をはじめとする大分県内ではこれまで確認されておらず、むしろ豊前北部地域にその類例を求めることができる。宇都宮氏一族が鎌倉時代に豊前国全域に大きな勢力をもったことも考えあわせると、本居館は旧勢力の宇佐宮関係諸氏とは異なる新興勢力による築造である可能性が高い。居館規模や場所から考えて、本地域を掌握する最重要拠点であったと推測され、宇都宮氏の一族に属するような勢力による新たな支配機構の中核としての役割を担っていたものと思われる。

次のⅡ期は、Ⅰ期の終了後、約百年の空白を挟み15世紀後半から始まる。主な遺構は建物2、建物4、建物7、溝2、溝3、及び土器埋納遺構であるSX2、SX3である。Ⅱ期はⅠ期と異なり、屋敷を画する施設が明確には確認されていない。しかし、場所的には前述したように自然の要害の地であり、あえて屋敷の区画施設を設けなくても一定の防御性、独立性を備えており、屋敷の区画施設の有無そのものがストレートに遺跡の評価に結びつかないことも考えられる。遺構的には調査区全体に広がるが、Ⅰ期に比べ遺構・遺物の質と量が劣る印象を受ける。だが、調査区が道路予定地部分のみのため全容が不明な部分もあり、Ⅱ期の遺構の性格は来年度予定されている西側隣接地の調査成果とも併せて検討する必要があるだろう。遺物で注目されるのは周防国などにその系譜が求められる土師質土器である。15～16世紀にかけて、豊前国がしばしば大内氏や毛利氏の支配を受けていた事実を考えれば、このような土器の出土はむしろ当然のことかもしれない。

註

- (1) 小倉正五「宇佐地方の瓦器碗について—型式・編年に関する試案—」古文化談叢14 1984
- (2) 註1に同じ
- (3) 宮内克巳「出土土器の編年」『弥勒寺』大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館 1989などにみられるように、宇佐地域では編年が整備されているが、本遺跡の坏Bは確認されていない。
- (4) 坪根伸也、塩地潤一「豊後国の土器編年」大分・大友土器研究会論集 2001
- (5) 佐藤浩司「北九州市域の15～16世紀の土師器」『大宰府陶磁器研究』1995
- (6) 註1に同じ
- (7) 註1に同じ
- (8) 註1に同じ
- (9) 吉田寛編『植田市遺跡』大分県教育委員会 1994
- (10) 後藤一重編『小路遺跡 上屋敷遺跡』久住町教育委員会 2000
- (11) 高崎章子編『長者屋敷遺跡』中津市教育委員会 2001
- (12) 註5に同じ

写 真 图 版



古庄屋遺跡遠景（東から）



古庄屋遺跡遠景（南から）



古庄屋遺跡全景



溝1と土壇墓群



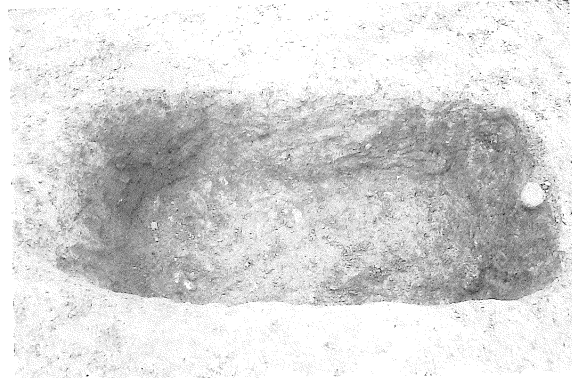
遺跡南側の板碑



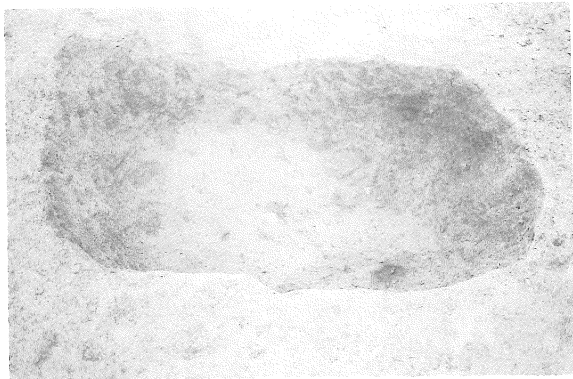
遺跡南側の板碑と石塔



土壙墓1



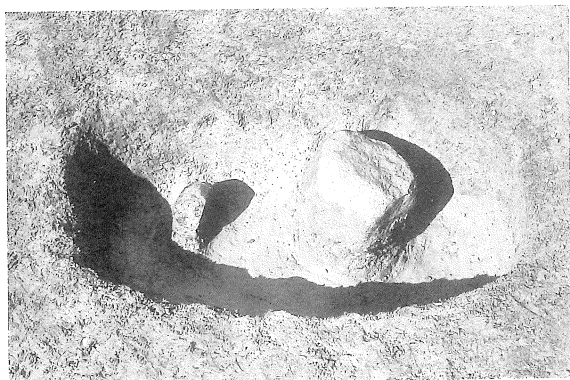
土壙墓2



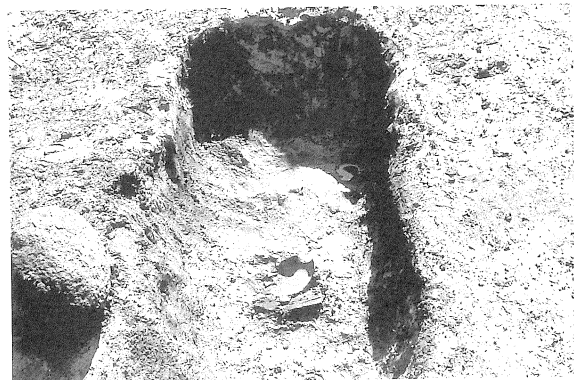
土壙墓3



土壙墓4



土壙墓5



土壙墓6



土壙墓7



柵列1



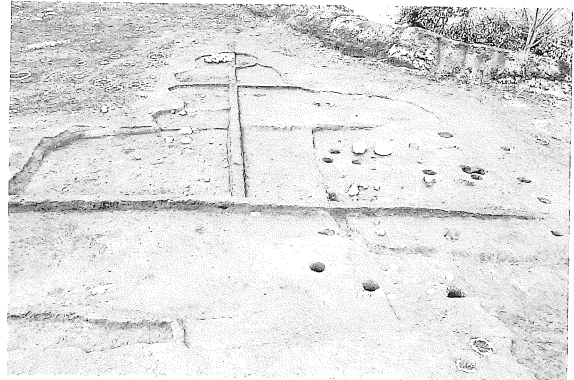
土壇2



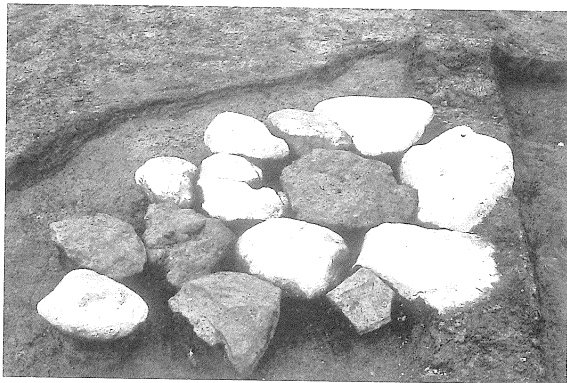
土壇群



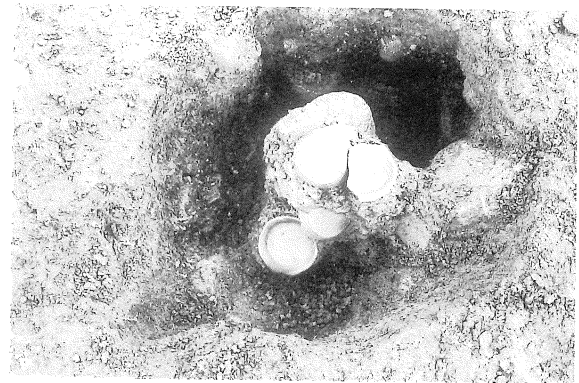
土壇発掘状況



竪穴1~4



SX1



SX2



井戸1 (全景)

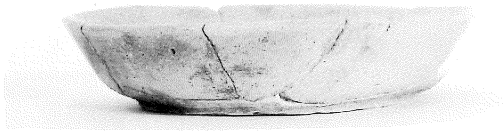


井戸1 (部分)



井戸1 (部分)

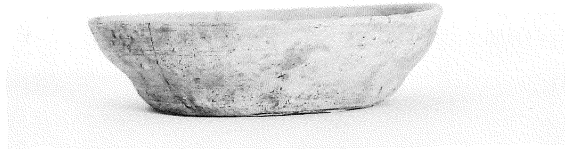
土壙2 土師質土器杯 (第40図1)



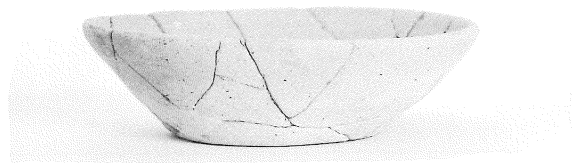
土壙2 瓦質土器鉢 (第42図39)



井戸1 土師質土器杯 (第108図1)



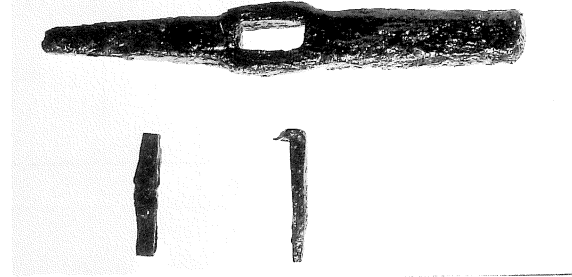
土壙13 土師質土器杯 (第52図1)



土壙21 瓦器椀 (第63図5)



柱穴出土 金鍬 (第125図52)



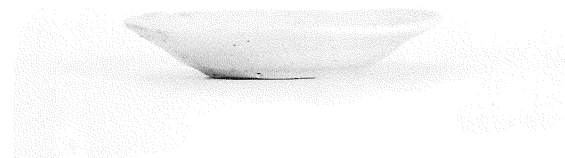
溝2 土師質土器杯 (第117図1)



溝2 瓦器椀 (第117図8)



柱穴出土 土師質土器杯 (第124図19)



柱穴出土 土師質土器杯 (第124図18)



S X 2 土師質土器小皿 (第121図)



S X 3 土師質土器小皿 (第122図)



報告書抄録

フリガナ	コジョウヤイセキ
書名	古庄屋遺跡
副書名	国道212号（中津日田道路）道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	大分県文化財調査報告書
シリーズ番号	第141輯
編著者名	後藤一重
編集期間	大分県教育委員会
所在地	〒870 - 0021 大分市府内町3丁目10番1号 〒870 - 1113 大分市大字中判田ビワノ門1977番地 大分県文化財資料室
発行年月日	2002年3月29日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
古庄屋遺跡	本耶馬溪町落合			33° 31′ 44″	131° 31′ 44″	平成13年1月9日 ～ 平成13年3月13日	3,000㎡	道路建設
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
古庄屋遺跡		中世		溝6条 掘立柱建物10棟 土坑50基ほか		土師質土器、瓦器椀、 輸入陶磁器ほか		

古庄屋遺跡

国道212号（中津日田道路）道路改良工事に

伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成14年3月29日

発行 大分県教育委員会

印刷 極東印刷株式会社